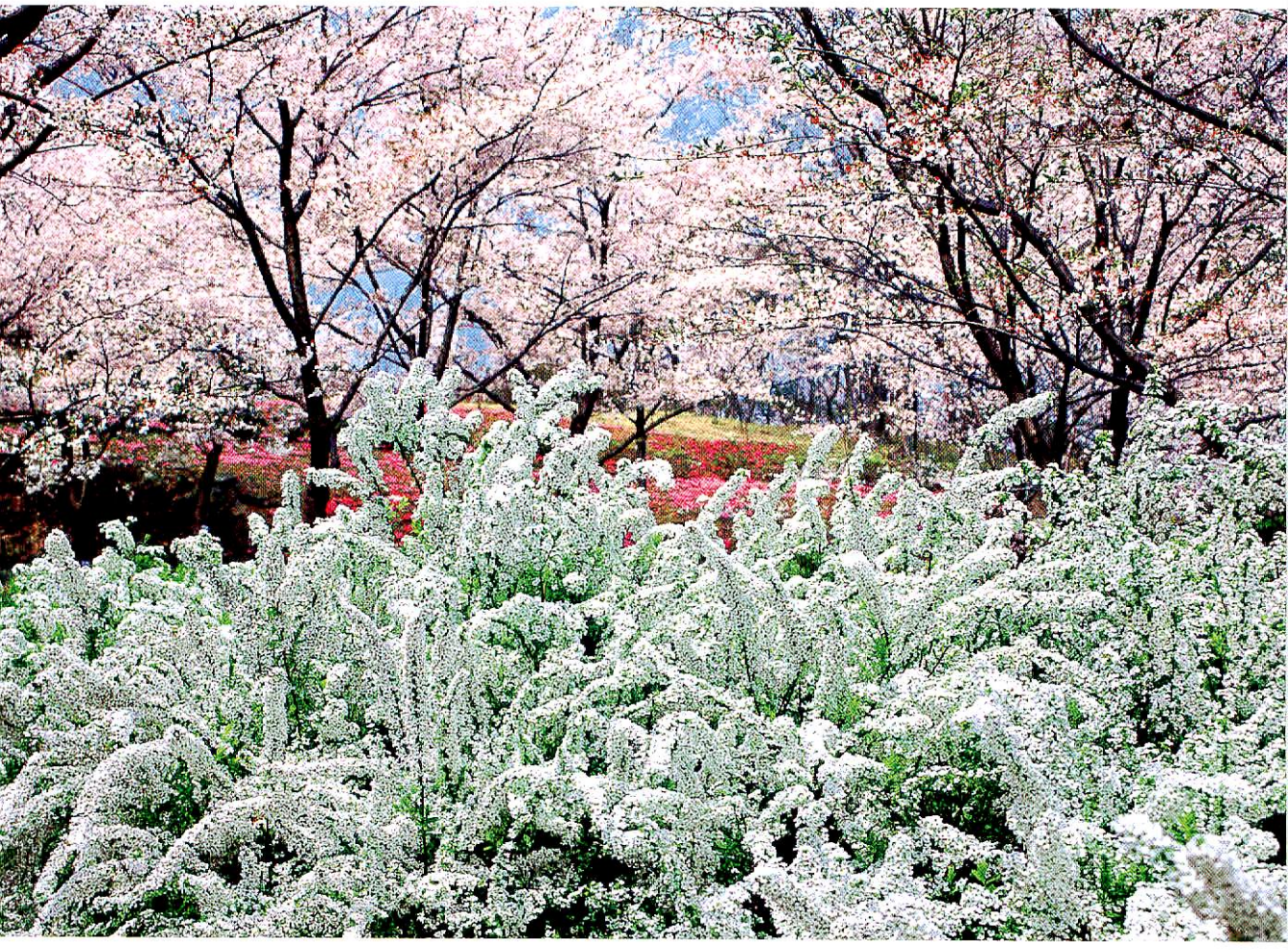


大白蓮華

The Daibyakurenge

No.735 | 2011 4

巻頭言

創価の勇気は無敵なり

創価学会名誉会長　池田大作

仏法は
勝負なりせば
勝ちまくれ
勇気と祈りで
歴史残せや

「勇気こそは、人生と人間を救うことのできる唯一のものなのである」と、デンマークの大哲学者キルケゴールは言った。

勇気なくして、人生は開けない。

勇気なくして、人間は救えない。

日蓮大聖人は、青年・南条時光のお母さんに仰せになられた。

「夫れ浄土と云うも地獄と云うも外には候はず・ただ我等がむねの間にあり」「法華経をたもちたてまつるものは地獄即寂光とさとり候ぞ」（1504ページ）

小さな自分の苦しみに囚われていると、心は狭い地獄界に閉ざされたままである。しかし、心の奥深くには、大海原よりも、大空よりも壮大な仏界の境涯が広がっている。その大いなる仏の生命を湧現して、現実社会に寂光土を築きゆく力こそ、信心の勇気なのだ。

師・戸田城聖先生は語られた。

「仏の勇気は、一切の不幸をはね返す。悪鬼魔民さえも、仏法のために働かせる。自分から勇んで躍り出

キルケゴールの言葉は、浅井真男・志波一富・秉田光行訳「あれか、これか」（白水社『キルケゴール著作集4』所収）

常勝将軍ナポレオンの如く、われらは栄光の5月3日へ、前進、また前進！（池田名誉会長撮影）

れば、いまだかつてない突破力が湧いてくるのだ」と。

わが師が誓願された広宣流布の大目標を実現するため、私は常に激戦の主戦場へ飛び込んでいった。

若き命に持てる武器は、ただ一つ――。勇気ある信心である。

昭和三十一年、関西では、けなげな同志と、未聞の民衆城の大建設に挑んだ。

不可能を可能にせんとする勇戦のうねりの中で、一人また一人と、わが友が苦悩の宿命を打開し、生き生きと幸福勝利の実証を示していくことが、何よりの喜びであった。

釈尊の遺言の一つに、「父母の心平等ならざるには非ず、然れども病子に於ては心則ち偏に重きが如し」（1253ページ）とある。

仏の慈悲に、分け隔てはない。しかし、悩める人、逆境と戦う人にこそ、格別に深く注がれる。

どんな人も見放さない。決めつけない。切り捨てない。信じ抜き、手を差し伸べて、仏性を呼び起こす。これが仏法の人間主義だ。

迷える心に勇気の一歩を踏み出させる力は、真心の励ましである。励ましが勇気を生む。ここに、創価の世界の限りなき勇気の連鎖がある。

昭和三十五年の十一月、長野支部の結成大会で、固い握手を交わした忘れ得ぬ地区婦人部長がいる。実に四百世帯を超える弘教をされ、病気も経済苦も克服された。

この信越の母は語っておられる。

「すばらしい信心ができたのです。怯んでなどいられません。何があろうと仏法は勝負です。師と共に戦い、勝つために、私は生まれてきました。勇気があれば、十倍、百倍の力が出ます」

母の勇気に敵うものはない。偉大な母たちの頭に、わが後継の青年部は勝利の宝冠を捧げてもらいたい。

南米アルゼンチンの友も、「全員が壁を破ろう！」と深刻な不況を乗り越えながら、四年間で座談会の参加者は五倍に広がり、本年三月の青年平和文化祭を大成功で飾られた。

恩師の言葉が蘇る。

「勇気が慈悲に通ずる。勇気で人を救い、社会を救うのだ。偉大な闘争をやろうではないか！」

師弟不二
無敵の記別を
いま君に
断固勝ち抜け
常勝創価と

アルゼンチンを初訪問。未来部の友に「みんなの力で、世界一、素晴らしいアルゼンチンになることを信じます」と。今、この中から新時代を開く青年リーダーが澎湃と（1993年2月）

未来を創る　小さな約束

「池田名誉会長と未来部」

少年少女の代表と記念のカメラに納まる池田会長。後に、この日が「青森の日」となった（昭和46年6月13日）

青森県に深刻な冷害がもたらされた昭和46年6月――。池田先生は、青森を訪問され、地元高校の体育館で3千人を超えるメンバーと記念撮影に臨まれるなど、一人一人を抱きかかえるように励ましてくださいました。

感動の集いが終わり、先生が外に出ようと、体育館の扉を開けたその時でした。扉の向こうに一人の女子中等部員が立っていました。

「先生、八戸へ来てください」と少女。先生は「よし、分かったよ」と返答、少女の手を握り、「創価大学にいらっしゃいね」と励まされ、会場を後にされました。

その日の夜――。未来部の担当だった私の所に連絡が入りました。急遽、明日、先生が八戸に行かれることになったというのです。驚きました。予定では、先生は東北文化会館で行われる会合に出席するため、仙台に移動することになっていたからです。

翌日、先生が八戸会館に到着したのは、正午前でした。先生が仙台の会合に出席するには、午後1時半過ぎの列車に乗らなければなりません。滞在時間は約1時間。それでも先生は出発時間ギリギリまで、八戸の同志を励まされたのです。

あとで分かったことですが、あの時、八戸から駆けつけた少女の父親は病に倒れ、明日をも知れぬ容体でした。母親は必死に祈り、戦い、少女もまた、先生の指針を〝心の支え〟に、懸命に勉学に励んでいたのです。先生は、そうした少女の思いに応え、約束を果たしてくださったのです。

この事実を知った読売新聞の記者が、聖教新聞に綴りました。「小さな約束が（池田先生の世界では）大切にされている」と。

後日談ですが、その少女は、先生に誓った通り、創価大学への進学を果たしました。少女の父親も病魔に打ち勝ち、元気に広布に戦えるまでになりました。

一人の少女の心を大きく受け止め、応えてくださる先生の誠実さに、私は感動を禁じ得ません。

（青森池田県副婦人部長　間山治子）

2 巻頭言
創価の勇気は無敵なり 池田大作

6 **未来を創る** 池田名誉会長と未来部

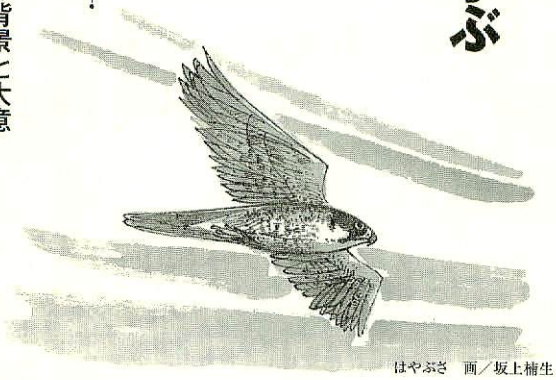
8 企画「創立80周年から100周年へ」
鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥
——会長講義「生死一大事血脈抄」

38 池田名誉会長講義
勝利の経典「御書」に学ぶ
兵衛志殿御書

52 アジア広布新時代へ
池田先生と香港・マカオ
創価学会インタナショナル副会長 池田博正

60 **あしおと** ランドセル 変わりたい
瀬戸の潮風 弘くんに感謝！

拳読御書の解説
聖人御難事
68 拳読御書の背景と大意
70 座談会 拳読御書
72 研修教材



はやぶさ 画／坂上楠生

76 婦人部グループ学習の参考に
御義口伝

80 **社会で光る**

82 模範の地域を追って
師弟の勝利城
山形・蔵王支部

92 シリーズ
POWER TO THE PEOPLE!
青年は変革力
本当の生きがいを見つける
語る——野田正彰 関西学院大学教授
挑む——私のチャレンジ・ノート
学ぶ——池田名誉会長の言葉から

110 **征け！フレッシュマン**
——新社会人へのアドバイス——

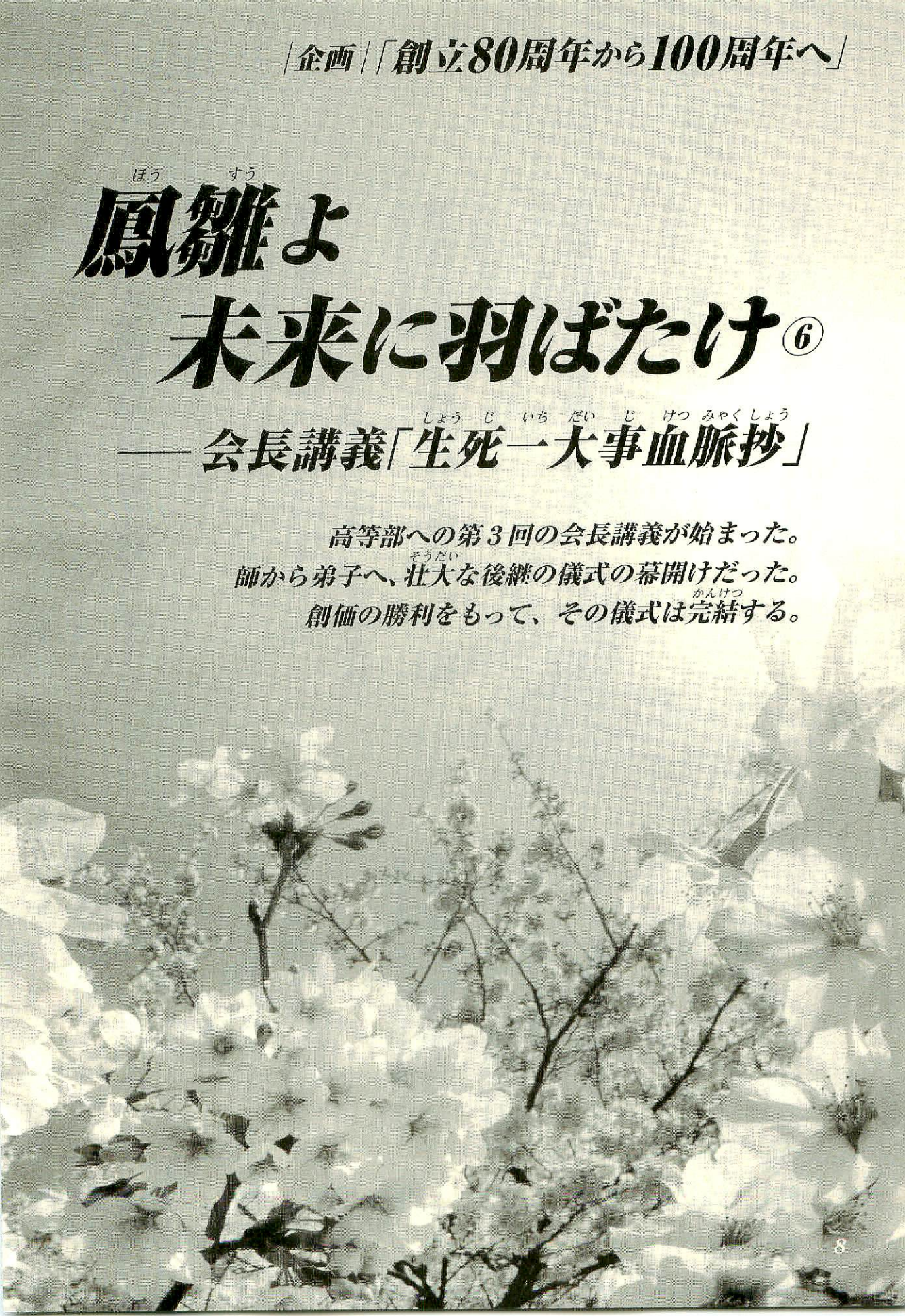
116 **私が信心を継承した時**

118 **読者の広場**

鳳雛(ほうすう)よ 未来に羽ばたけ⑥

――会長講義「生死一大事血脈抄(しょうじいちだいじけつみゃくしょう)」

高等部への第3回の会長講義が始まった。
師から弟子へ、壮大(そうだい)な後継の儀式の幕開けだった。
創価の勝利をもって、その儀式は完結(かんけつ)する。



太陽を全身に浴びて、万朶と咲き薫れ！

©Mitsushi Okada/orion/amgraimages

7年後の儀式

昭和41年3月――。

総務として実質的に創価の一切の指揮を執り始めて7年になろうとしていた。

7年――。

あの「3・16」の儀式も、恩師・戸田第2代会長が会長に就任して、同じく7年になる時だった。

「3・16」は、恩師がその不惜の精神を愛弟子に伝えんがための儀式であった。

「随筆　新・人間革命」には、こう綴られている。

「（戸田）先生から私へ、広宣流布の印綬が渡される二人の式典であり、師弟の不二の儀式であった」

広宣流布のバトンを後世へと託す。

池田会長は、その時を待っていたかのように、本部

100年先まで盤石の学会をつくる

幹部会（3月度）で語った。

「明日（28日）は高等部員ら全国の代表4000人が登山いたします。

4000人の、次の時代を背負う鳳雛です。間違いありません。

未来は、ますます開いております。

未来は澎湃と開いております！」

一番の生命です

3月28日――。

しだれ桜が咲き誇る中、高等部、中等部、少年部の代表4000人による春の登山会が行われた。

鳳雛たちは、白雪に光る富士の山を仰ぎながら、喜々として集い来た。

御書には、地涌の菩薩への付嘱の儀式の姿を「富士山の木のごとく・ぞくぞくと」（1245ページ）とある。

富士の如く堂々と、桜花の如くまばゆく！

日蓮大聖人は、師から弟子への最も厳粛な後継の大舞台を、富士の姿に譬えられている。

一番乗りは関西の600人。やがて北海道、九州のメンバーが到着。沖縄からは何日もかけて船でやって来た。

午後6時――。

高等部、中等部、少年部が待ちに待った合同部員会が、大客殿で開催されようとしていた。

足早に会場に向かう鳳雛たち。夕暮れの静寂な空間に4000人の足音が響く。会場に入るや、壇上に整然と並ぶ高等部旗が目に飛び込んできた。

企画「創立80周年から100周年へ」

鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

少年部員や中等部員たちは鮮やかな緑色の部旗を、あこがれの眼差しで見つめていた。

未来を担う鳳雛たちへの池田会長の思いは深かった。

当時、池田会長は、青年部の最高幹部に対して、こう語っている。

「高等部たち鳳雛が一番大事です。生命です。さらに少年部、中等部が立派に育ってくれれば、学会は100年は盤石です」

◆証言（上田雅一さん）

池田先生は私に、「鳳雛を育成する画竜点睛（物事の最後の仕上げ）は、青年部の幹部の姿勢です。育成する側が真剣でなければ魂は

入りません」と語ってくださいました。先生は、鳳雛の育成に学会の総力を挙げようとされていらっしゃったのです。

◆証言（大山加代子さん）

池田先生は、「会長就任6年目から7年目のこの時に、訓練を受けたということが、すごいことなんだよ」と語られました。その時、深い意味は分かりませんでした。

今にして思えば、あの時の、私たちの世代に対する薫陶は、壮大な広布後継の「儀式」だったと思えてなりません。

◆証言（福島純子さん）

合同幹部会では役員をさせていただきました。当時から心に残っている池田先生の指導があります。「後輩の青春のために命を傾けなさい」――先生の後継にかける真情の一端に思えてなりません。

渾身の激励が胸を打つ

午後6時――。

合同部員会が始まった。

高等部の人事が発表された。

全国で、男女それぞれ32人の新任の高等部部長が誕生した。

続いて、幹部2人があいさつをし、3人目の幹部が話し始めて、しばらくした時であった。突然、会場に池田会長が姿を現したのだ。喜びが弾けるように、拍手がわき起こった。

◆証言（竹内克児さん）

もう、うれしくてうれしくて、思わず拍手をしてしまいました。

話をしていた幹部は、池田先生が退場された後に、もう一度、あいさつに立ったのですが、驚いたことに話の途中

正義の印綬が、師から弟子へ（昭和33年3月、静岡）

で突然、感極まって、絶句してしまったのです。

渾身の激励をされた先生の姿が胸に迫ってきたに違いありません。私たちもそうでした。

合同部員会には、最高幹部が出席していました。先生は、学会を

全部、諸君のために私は戦っているのです

生命の炎が燃え尽きる、その瞬間まで戦い抜け！（昭和41年3月28日、静岡）

企画「創立80周年から100周年へ」
鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

あげて、未来の人材を育成しようとされていたのです。

しっかり頑張りなさい！

合同部員会は、高等部の部旗授与に移った。

新任の男女各32人の部長一人一人の名前が読み上げられた。

「はい！」と元気いっぱいの声があがる。

歩み出た新任の部長に、池田会長は直接、鮮やかな緑色の部旗を手渡していった。

◆証言（玉木小夜子さん）

部旗を授与していただいた時、池田先生は、「しっかり頑張りなさい！」と声をかけてくださり、握手をしてくださいました。あの時の先生の鋭いまなざしと、温かな手の感触は、生涯、忘れられません。

◆証言（佐々木久江さん）

池田先生は、「明るく、仲良く、元気よく」との言葉とともに、部

旗を渡してくださいました。

私は、幼いころの事故で、まぶたから耳にかけて、うっすらと傷跡がありました。

同級生から、からかわれたり、いじめられたりしたことがあり、いつしか引っ込み思案になっていました。

そんな弱さを吹き飛ばすように、先生は、明るく胸を張って進む強さを教えてくださったのです。

◆証言（西山雄治さん）

「断じて負けない！　これが沖縄の魂」――万感を込め、師は贈った

池田先生の真正面に立ち、部旗を受け取った瞬間、「しっかり！」との言葉がズシンと胸に響きました。とてつもなく大きなものを託されたことを感じました。それは、部旗授与の後のスピーチで明確になりました。先生は、私たち一人一人に創価のすべてを託そうとされていたのです。

「沖縄健児の歌」

司会がひときわ高く声をあげた。

「池田会長から指導があります」

その瞬間、会場を揺らすような拍手と歓声がわき上がった。

池田会長が悠然とマイクに向かった。

8000の瞳が一点に集中し、スピーチが始まった。

会長はまず、場内に呼び掛けた。

「沖縄から来た人はいますか――」

◆証言（仲間理さん）

「はい！」と元気いっぱい返事をして、沖縄のメンバーが一斉に

立ち上がりました。すると、池田先生は、『沖縄健児の歌』を歌いなさい」と言われたのです。びっくりしながら、「命をかけて　ひと筋に……」。無我夢中で歌いました。

皆、不思議と胸が熱くなってなりません。先生との誓いを果たさんと、道なき道を開いた先輩たち。その思いが感じられてどうしようもなくなったからです。先生は、私たちに〝沖縄の魂〟を継ぐことを教えてくださったのです。

◆証言（塩津道子さん）

あの光景は忘れられません。

沖縄の高等部員たちが池田先生に応えようと、一生懸命に歌ったのです。先生は、何度も何度もうなずいて、真心を受け止めておられました。胸が熱くなって仕方ありませんでした。

私は北海道から参加しました。距離が遠ければ遠いほど、先生を求める純真な心を燃やしていこう。そう深く心に決めました。

◆証言（水野静代さん）

場内は何とも言えない温かな感動に包まれました。あの温かさの理由をはっきり知ったのは、5年後の登山会の時でした。

私はすでに母となり、幼子を抱えて愛知から参加しました。ところが私たちのバスが2時間ほど遅れ、池田先生との記念撮影に間に合わなかったのです。

がっかりしていると、先生が遅れたメンバーがいることを聞くや、記念撮影をしてくださったのです。夢のようでした。しかも先生は、幼い長男を膝の上に乗せてカメラに納まってくださり、「いい顔をしてるね」「歯が生え始めたんだね」と……。

経済苦で本当につらい時期でした。言葉を詰まらせながらも、お礼を言おうとすると、「全部、分かっているから、何も言わなくていいよ。がんばりなさい」と激励してくださったのです。

〝立ち上がらせずにはおかない！〟という先生の慈愛が、世界に二つとない温かな世界をつくっているのです。

記念撮影に間に合わなかった母子と再びカメラに（昭和46年1月、静岡）

企画「創立80周年から100周年へ」

鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

私があらゆる手を打つ

スピーチが始まった。

そのなかで、池田会長は2度、「これが私のお願いです」と訴えたことがある。

一つ目は「勉強」――。

会長は訴えた。

「どんなに苦労しても、勉強に勉強を重ねて、それを頭の中に叩き込んでおいてもらいたい。これが私のお願いです」

何のための勉強か？

会長は、その理由を端的に語っていった。

「世界が諸君を待っています。諸君の舞台はあまりにも大きい。日本の国のための指導者、あるいは全世界に羽ばたいていく指導者に育っていただきたい」

まっしぐらに、力をつけていってほしかった。そうでなければ、大事業を成し遂げることはできないからだ。

大学へは行きなさい

池田会長は、鳳雛たちに具体的な目標を示した。

「高校の次は大学ですが、できるだけ大学へは行きなさい。家庭の経済が許さない時には、自分で働いて夜学へ行きなさい。通信教育でもいいのです。自分の力で大学は出ていただきたい。

ただし、体の悪い人、そしてまた家庭の事情でいけない人は、自分の信心、教学、努力で、大学を卒業した以上の力を示す決心でいけば、それで結構であると思います」

◆証言（三浦協一さん）

青森の工業高校に通い、受験勉強などしたことのない私が、大学進学を果たすことができたのは、〝男子は大学へ行きなさい〟との池田先生の指針のおかげでした。

ただ、問題は学費でした。

私は小学5年生の時に父を亡くし、母は、新聞の販売店で、毎日、背丈を超える新聞の束をオートバイに乗せ、かつて雪の日などはソリで駅から店まで運んで、私と妹を養ってくれていました。

余裕などないのに、母は「池田先生にお応えするために」と学費を工面してくれたのです。

企画「創立80周年から100周年へ」

鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

大学卒業後には、開学とともに創価大学に採用していただき、さらには工学部、大学院の設置に携わらせていただきました。すべて、先生の構想の中で戦わせていただいたのです。

◆証言（馬上健さん）

当時、私は23歳でした。

高校2年生で肺結核を発症して以来7年、何度も入退院を繰り返していたからです。

復学してから、高等部の部長に任命されましたが、周囲から遅れてしまった寂しさをぬぐうことはできませんでした。そんな時、合同部員会に参加できたのです。

〝こんな自分に池田先生は万感の期待を寄せてくださる〟。涙があふれて止まりません。

〝闘病には意味があった。僕には、先生のもと、高等部として戦う使命があったのだ〟。心から実感したのです。

諸君の舞台はあまりにも大きい

24歳で社会に出てからも、何の気後れもありませんでした。先生が〝池田門下の誇り〟を教えてくださったからです。

学会の中で！

続いて池田会長は、優しいまなざしになった。

「学は光」――通信教育部の友を讃えて（昭和51年8月、創価大学）

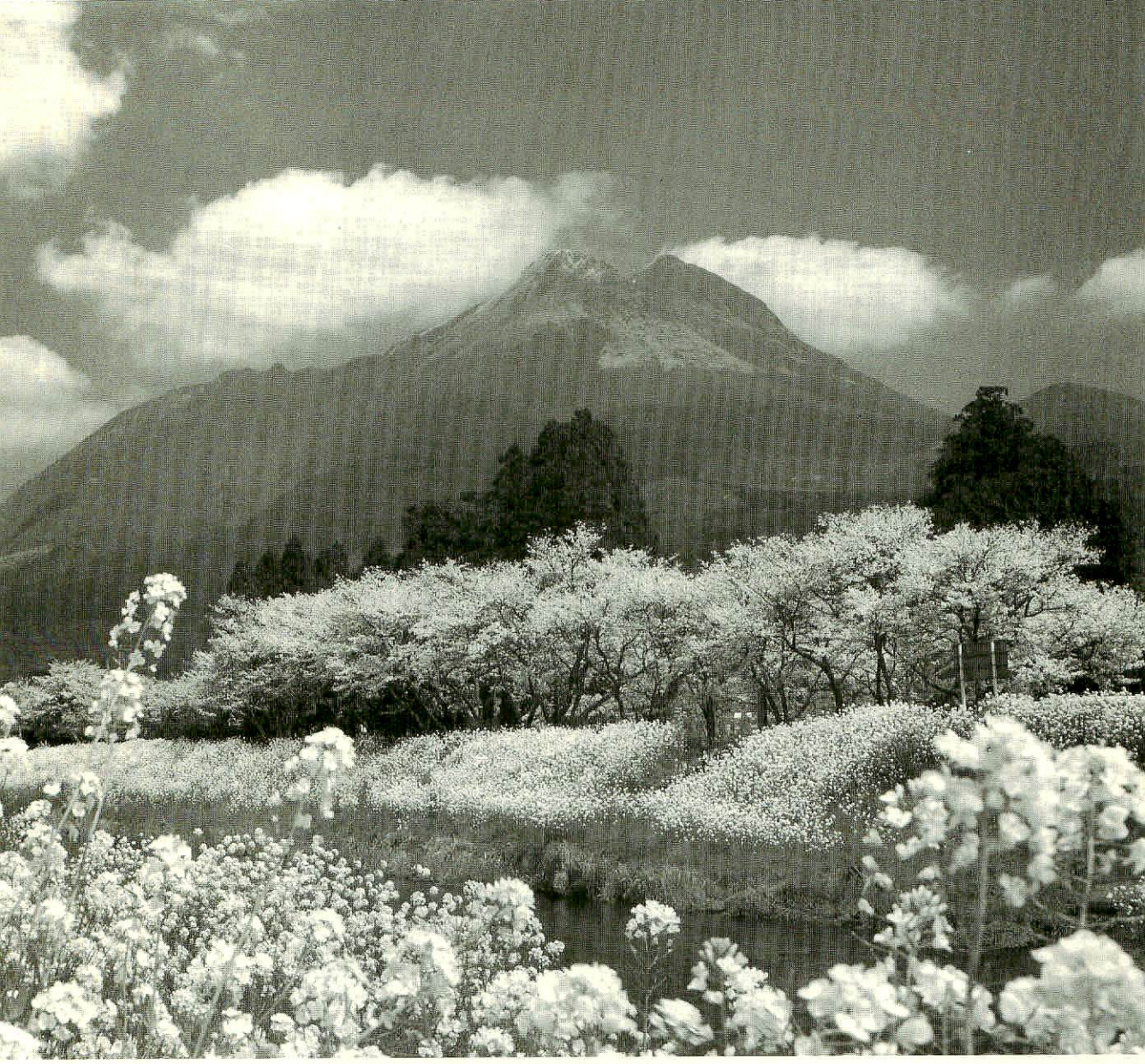
父親が娘に話しかけるように女子高等部員に語っていった。

「大学に行ける人は行きなさい。そうでない人は、おのおのの親や、先輩の言うことを聞き、福運を積んでいける信心根幹の人生を、のびのびと進んでいきなさい。学会の中枢で頑張りなさい。

心配なことは、異性問題で、一生を棒に振るようなことだけは、絶対にないよう気を付けてください。信心根幹に、真面目に、そして失敗しないように、聡明な人生を生きて、大事な青春時代を、しっかり福運の基礎をつくれるよう、御本尊にお願いしていきなさい」

◆証言（原山良江さん）

高校が進学校だったので、当然のように大学に進学するつもりでした。



ところが、頼まれて共同事業に出資したばかりに父が負債を負ってしまったのです。

本当につらかった。しかし、題目をあげるなかで、心が定まっていったのです。「福運を積んでいける信心根幹の人生」を歩もう。「学会の中枢」でがんばろう。池田先生の指導が蘇ってきたのです。

高校卒業後、思いがけず本部職員に採用していただきました。

池田先生が新入職員との懇談の場を設けてくださった時のことです。

先生が、「お父さんは何年、勤められているの」と尋ねてくださいました。「25年です」と答えると、「そうか。お父さんは大変な苦労をして、あなたを育ててくれたんだね」と激励してくださったのです。

帰宅し、先生の言葉を父に伝えると、大粒の涙をこぼしながら、「先生にお応えしなくては……」と決意していました。

わが家が苦難を乗り越えられたのは、すべて先生のおかげなのです。

◆証言（若林久美子さん）

あの日から、「自身の使命の自覚を」との先生の指針が、心に赤々と燃え続けました。

働きながら夜間の大学で学んで、教員になり、小・中学校、高校で教壇に立ち、さらに「教育研究」のために、先生が「教育貢献賞」を受賞されたデンマークのアスコー国民高等学校でも学ぶことができました。先生のおかげです。使命の道を開くことができたのです。

明確に体得せよ

「これが私のお願いです」

そう池田会長が訴えた二つ目は——。

「信心のうえに立った、思う存分の、諸君らしい人生行路を生ききっていただきたい。

これが私のお願いです」

会長は〝信心に立脚した人生を進め！〟と訴えた。

その理由を、会長は5点にわたって語った。

1点目は——。

「日蓮大聖人の生命哲学以外に、絶対に人生の幸福のカギはない」

信心は、幸福のカギである。

2点目は——。

「創価学会の信心、創価学会の実践、これ以外に、最高最大に崇高なる人生の歩み方は、断じてない」

信心は、崇高なる人生の軌道である。

3点目は——。

「永遠に大福運を積んでいける人生は、創価学会の信心以外には、絶対にない」

信心は、福運を積みゆく源泉である。

4点目は——。

「信心を持った人が、最後は必ず大勝利者になる」

信心は、勝利の原動力なのである。

そして5点目。会長は、結論として、その目的を訴えた。

「信心が進めば進むほど、20世紀、21世紀にわたる指導者である

九州の名峰・由布岳に春の彩り。勝利の笑顔よ、師を仰ぎて咲き薫れ！

企画「創立80周年から100周年へ」

鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

ということが、明確に体得できるのです」

次代の指導者に育て！――ここにこそ会長の眼目があった。

会長は、次代のリーダーが思う存分、活躍できる舞台をつくっていた。日本に、世界に、社会のあらゆる場所に――。

「私は、日本の広宣流布のため、世界広布のために、あらゆる手を打ち、人材を輩出しております」

あとは――。

「私の本意は、あくまでも諸君の成長を待っているのです」

鳳雛で決まる。未来が決まる。そこに一人一人の幸福も、崇高なる人生も、福運も、勝利もあるのだ。

◆証言（松岡栄子さん）

池田先生は、「将来は、一人や二人の人に頼るわけにはいかない。多数の人が目覚めて、全部、会長と同じ気持ち、責任、自負をもって進んでいかなければ、世界広布の総仕上げはできない」とも語られました。

〝全員が先生と同じ心で〟――人生の明快なる指針を示してくださったのです。

まだ16歳でしかない私たちに、これほどまでに期待を寄せてくださる先生の真剣さに、身震いする思いでした。

◆証言（水野洋子さん）

後に私は、開学間もない創価大学の職員に採用していただきました。創大でも、先生は未来への手を打たれていました。先生の未来構想の壮大さを実感せずにはいられませんでした。

企画「創立80周年から100周年へ」
鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

一人でもいい 私の期待を受け継ぎゆけ

君たちに託す以外にない！未来部に頼むしかない！――万感を込めて（東京）

諸君を信頼しております

一人ももれなく、〝私は、このために生まれてきた！〟という使命に、どうすれば立ち上がらせることができるか。

池田会長は渾身で訴えた。

「全部、諸君のために私は戦っているのです。

今の青年部のためでもなければ、幹部のためでもない。私は諸君にバトンタッチをしたいのです。

諸君のために道を開いていきたいのです。それまでは、どんな批判も、どんな苦労も、ものの数ではありません。

どうか、その私の期待を、この

中の何人かでもいいから、妙法に照らされて、しっかり、受け継いで前進していっていただきたいと思います。

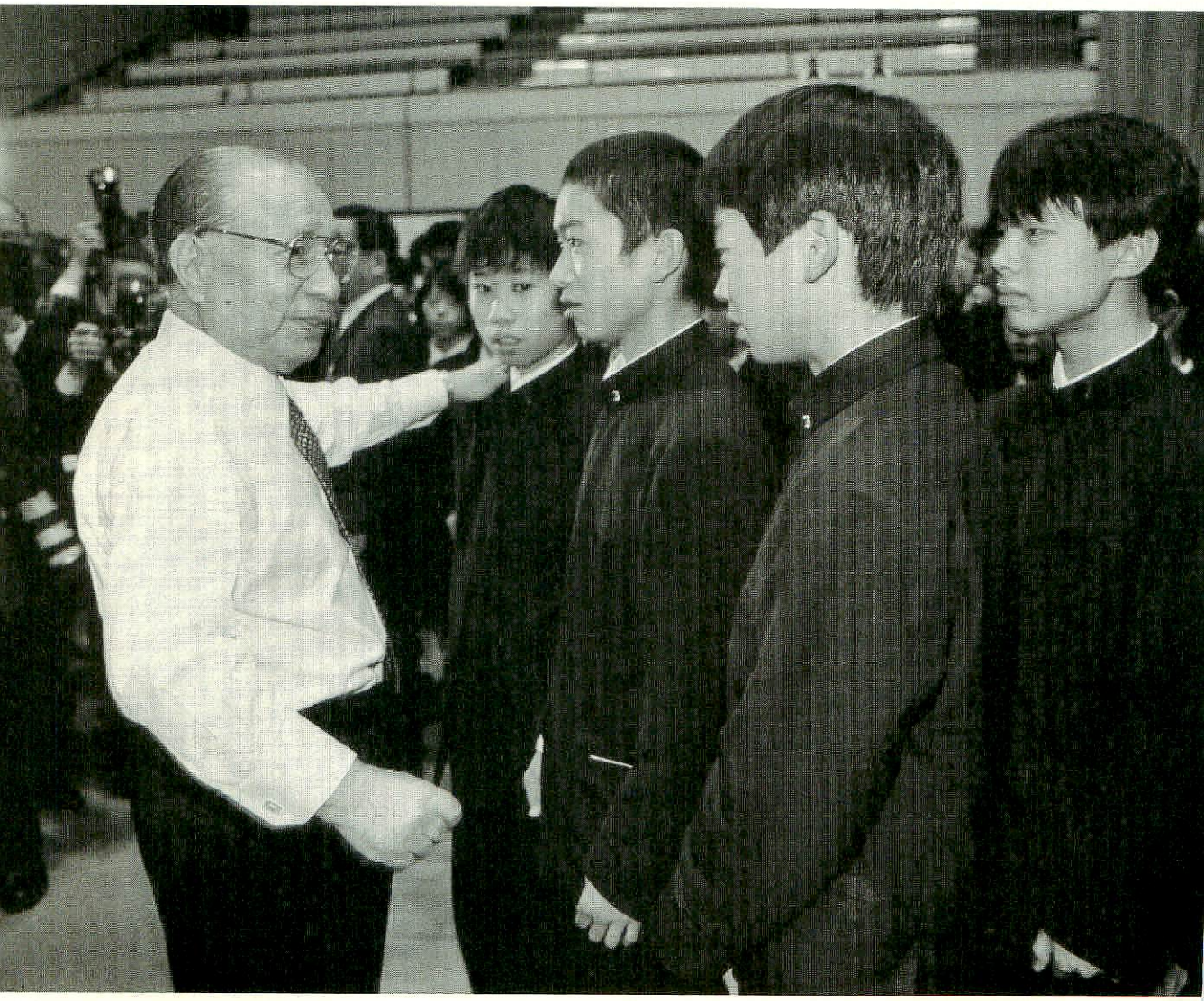
私は諸君を信頼しております。諸君が、それを裏切るようであったならば、私に福運がないのです」

◆証言（緒方博光さん）

衝撃が走りました。〝これほどまでに期待される池田先生に「福運がなかった」などと言わせてたまるか！　何が何でも、たった一人になっても、先生の期待に応える人材になってみせる〟と、固く拳を握りしめました。

◆証言（山下以知子さん）

〝高等部が裏切るようであれば……〟。池田先生の指導を聞いた時、心臓をわしづかみにされたようでした。何度も何度も心の中で叫んでいました。〝先生を悲しませるようなことは断じてしません！　絶対に先生を裏切りませ



後を託(たく)す君たちへの大事な講義

創価学園の設立計画を発表した本部幹部会(昭和41年3月27日、日大講堂)

ん！　一人として裏切るような人間を出しません！〟と。皆が、そう誓っていました。

1期生で決まる

池田会長は、「もう一つ申し上げます」と前置きをし、後継の友へのスピーチを締めくくった。

「今の百数十万人の男子青年部をつくりあげた核は、私を中心とした数人の同志であります。

今度は、第1期の高等部の諸君が、未来の学会の基礎も、後継の一切の繁栄、大発展の基礎も、全部、我々が築いてみせる！　という心意気で、前進していっていただきたい。このことを重ねて申し上げて、私の激励といたします」

◆証言（佐藤聖子さん）

池田先生の期待が命に響いてなりませんでした。

〟君たちで創価の未来は決まる！〟〟創価の発展を担え！〟。先生は後継のバトンを、後継の世代に託されたのです。

厳粛な場

厳粛かつ歓喜の合同部員会が終わった。

終了後には、池田会長の「生死一大事血脈抄」の講義が予定されていた。

鳳雛たちは、冷たくピンと張り詰めた空気を感じながら、会場の雪山坊へと急いだ。暗がりの杉木立を抜けると、鉄筋コンクリート3階建ての壁面に時計の光が見えた。

会場は2階の理事室。畳敷きの部屋で、扉を入ると、上座にはすでに幹部が座っていた。

二言三言、話す内容からすると、どうやら池田会長の講義があることを聞きつけて、やってきたらしい。

鳳雛たちも着座し、御書を広げて開始を待った。

午後8時、池田会長が姿を現した。

その時だった――。

◆証言（岸延幸さん）

「きょうは私が後を託す人たちへの大切な講義です。聞くのなら、君は外で聞きなさい」。池田先生が部屋に入られるや、座っていた幹部にそう言われました。

衝撃的でした。講義がどれほど厳粛な場であるか、余人を交えぬ師弟の厳粛な道場だったのです。自分の想像を超えていました。振り返ってみれば、その一言からすでに、「生死一大事血脈抄」の講義が始まっていたのです。

「境涯の書」

池田会長による「生死一大事血脈抄」講義が始まった（※以降の講義は、参加者の証言をもとに再現しました）。

範囲は全編（1336～1338ページ）。信心の根本の目的は何か。その目的は、いかなる行動のなか

企画「創立80周年から100周年へ」
鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

で実現できるか。日蓮大聖人の境涯の上からストレートに明かされた御書である。「まさしく『境涯の書』というべきでありましょう」と会長は語っている。

まず初めに、池田会長は「生死一大事血脈抄」の題号について展開していった。

「生死」とは――。

『生死』とは、生と死ということであり、二つの意味があります。

一つは『苦しみ』と訳す。生老病死の四苦を略して『生死』といい、苦しみを表すのです。

いま一つは『生命』と訳すのです。生まれては死に、死んではまた生まれてくるという永遠に伝わっていく生死の実体を指して『生命』というのです」

では、「一大事」とは――。

◆証言（松本尊治さん）

緊張して受講しているところに突然、池田先生が、「『一大事』といっても、大久保彦左衛門のことではないよ」と言われ、思わず笑ってしまいました。当時、「天下の一大事」といえば、大久保彦左衛門（天下のご意見番と呼ばれる江戸時代の武将）の話と決まっていました。先生の講義はいつも、堅苦しさなどない、皆の笑い声から始まったのです。

◆証言（関口朝代さん）

池田先生はウイット（機知）やユーモアで、心が柔らかくなったところへ、ズバッと確信を語られました。難解な理論を通して、人生で最も大切なことを教えてくださったのです。

一念で一切を作動

池田会長は題号の「一大事」について講義を続けた。

「『一』とは、これ一つ以外にはないという意味の『一』であります」

「『大』とは、微塵から、大宇宙の運行にいたるまで、すべてが生死のリズムを刻んでいるということです」

「『事』とは、宇宙と生命の根源にある生死のリズムは、決して観念ではない。事実の活動それ自体であります」

結論して、会長は言った。

「『一大事』とは、↖

南無妙法蓮華経になるのです。

『一』たる一念を、『大』たる三千万法（一切）に、事実のうえに作動させる根本の力を『事』というのです。

この、事の一念三千が『一大事』なのです。所詮、妙法の電源体ともいうべき南無妙法蓮華経こそ、一大事と仰せなのです」

では、「血脈」とは――。

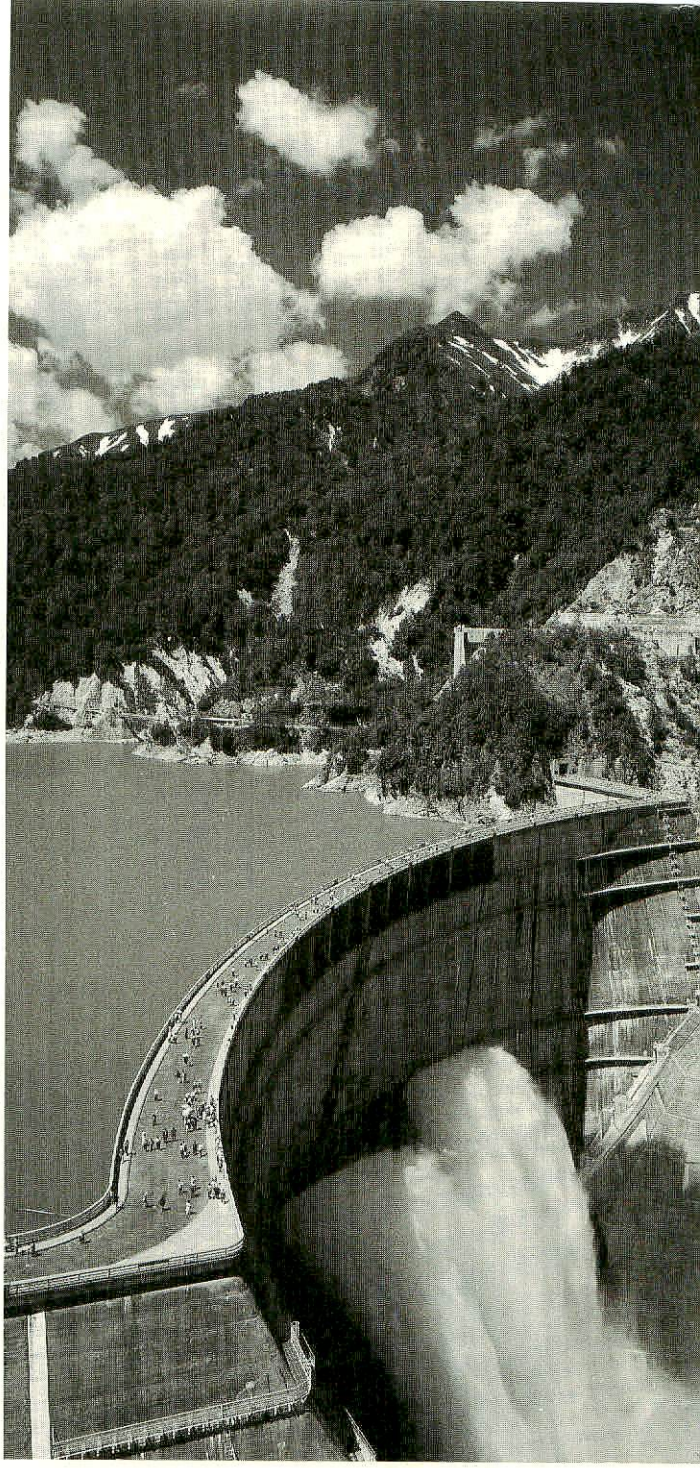
会長は語った。

『血脈』とは『仏から衆生へ、師から弟子へと法を伝える』ということです。

したがって『生死一大事血脈』とは〝師から弟子へと、生命の根本の極理を伝える〟ということです」

報告はすべて見る

本文の講義に入った。



戦うべき時に一気に力を出す。勝利の電源体たれ

企画「創立80周年から100周年へ」

鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

「生死一大事血脈抄」は、男子高等部員が御文を拝読し、通解を行うことになった。

最前列の男子が立ち上がって、冒頭の一節を元気いっぱい読み上げた。

「御状委細披見せしめ候い畢んぬ」（1336ページ）

――あなたからのお手紙を詳しく拝見いたしました――

短い一節であるが、池田会長は縦横に語っていった。

「（流罪先の佐渡という）あまりに厳しい不自由の地にあって、日蓮大聖人は、門下一人一人の便りを、逐一、ご覧になられたのです。そして全生命をかけた指導をしておられる。

大聖人の御境涯の前には、何も

 ©Photo by Aflo

のも妨げとは、なりえないのです」

◆証言（谷恵美子さん）

あの講義の日から、ちょうど4カ月後のことでした。池田先生に本部でお会いする機会がありました。

実は父が事業に失敗して、行方不明でした。

先生はすべてご存じでした。「御本尊があるから心配ないんだよ」と、温かく激励してくださったのです。

まさに、先生は慈父でした。

師弟の絆にこそ生死一大事の血脈が流れ通う

人間と宇宙を貫く妙法

池田会長はまず、「妙法」が、人間と大宇宙を貫く法則であることを述べていった。

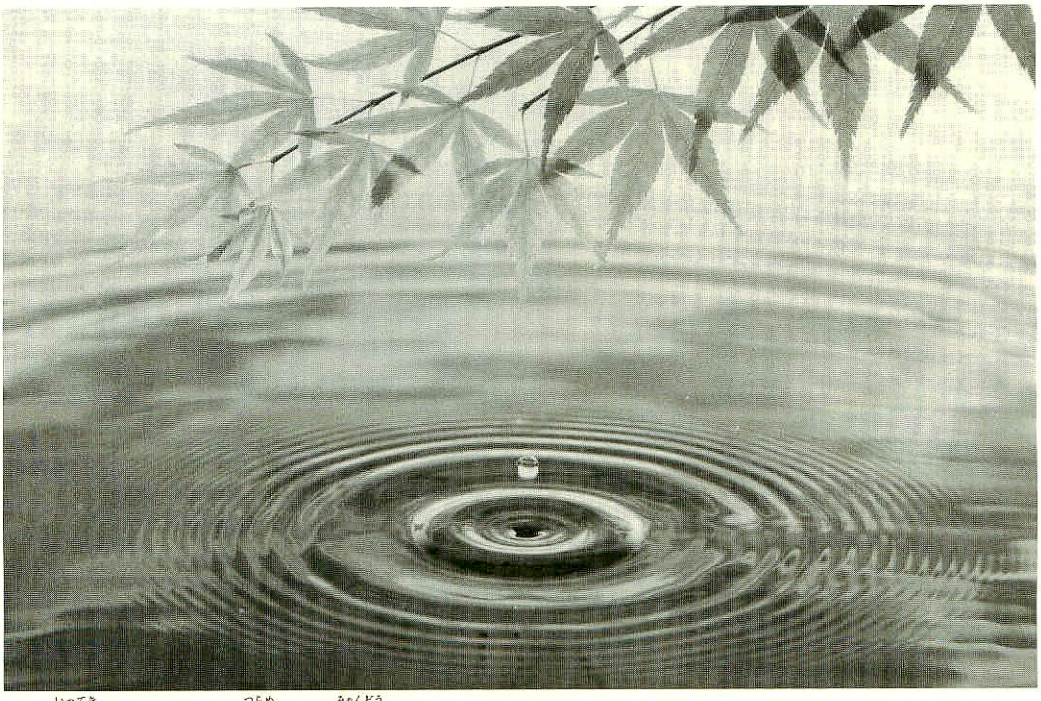
「妙は死 法は生なり 此の生死の二法が十界の当体なり」（1336ページ）

――妙法の妙とは死であり、法とは生である。この生と死の二つの法が十界の当体である――

鳳雛たちにとって難解だった一節である。なぜ、妙が死であり、法が生なのか。

会長の解説は明確だった。

「生きている状態とは、さまざまな働き、姿をもって現れます。人にバカにされれば腹が立つ。当然の生命の法則です。したがって『生』は『法』になるわけです。



たった一滴の水にも、宇宙を貫く法則は脈動する

真剣勝負の講義。君に「創価の心」が脈打つまで（昭和41年3月28日、静岡）

企画「創立80周年から100周年へ」

鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

しかし、人が腹を立てている精神状態、また、腹が立つに至った要因や経緯は目に見えないし、思議できません。『妙』であり、見えない故に『死』なのであります」

続けて会長は、宇宙に言及していった。

「宇宙の運行――それは、目に見えるが故に『法』であり『生』である。

宇宙の運行を起こしている根源の力――それは、『妙』であり、目に見えないが故に『死』なのであります」

そして会長は続けた。

「仏法の極理であり、仏の悟達の法であり、しかも、われわれの生命の体でもある生死の一大事が、いかにすれば、われら衆生のなかに脈々と湧現してくるか――その〝実践法〟を日蓮大聖人は述べられていくのです」

言い換えるならば、「心が変わ

れば一切が変わる」という宇宙的真理に、どうすれば、目覚められるのか、体得できるのか――。

「全く差別無し」

池田会長は、生死一大事に目覚めるための実践法を、3点にわたって明らかにしていった。

まず、1点目――。

会長は、拝読を高等部員に促した。

「久遠実成の釈尊と皆成仏道の法華経と我等衆生との三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり」（1337ページ）

――五百塵点劫という久遠の昔に成道した釈尊と、すべての衆生を成仏させる法華経と、我ら衆生との三つは、まったく差別がないと信解して妙法蓮華経と唱えたてまつるところを生死一大事の血脈というのである――

会長はこの一節を、「信心の姿勢を言われていると考えていいでしょう」と語った。

では、信心の姿勢とは。

会長は端的に述べていく。

『久遠元初の釈尊』とは、仏であり、師であり、日蓮大聖人であります。

『皆成仏道の法華経』とは、妙法蓮華経であり、御本尊です。

そして、『我等衆生』とは、私どもの生命であり、この三つは、全く差別はないと〝解りて〟と拝すべきであります」

頭では理解できそうだが、実感がわかない。

会長は続けた。

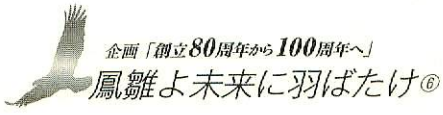
「『三つ全く差別無しと解りて』といっても、事実のうえで〝解る〟――理解に達するのは難しい。では『解りて』とはどうすることかと言えば、〝信じて〟と読むのです」

つまり、「信」を深めゆくなかに、宇宙の大生命が自身の生命と連なり、偉大な生命力が湧現していくのだ。

会長は重ねて述べた。

「御本尊に南無妙法蓮華経と題目を唱え、信じるところに、即、それが生死一大事の血脈となるのです。

この妙法を信じる以外に乱世を救う道はないのです」



「三世に離れ切れざる」

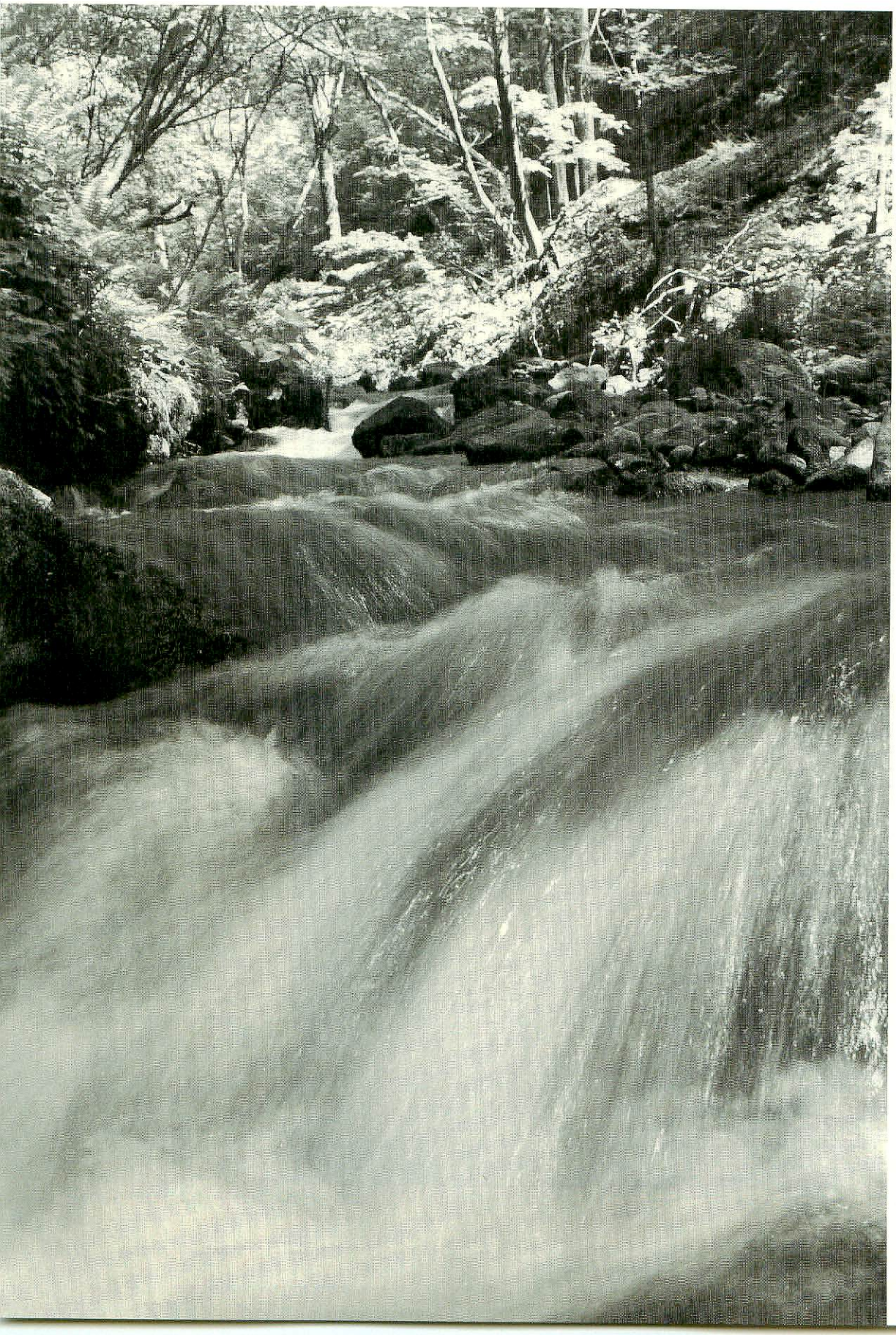
講義は2点目に移った。

鳳雛が立ち上がり、以下の一節を拝読した。

「過去の生死・現在の生死・未来の生死・三世の生死に法華経を離れ切れざるを法華の血脈相承とは云うなり」（同ページ）

――過去の生死・現在の生死・未来の生死と、三世それぞれの生死において法華経から離れないことを法華の血脈相承というのである――

過去、現在、未来の三世にわたって御本尊を受持しきる生命に、



勇ましい飛沫を上げながら、「創価の世紀」へ流れゆけ！

生死一大事の血脈がある、との一節である。

しかし、三世にわたって信じていくとは、いったい何をすることなのか。鳳雛にとっては、分かるようで明快にできない一節だった。

会長は明快に語った。

「三世にわたって実在するのは、今の、この私たちの生命以外に真実はありません。

ただただ唱題という方程式によって、御本尊の生命をわが生命に移すのです。というよりも、わが生命のなかにある大聖人の生命、師の生命を、湧現させる以外にないのです」

◆証言（大橋章悟さん）

三世にわたって御本尊を受持しきるとは、今、私たちが唱題に励むこと以外にないと教えていただきました。

池田先生は、どんなに深遠な哲学であっても、誰もが実践できるよう具体的に展開してくださるのです。

この御文だけは！

講義は、3点目に入った。

「総じて日蓮が弟子檀那等・自他彼此の心なく水魚の思を成して異体同心にして南無妙法蓮華経と唱え奉る処を生死一大事の血脈とは云うなり」（1337ページ）

――総じて日蓮の弟子檀那等が、

堅固なる団結で難攻不落の勝利城を築け

『自分と他人』『あちらとこちら』と隔てる心なく、水と魚のような（一体の）思いになって、異体同心で南無妙法蓮華経と唱えたてまつるところを、生死一大事の血脈と言うのである――

一切衆生が仏に成る血脈を継ぐための具体的な実践を明かされた一節である。

池田会長は訴えた。

「肝心の中の肝心、根本の中の根本の御聖訓です」

声に一段と力がこもる。

「師弟不二です。その不二のなかに生死一大事の血脈が流れるのです」

気迫の講義が続く。

「御本尊を根本として、中心として、広宣流布という大目的を達成しようという師弟不二の精神で進みゆく、一人一人の生命に、生死一大事の血脈が脈打つとの仰せなのです。

『異体同心』の『心』とは、南無妙法蓮華経を唱える信心です。

広宣流布を実現しようという一念一心のつながりの『心』です。

現代でいえば、御本尊を根本とした創価学会という、その生命体に入って、仏道修行することによって、初めて一人一人の一生成仏、永遠の幸福の確立ができると仰せなのです。

それが生死一大事の血脈ということです」

会長の訴えが、鳳雛たちの胸を打った。

「諸君は全員、この御文を胸に刻んで、一生涯忘れずに、互いに戒め合い、広宣流布の総仕上げをしていきなさい！」

◆証言（浅見茂さん）

私たち全員が「はい！」と、心の底からの決意を込めて挙手しました。後継を託そうとされる先生の真剣さに全身が震えました。

◆証言（中西邦子さん）

池田先生は、「この中の誰か一人でも、例えば、経済的なことなどで行き詰まってしまったり、学会から離れて、不幸な状況になったりしたら、駆け付けてみんなで励まして、助け合うんだよ。それが鳳雛だ。それが同志です」とも言われました。創価の世界から〝一人として、落後させまい！〟という慈愛でした。

◆証言（矢部博己さん）

貧しかったにもかかわらず、両親が、「池田先生の講義を受けるのだから」と御書を買ってくれました。その〝宝の御書〟に、私は先生の〝宝の講義〟を無我夢中で書き込んでいきました。

この一節の箇所には、「信心の血脈があるのは創価学会です。題目を忘れると、迷路に入るようなものです。どんなに苦しくとも、たとえ、死ぬ瞬間まで、題目をあげきっていきなさい」とあります。

先生は、信心の血脈が脈打つのは学会だけであり、学会から離れ

企画「創立80周年から100周年へ」

鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

© SHIGEO MATSUNO / SEBUN /amanaimages

ない原動力こそ唱題であることを教えられたのです。

「真金」になりなさい

池田会長は、生死一大事の血脈の流れ通う世界を守るよう、語っていった。

「金は大火にも焼けず大水にも漂わず朽ちず・鉄は水火共に堪えず・賢人は金の如く愚人は鉄の如し・貴辺豈真金に非ずや・法華経の金を持つ故か」（1337ページ）

――金は大火にも焼けず大水にも漂わず、また朽ちることもない。鉄は水にも火にも、ともに耐えることができない。賢人は金のようであり、愚人は鉄のようである。

あなたは、まさに真金（真実の金）ではないか。それは、法華経の金を持つゆえであろうか――

鳳雛たちは自身の使命を胸に刻んでいった。

師は、じっと見つめて待っている

「日蓮大聖人が受けられた難は、単なる非難中傷ではない。宗教界の権威が策謀し、権力者を動かし、社会的な力をもって制裁を加えたのです。

そういう大難の時に、御本尊を、学会を、師を守っていきなさい。これが大事なのです。生涯忘れてはなりません」

そして会長は訴えた。

「諸君は、鉄であってはならない。諸君は、『金』になりなさい。『真金』になりなさい！」

◆証言（川井三枝子さん）

池田先生は、「広宣流布を大目的として妙法を持つ心の中に、『真金』のように、何があっても、壊されることのない、強い人格を築くことができるのです」とも講義してくださいました。

「強くなれ、強くなれ。師を守る強い人間になりなさい」――まさに私たちへの期待でした。

◆証言（平畑儀子さん）

池田先生は、「どんなことがあっても、私を信じ、学会についていらっしゃい」とまで語ってくださいました。師の思いをわが思いとして戦うことが「真金」の生き方だと教えてくださったのです。

弟子となるのは「宿縁」

「過去の宿縁追い来って今度日蓮が弟子と成り給うか・釈迦多宝こそ御存知候らめ」（1338ページ）

――あなたは、過去の宿縁に運ばれ、今世で日蓮の弟子となられたのでしょうか。釈迦仏・多宝如来の二仏こそがご存じでありましょう――

池田会長は語った。

「元意は、三世にわたる生命の

深理からすれば、弟子となることも、また、弟子となって師と難をともにすることも、必ず過去世の深い契りによるものである、との仰せであります」

◆証言（武藤きみ代さん）

心から喜びがわいてなりませんでした。私たちが、池田先生のもとで高等部として活動できること、それ自体が偶然ではない、過去遠遠劫からの約束であり、縁であり、私たちの誓いがあってのことなのだ、ということを教えてくださったからです。

「よも虚事 候はじ」

そして、直後の一節の講義を続けた。

『在在諸仏土常与師俱生』よも虚事候はじ」（同ページ）

――法華経化城喩品の「在在の諸仏の土に、常に師と俱に生ず」との経文は、よもや嘘とは思われません――

不二のバトンを受け継ぐ鳳雛よ、世界へ羽ばたけ（昭和41年3月28日、静岡）

会長は、「この文は有名です」と前置きし、こう語った。

「私たちは必ず、御本尊のおわします所に、きちんと生まれてこられるのです」

◆証言（大山加代子さん）

池田先生は、この一節をそれ以上、語られませんでした。きっと、この一節に込められた真意を、私たちのこれからの人生の中で気付きゆくことを期待され、信じて待たれていたと思えてなりません。三世に師と弟子が常に倶に生まれ、共に戦えることを。師弟の絆は永遠であることを。師弟の絆にこそ、生死一大事の血脈が流れ通うことを。

運命的な一書

約1時間10分にわたった講義が終わった。

なぜ池田会長は、「生死一大事血脈抄」を鳳雛たちに講義したのか。

会長は語っている。

「（「生死一大事血脈抄」は）戸田先生が何度も講義してくださった御書であります。……いつしか私にとっては、運命的な一書とさえなっておりました」――会長の運命を左右するような御書だったからである。

『若き日の日記』には、こう綴られている。

「午後より、（戸田）先生宅にお邪魔する。

『生死一大事血脈抄』の講義をして下さる。

夜遅くまで、種々指導賜る」

市ケ谷は「忘れ得ぬ師弟の古戦場」と。創価大勝の出発の地

企画「創立80周年から100周年へ」

鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

日記の日付は昭和25年12月10日。その1カ月前、恩師が学会の理事長職を辞任している。

事業が行き詰まり、その法的責任をとる立場にあったため、社会的影響が学会に及ぶことを深く憂慮しての辞任であった。

最悪の時であった。最悪だからこそ、恩師は未来への布石を打った。渾身の一手こそが、「生死一大事血脈抄」の講義だった。

恩師の講義の翌日に愛弟子が記している。

「結局、人生は、究極まで闘わねばならぬ。

最高の理想たる、広宣流布の実現を目指して」

さらに愛弟子は、当時をこう述懐している。

「半年間、一銭の給料も出なかった。靴もペチャンコ。ちゃんとした服だってない。体もひどかった。

しかし、先生をお守りするためなら、たとえ餓鬼道に苦しもうと、地獄界に苦しもうと、かまわない。それで何の悔いもないと決意していた」

「師のために、億劫の辛労を尽くしゆく苦闘の連続の胸中にこそ、永遠に常勝不敗の大城が築かれていることを、私は深く実感したのである」

魂の中に、一念の中に、不二の大闘争を刻み込んだ人を直弟子というので

「一人も残らず勝利することこそが、私たち夫妻の人生の勝負」と（大阪）

ある。

運命の分岐点にあって、師が弟子に講義した御書こそ「生死一大事血脈抄」であった。

◆証言（一柳宗義さん）

「師のために」戦う時に、どれほど力が出るか。

「師と共に」戦う時に、どれほど自身の殻を打ち破れるか。

いかなる苦難も恐れず、生命の根源の底力を発揮できる不二の弟子の道を私たちが歩み始められるよう、池田先生は渾身の講義をしてくださったのです。

◇

弟子を薫陶する師の思いとは――。

『法華経の智慧』にはこうある。

「師匠は吼えている。

あとは、弟子が吼えるかどうかです。

それを師匠は、じっと見つめて待っている」

師は期待し、見つめ、待っている。

一人、立ち上がる人を。不二の闘争を起こす弟子を。

「鳳雛よ、その先頭に立て！」

との講義であった。

次回の講義は、4月23日午後3時半。会場は学会本部。教材は「佐渡御書」と発表された。

（つづく）

企画「創立80周年から100周年へ」

鳳雛よ未来に羽ばたけ⑥

団結は力なり――。信心で結ばれた団結は、この世で最も尊く美しい、正義の強固な絆であり、勝利の力です。

日蓮大聖人の御在世に、〝団結の勝利〟を示したドラマ〟があります。池上兄弟の二人とその夫人たちが、信心で力を合わせ、父親からの勘当事件を乗り越えて、大勝利を勝ち取った逆転劇です。困難な環境をはね返した兄弟の凱歌は、後に続く日蓮門下にとって、永遠に信仰の鑑と光っています。

この兄弟の体験談は私たちに、障魔を破る信心の利剣の重要性を教えてくれています。そして、団結がいかに大事であるかを示しています。また、大聖人の御指導通りに戦う「師弟直結」の信仰を貫く大切さが伝わってきます。更には、「一家和楽」の実現という信仰の手本があります。兄弟を支えた夫人たちの立派な信心も忘れてはならない。

大聖人は「未来までの・ものがたりなに事か・これにすぎ候べき」（1086ページ）、さらに「設ひこれより後に信ずる男女ありとも各各には替へ思ふべからず」（1088ページ）と讃嘆されています。兄弟と夫人たちの実践は、

経典「御書」に学ぶ

団結第一で「弟子の勝利劇」を
――悪世を照らす「人間革命の宗教」

信仰の不屈の戦いの軌跡として後世の模範となっています。

そして、この「ものがたり」を現代に蘇らせ、勝利の旗を一人一人の人生において打ち立ててきたのが、わが創価学会員です。学会員の体験談には、御書の仰せのままに信仰を貫き、難を乗り越え、各人が幸福を実現し、一家和楽、絶対勝利、健康長寿の大道を築き上げてきた無数の人間劇場があります。日本中に、否、世界中に、「創価の池上兄弟」が誕生しています。

仏法を持ち、使命に目覚めて立ち上がった一人は、自身の内に秘めた「偉大なる可能性」を開くことができる。その一人の生命変革が必ず周囲に波動を広げ、人間の可能性を開発していく歓喜のうねりを広げていく。「自分が変われば世界が変わる」ことを証明しているのが、学会員の体験談です。

一人一人が人生において勝利するための信仰です。最高に価値ある人生を生きるための仏法です。そのための仏道修行は、どこまでも自身の「信心」を深めていくなかにあります。今回は池上兄弟の勝利の足跡を通して、逆境を打ち破る「信心」の在り方を学んでま

池田名誉会長 講義 勝利の

第27回 兵衛志殿御書

いりたい。父親が入信したとの報告に対して、兄弟の信心を賞讃されている「兵衛志殿御書」を拝します。

久しくうけ給わり候はねば・よくおぼつかなく候、何よりも・あはれに・ふしぎなる事は大夫志殿と殿との御事・不思議に候

（1095ページ1行目～2行目）

「不思議」と賞讃された兄弟の信心

弟子の勝利を誰よりも喜んでくださるのが、日蓮大聖人であられます。

二人の苦闘は、数年間にわたりました。兄弟の父が、法華経の信仰を捨てるように強硬に迫り、兄・右衛門大夫志（宗仲）は2度にわたって勘当を受けたのです〈注1〉。

池上家は鎌倉幕府に仕えていた武士で、有力な工匠、おそらくは棟梁のような存在でした。兄・宗仲にとって父から勘当されることは、そうした社会的立場を失うことはいうまでもなく、経済的基盤などの一切を失うことにもなります。しかし、それでも兄の宗仲は、大聖人の仏法を貫くことを選び、不退転の決意で臨んだ。

一方、弟のほうにしてみれば、兄の勘当は、自分に家督が譲られることを意味します。また、親孝行という観点からも、表面的な次元では父の意向に背くことは不孝となってしまう。苦しい立場にいた弟・兵衛志宗長に対して、大聖人は、兄弟同心して信心を貫くところにこそ真の幸福と繁栄があると、幾度も激励・指導されています。

親を思う兄弟の真心の深さに、やがて父も気づいたのでしょう。勘当も取りやめ、さらには、自らも法華経への信心を受け入れます。この劇的な勝利の報告を受けられた大聖人は、

【今回学ぶ「兵衛志殿御書」の現代語訳】

久しく（お便りを）頂いていないので、とても気がかりでした。何よりも、見事で不思議なことは、兄上の大夫志殿と、あなたとのことであり、本当に不思議です。

（1095ページ1行目～2行目）

〈注1〉最近の研究では、最初の勘当を受けての「兄弟抄」の御執筆は建治2年（1276年）4月16日、2度目の勘当に際して執筆された「兵衛志殿御返事（三障四魔事）」は建治3年（1277年）11月17日と考えられている。本抄は、弘安元年（1278年）9月9日の御執筆と考えられ、この間、兄弟と夫人たちの信仰の苦闘が続いていた

本抄の冒頭で「これほど見事で不思議なことはない」と、喜ばれています。

ここで、大聖人が兄弟に示されてきた勝利への信心の要諦を確認しておきたい。これは、私たちにとっても、絶対勝利への方程式となるからです。

まず、法華経の実践にあって最重要なことは、「不退転の信心」を貫くことです。大聖人は、「捨つる心」を起こさせるものは、第六天の魔王〈注2〉の働き、すなわち元品の無明〈注3〉であると喝破されています。

元品の無明とは、要するに、自分自身が妙法の当体であることへの無知です。自身の中に、あらゆる困難を乗り越えることができる尊い仏の生命が具わっていることを教えられても、どうしても納得し切れない。それゆえに、不安や疑いが自分の心を覆い、あきらめや絶望に包まれてしまう。

この元品の無明を破るのが、「信」の力です。まさに、「元品の無明を対治する利剣は信の一字なり」（751ページ）、「仏法の根本は信を以て源とす」（1244ページ）と仰せの通りです。

学会員の体験談で言えば、〝もう駄目だ〟と思うような時に、御書を開き、学会指導を学び、また同志の励ましを受けて、あらためて「信」を奮い起こしていくことです。

胸中の妙法を確信して、御本尊に向かって真剣に唱題行を貫いていけば、必ず、わが胸中から変革が始まります。自身の仏性が開かれて、歓喜と確信が込み上げ、挑戦する勇気が湧いてくる。そこに絶対勝利への仏の無限の智慧と力が現れるのです。

まじめに信行学を貫く学会員は、こうした体験を幾重にも重ね、何度も困難を乗り越え、確固たる不撓不屈の自分自身を築いていける。もう何も恐れるものはない、何も怖いものはないという多宝会の友の確信ある姿は、言うならば〝仏の境涯〟です。

要するに、〝わが身は、本来は、妙法の当体である。だから、題目を根本とすれば必ず勝利の智慧と勇気が現れる〟との「以信代慧〈注4〉の確信」が鍵となる。これが、日蓮仏法の不退転の要諦です。

「魔との戦い」を忘れるな

悪縁・悪知識〈注5〉のもつ魔性の恐ろし

池田名誉会長 講義 **勝利の経典「御書」に学ぶ**

ことになる。ちなみに、父（康光）と兄弟（宗仲・宗長）の名前については、文献で確認される兄の宗仲以外ははっきりしないが、本稿では、これまでの伝承通りに、弟の兵衛志については宗長の名前を用いている。

〈注2〉【第六天の魔王】古代インドの世界観で欲界の最上である第六の天に住し、仏道修行を妨げる魔王。欲界の衆生を支配し、自在に操るので他化自在天とも呼ばれる。

〈注3〉【元品の無明】「無明」とは、生命にそなわる根源的な無知。特に自らをはじめ万物が妙法の当体であることがわからない最も根源的な無知を「元品の無明」という。

〈注4〉【以信代慧】「信を以って慧に代う」と読み下す。仏が智慧によって覚知した正法を自身の智慧によって覚知する代わりに、仏が説いた正法を信じ行ずることによって、智慧で得るのと同じ功徳を享受して成仏すること。

さは、私たちの「信」そのものを破壊しようとして、さまざまな姿を通して働きかけてくることにあります。

兄・宗仲は、一度勘当を許された後、また再び父から勘当を受けます。しかし、心の定まっていた兄は一歩も退かなかった。「えもんのたいうの志殿は今度法華経の行者になり候はんずらん」（1091ページ）と仰せの通り、信仰を貫く覚悟が決定していました。

しかし、弟の心は、まさに重ねての悪縁によって揺れ動いていた。大聖人は2度目の勘当があることを予測し、前もって宗長の妻に用心を促されています。その際に、宗長については「をぼつかなし」（1090ページ）と心配されている。

大聖人は、事の本質を「魔との戦い」「元品の無明との戦い」と捉えていくべきことを繰り返し教えられていた。魔を魔と見破り、悪縁・悪知識に紛動されない確固たる自分を築きあげることが、不退転の信仰の根幹です。

信心とは常に、魔との戦いです。兄弟に対する大聖人の一貫した御指導は、三障四魔〈注6〉を見破り、恐れずに前へ前へ進みなさいという一点に尽きます。恐れれば信心が破壊されます。退けば魔性に呑み込まれます。勝利の要諦は、「月月・日日につより給へ」（1190ページ）との一節に尽きるのです。

大聖人は、兄弟に対して「がうじゃうにはがみをしてたゆむ心なかれ」（1084ページ）と教えられています。〝私が戦ってきたように、恐れずに戦っていきなさい〟とも仰せです〈注7〉。

信仰とは、常に自分の心を揺さぶり蕩かす魔性との戦いであるがゆえに、絶えず自身の心を磨き、勇気を奮い起こしていくしかありません。それゆえに、大聖人は「たゆむ心なかれ」（1084ページ）、「すこしもたゆむ事なかれ」（1090ページ）と繰り返し仰せられています。〝いよいよ〟の精神で、〝昨日より今日、今日より明日〟と、常に前進していく中に、本物の信心が磨かれていくのです。

三障四魔との戦いで重要なことは、断固、魔を打ち破っていく「攻めの姿勢」です。

大聖人は「すこしも・をづる心なかれ」（1084ページ）、「すこしも・ひるむ事なかれ」（1090ページ）、「すこしも・をそるる心なか

〈注5〉【悪縁・悪知識】悪縁は、仏道修行を妨げ、三悪道・四悪趣に堕とす縁となるものをいう。その具体的な姿が悪知識であり、仏道修行を妨げる悪僧、悪人などをいう。

〈注6〉【三障四魔】仏道修行を妨げる三種の障害と四種の魔のこと。三障とは煩悩障・業障・報障をいい、四魔とは煩悩魔・陰魔・死魔・天子魔をいう。

〈注7〉「例せば日蓮が平左衛門の尉がもとにて・うちふるまい・いるしがごとく・すこしも・をづる心なかれ」（1084ページ）

れ」（1091ページ）と、重ねて兄弟を励まされている。受け身になり、退いてしまえば、魔は増長する。反転攻勢し、魔を責め続ければ、その師子吼の前に、魔は必ず退散する。

詮ずるところ、魔との戦いにあっては、勇気ある信心が不可欠です。どこまでも魔と戦う覚悟、いわば「腹を決める」ことが大切となります。それゆえに大聖人は、「せんするところひとすぢにをもひ切って兄と同じく仏道をなり給へ」（1091ページ）、「よくよくをもひ切って」（1093ページ）、「いよいよ・はりあげてせむべし」（1090ページ）、「いい切り給へ」（1091ページ）と幾度も重ねて御指導されています。

魔と戦う中でこそ、信心は更に研ぎ澄まされ、深まっていきます。そして、磨き抜かれた「信の利剣」によって、一切の魔性に勝利することができるのです。その強盛な信心、「強き心」こそが、仏界の境涯そのものです。何ものにも揺るがぬ確固たる自分を築いていく人間革命の信仰によって、未来まで語り継がれ、全世界の同志の励ましとなる金剛不壊の信仰体験が生まれるのです。

三障四魔は、いかなる時に出来するのか。「行解既に勤めぬれば」〈注8〉と仰せです。成仏へと進みゆく道程の中でこそ、三障四魔が出来するのです。

大聖人は仰せです。

「しをのひると・みつと月の出づると・いると・夏と秋と冬と春とのさかひには必ず相違する事あり凡夫の仏になる又かくのごとし、必ず三障四魔と申す障いできたれば賢者はよろこび愚者は退くこれなり」（1091ページ）

魔が競い起こったその時こそが、自身の境涯変革の境目であると得心すれば、勇気と確信に満ちて、勇んで魔に立ち向かっていく挑戦が生まれます。反対に、魔におびえ、魔に破れてしまえば、絶望と不信の中で成仏の道から撤退せざるを得ません。

「賢者はよろこび愚者は退く」とは、信心を貫いていくうえでの永遠の合言葉です。

兄弟は大聖人の仰せ通りに戦ったゆえに勝利しました。師弟の信仰勝利の軌跡を綴られた御書は、人生勝利の源泉となる一書です。

常さまには世末になり候へば聖人・賢人も皆かくれ・ただ・ざんじむ・ねいじん・わざん・きょくりの者のみこそ国には充満すべ

〈注8〉【行解既に勤めぬれば】「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」（兄弟抄、1087ページ）

きと見へて候へば、喩えば水すくなくなれば池さはがしく風ふけば大海しづかならず、代の末になり候へば・かんばちえきれい大雨大風ふきかさなり候へば広き心も・せばくなり道心ある人も邪見になるとこそ見へて候へ、されば他人はさてをきぬ父母と夫妻と兄弟と諍う事れっしとしかとねことねずみとたかときじとの如しと見へて候

（1095ジ-2行目～6行目）

「一家和楽」は永遠の指標

通常、時代が末法になれば、聖人・賢人がいなくなるとされます。代わりに、悪世には、讒人や佞人、和讒の者、曲理の者ばかりが国に充満する。

「讒人」とは、讒言（他人を陥れるために、偽りを言うこと）をする者のことです。「佞人」は、口先が上手で、心の邪な人であり、邪智にたけた人、へつらう人。また「和讒」は、一方で和らぎ親しんで、他方で事実を曲げて悪く言うこと。「曲理」とは、道理を曲げることをいいます。いわば、人間の相互不信を募らせようと画策する人々が、悪世には跋扈する。大聖人は、この悪世の時代の特徴として、一般の人々はもとより、父母・夫婦・兄弟といった肉親の中での争いが激しくなることを強調されています。

大聖人の兄弟に対する御指導においても、父親が極楽寺良観〈注9〉等の悪知識にすか

【今回学ぶ「兵衛志殿御書」の現代語訳】

常のありさまとして、時代も末になれば、聖人・賢人も皆隠れてしまい、ただ、讒言（他の人を陥れるための偽り）を言う人、口先が上手で邪な人、一方で親しみ和らぎ他方で讒言する人、道理を曲げる人ばかりが国に充満するのです。譬えば、水が少なくなれば池が騒がしくなる。風が吹けば大海が静かではなくなるようなものです。

時代も末になれば、旱魃、疫病、大雨、大風が吹き、災難が重なってくるので、広い心も狭くなり、道を求める心ある人も邪見に陥ってしまうと説かれている。

それゆえ、他人のことはさておき、父母、夫婦、兄弟が争うことは、猟師と鹿、猫と鼠、鷹と雉とのようであると説かれているのです。

（1095ジ-2行目～6行目）

されて、信仰の「心」を堕とそうとする三障四魔の働きを起こしたと洞察されています。

大聖人は、透徹した信心の眼で、極楽寺良観らの魔性の謀略に対しては徹して戦い抜かれました。

その一方で、池上兄弟には、誤った指導者に誑かされている父親に対して真の孝養を尽くし、妙法の力用でしっかりと最後は成仏へ導いていくように教えられています。

大聖人が兄弟に示された孝養観は、たとえ一時は父の言葉に背くようでも、自身が仏になってこそ、本当の意味で親を導くことができるとする考え方です。最後はどう父親を導くか。その一点を決して外されることなく、兄弟を指導されています。そして、幾度も「浄蔵・浄眼」〈注10〉の兄弟の例を取り上げ、この二人が父の妙荘厳王を導いたように、最後は、和楽の一家を築き上げるべきことを示されています。

「親父は妙荘厳王のごとし兄弟は浄蔵浄眼なるべし、昔と今はかわるとも法華経のことわりは・たがうべからず」（1091ページ）と仰せです。戸田先生もよくこの浄蔵・浄眼の話を通して、未入会の家族がいる青年を励まされました。

「浄蔵・浄眼の兄弟は、現実のうえで、妙法の力用を示して父王を納得させた。あわてて、信心の理屈を話す必要はない。時間がかかっても、かまわないから、まず自分自身が立派になって親を安心させていくことだ。そして本当に親を愛し、慈しみ、親孝行してもらいたい」と。

戸田先生が示された「一家和楽の信心」とは、本当に重要な信仰の指標です。また、戸田先生は、家庭にあって、信心のことでいさかうことがあってはならないとも言われていました。最も大切なのは誠実です。誠心誠意を尽くすことです。まず自分から、いつも朗らかに、楽しく、希望に燃えて、聡明に周囲を大きく包み込んでいく。この和楽を目指す姿の中に、信心の勝利があり、仏法の智慧が光っています。

妙法を信ずる人々の人間革命、家庭革命を通して、「皆が仏」「万人が尊極な存在」という法華経の思想が末法に復権していけば、争いの絶えない末法の宿業を大きく転換することができます。やがてはこの悪世末法を慈悲の暖流で包み返す希望の哲学が、社会へ世界

池田名誉会長 講義 **勝利の経典「御書」に学ぶ**

〈注9〉【極楽寺良観】1217年～1303年。真言律宗（西大寺流律宗）の僧。良観房忍性のこと。文永4年（1267年）、鎌倉の極楽寺に入ったので、極楽寺良観とも呼ばれる。権力に取り入って、種々の利権を手にする一方、日蓮大聖人に敵対し、大聖人と門下に対する数々の迫害の黒幕となった。

〈注10〉【浄蔵・浄眼】法華経妙荘厳王本事品に説かれる二人の王子。父は妙荘厳王、母は浄徳夫人。浄蔵・浄眼の兄弟は、外道を信じている父・妙荘厳王のために、さまざまな神通力を見せて、父王を化導した。

へと広がりゆくのです。

良観等の天魔の法師らが親父左衛門の大夫殿をすかし、わどのばら二人を失はんとせしに、殿の御心賢くして日蓮がいさめを御もちゐ有りしゆへに二のわの車をたすけ二の足の人を・になへるが如く二の羽のとぶが如く日月の一切衆生を助くるが如く、兄弟の御力にて親父を法華経に入れまいらせさせ給いぬる御計らい偏に貴辺の御身にあり

（1095ジ-6行目～9行目）

師匠の仰せ通りに戦った勝利

大聖人は、池上兄弟が天魔の謀略に打ち勝った要因として、兄弟二人の「団結」の力をあらためて強調されています。ここで「殿の御心賢くして日蓮がいさめを御もちゐ有りしゆへ」と言われているのも、まさしく兄弟二人の団結の力によって父親を入信に導いたのであり、それは、ひとえに弟・宗長の戦いによってであると賞讃されています。

ここに、広宣流布は「団結」の力によって築かれるとの重要な原理が示されています。

現実に大聖人は、苦境に立たされた宗長に対して、〝私は兄につきます。兄を勘当されるのならば、私も兄と同じだと思ってください〟（1091ジ-）と、父親にはっきり言い切りなさいと指導されたことがあります。

この毅然とした姿勢があればこそ、事態を大きく打開できたことは間違いないでしょう。魔が分断を狙う以上、兄弟二人が団結している限りは、魔の入る隙はありません。逆に兄弟の心に隙があれば、魔はいくらでも侵入可能だったといえます。

【今回学ぶ「兵衛志殿御書」の現代語訳】

極楽寺良観らの天魔の法師らが、父上の左衛門大夫殿をだまして、あなた方二人を退転させようとしたが、あなたのお心が賢くて、日蓮が諫めたことを用いられたからこそ、二つの輪が車を進め、二本の足が人を支えるように、二つの羽で鳥が飛ぶように、太陽と月が一切の人々を助けるように、兄弟の力によって父親を法華経の信心に入らせました。この計らいは、ひとえにあなた御自身の力によるものである。

（1095ジ-6行目～9行目）

大聖人は、兄弟に対しては、団結の重要性を繰り返し指導されています。「兄弟抄」の後半に説かれる故事・説話はすべて団結の重要性を物語ったものです。また、兄を捨てて父の側についても、千万年も栄えることはできないと示された御書もあります（1093ページ）。父親が入信し、亡くなった後も、大聖人はこの池上兄弟に重ねて、団結して仲良く前進しなさいと指導されています（1100ページ）。さらにまた、漁夫の利（鷸蚌の争い〈注11〉）の故事を通して、二人が不和になってはならないと御指導されています。

「内から言い争いが起こったら、鷸蚌の争いとなって漁夫の利益となってしまう。南無妙法蓮華経と唱えてつつしみなさい。つつしみなさい」（1108ページ、通解）とあります。

大聖人は、また兄弟だけでなく、それぞれの夫人たちにも団結を呼びかけられたことは有名です。夫人たちには「一同して夫の心をいさめば竜女が跡をつぎ末代悪世の女人の成仏の手本と成り給うべし」（1088ページ）とも仰せです。この大聖人のお心にお応えして、夫人たちは立ち上がりました。義父にも誠実に尽くしたことでしょう。

大聖人は、特に弟の宗長については、夫人の兵衛志殿女房をこまやかに激励されました。広布に生きる夫婦は、「妙法の同志」であり、「共戦の友」です。この原理は、大聖人の御在世も今も変わりません。池上兄弟の勝利は、夫人たちの勝利でもあったのです。

女性には、どこまでも「人間尊敬」「生命尊厳」の根本から、ものごとを捉える賢さがあります。聡明な宗長の妻も、大聖人こそが、末法の闇を照らし、万人の幸福の道を開いていかれる方であると心から尊敬し、師と仰いで戦ったことは間違いありません。この師弟不二の心が、兄弟夫妻の勝利をもたらしたのです。

「久遠の友」の団結

広宣流布は仏と魔との闘争です。異体同心の団結がある限り、魔を打ち破って広宣流布は前進します。団結は、広宣流布の永遠のテーマです。大聖人も、門下が仲良く前進できるように、さまざまに御配慮されています。

異体同心の「心」とは、広宣流布を力強く推し進めていく「心」です。その意味で、仏

〈注11〉【鷸蚌の争い】鷸（シギの一種）と蚌（ドブガイの類い）が争っているうちに、漁夫に両方ともつかまってしまったということから、争うことが共倒れになり、第三者を利することをいう。

の願いである広宣流布という「大いなる目的」のもとに、人々が結集されていくのです。言い換えれば、異体同心の「心」とは、仏の心をわが心とすることであり、それでこそ真実の団結となります。

悪人たちは、一度は「反法華経」を結集軸に結託はしますが、もともと、永続的・普遍的な目的ではなく、一過性の野合に過ぎません。善の勢力が強ければ、最後は必ず瓦解していくことは間違いありません。

妙法を持った一人一人が、唱題を根本に自身の仏性を開けば、久遠の誓いが呼び覚まされ、真実の地涌の団結が可能になるのです。

戸田先生は言われました。

「あの晴れやかな世界に住んだわれわれが、いままた、この娑婆世界にそろって涌出したのである。思いかえせば、そのころの清く楽しい世界は、きのうのようである。なんで、あのときの晴ればれした世界を忘れよう。ともに自由自在に遊びたわむれた友をば、どうして忘れよう。またともに法華会座に誓った誓いを忘れえましょうか。

この娑婆世界も、楽しく清く、晴ればれとしたみな仲のよい友ばかりの世界なのだが、貪、瞋、嫉妬の毒を、権、小乗教、外道のやからにのませられて狂子となったその末に、たがいに久遠を忘れてしまっていることこそ、悲しい、哀れなきわみではあるまいか」

私たちは久遠以来の異体同心の同志です。元初の生命を呼びさまし、久遠の誓いを果たす地涌のスクラムで前進していきましょう。

又真実の経の御ことはりを代末になりて仏法あながちに・みだれば大聖人世に出ずべしと見へて候、喩へば松のしもの後に木の王と見へ菊は草の後に仙草と見へて候、代のおさまれるには賢人見えず代の乱れたるにこそ聖人愚人は顕れ候へ、あはれ平の左衛門殿さがみ殿の日蓮をだに用いられて候いしかば、すぎにし蒙古国の朝使のくびは・よも切せまいらせ候はじ、くやしくおはすらなん

（1095ページ9行目～12行目）

「偉大な聖人」が悪世を変革

仏法の道理に照らせば、悪世末法にあって、

仏教の教えが激しく乱れる大悪の時代にこそ、「偉大な聖人」、すなわち大聖人が出現することが説かれています。本抄の冒頭で、悪世では聖人・賢人も隠れるとあります。仏法がいよいよ乱れた時に、悪世末法を救う「偉大な聖人」が出現することは、経文に説かれている道理にほかなりません。

松は霜が降りる季節になっても枯れることはありません。また、菊は、あらゆる草が枯れた後に花を咲かせます。まさに世の中が乱れ切った寒々とした時代だからこそ、本当に人々を救う偉大な聖人の存在が輝きを放つのです。これは言うまでもなく、濁悪の末法を救う教主として日蓮大聖人が出現されたことを示されていると拝されます。

混乱の時代には、人々の判断が狂い、正義の人、真の賢人、真の聖人をまっすぐに見ることができず、かえって迫害を加えます。しかし、人々の誤った判断によって、いよいよ世の中が行き詰まった激動の時代には、「聖人愚人は顕れ候へ」と仰せのように、本物と偽者の違いが明瞭になります。本抄で大聖人は、当時の鎌倉幕府の宗教に対する判断の当否がやがて明瞭になる。その時に、だれが真の賢人か、愚人かが浮き彫りになると仰せです。

池上兄弟は草創からの弟子です。まだ、大聖人の智慧と慈悲が世間から誤解され、非難されているなかで信心を貫いてきました。それだけに、混乱の世の中で、いよいよ大聖人の正義が証明される時が来たとの確信も強くなってきたと思います。

なぜ、賢人と愚人が明瞭になるのか。それは、濁世を救うために力ある哲学をはっきりと叫ぶ賢人・聖人が出現するからです。

【今回学ぶ「兵衛志殿御書」の現代語訳】

また、真実の経の理として、時代が末になって仏法が激しく乱れると、偉大な聖人が必ず世に出現されると説かれているのです。

たとえば、松は霜が降りたのちも枯れないので「木の王」といわれ、菊はほかの草が枯れたのちに花を咲かせるので「仙草」といわれる。世の中が治まっているときには誰が賢人であるか見えないが、世の中が乱れているときにこそ、聖人と愚人の違いが明らかになるのです。

もし平左衛門尉殿や相模守殿（北条時宗）が日蓮を用いられていたならば、先の蒙古からの使いの首を、決して斬らせることはなかったであろう。今は後悔されていることであろう。

池田名誉会長 講義 **勝利の経典「御書」に学ぶ**

人間不信の乱世だからこそ、究極の「人間尊敬」の思想を説く法華経の真価が発揮されます。十界互具〈注12〉が説かれない爾前経は、霜の季節や晩秋に多くの草が枯れるように、民衆を救う根源的な力がない。したがって、この法華経を弘める真の聖人の存在こそが、最終的に輝きを放つようになります。

この原理は現代も変わりません。戸田先生は常々、「民族が復興するには、かならず哲学が必要である」と語っていました。また、物質文明が行き詰まる時に、根本の哲学が必要になると言われたこともあります。哲学や精神性こそが、時代を根本的に動かしていく原動力です。言い換えれば、その哲学の持つ人間観、目的観、精神性こそが、問われてくる。牧口先生は、究極の目的が定まらなければ、何も定まらない。それは、交番に行って「私の行く先はどちらですか」と聞くようなものだと語っておられたといいます。

「今の時代にとって必要なのは、けちな狡い卑怯な乞食根性を人間の魂から払い落とすような剛毅な精神の人々である」（『ベートーヴェンの生涯』ロマン・ロラン著、片山敏彦訳、岩波書店）とは、ベートーヴェンの叫びです。まさに現代は、人間性を高めていく崇高な精神の人々の登場を待ち望んでいるのではないでしょうか。

自他共に人間の可能性を見いだし、その力を発揮させ、万人尊敬の「自他共の幸福」を目指していく人間の出現。まさに、法華経に説かれる地涌の菩薩の人間群像を時代は待望しています。

21世紀の世界の諸宗教は、人間の内なる尊極性に目を向けていくことは間違いありません。人間自身の中に、人間を超えた崇高な精神性を発見したのが法華経の真髄です。「大聖人世に出ずべし」と大確信を示された如く、この法華経の人間観を体現した偉大な民衆群が出現すれば、時代の闇を照らす灯台の存在になることは疑う余地がありません。

人間に希望を与える宗教。
人生に意味を与える思想。
民衆の幸福と地球の平和をリードする連帯。
世界の宗教が切磋琢磨していく時代を迎えていると言えます。

末法という濁流の中で、人間の可能性を開

〈注12〉【十界互具】地獄界から仏界までの十界の各界が、互いに十界を具えていること。

き、内なる尊極性に万人が目覚める方途を確立されたのが日蓮大聖人です。池上兄弟をはじめ、自他共の幸福の大道を開いた門下たちの信仰体験は、日蓮仏法の真価を生活と社会の中で証明しています。今、創価学会もまた、人間の中で、生命根源の力を証明する実践を繰り広げています。

万人の善性の開発という仏の大願を現代に継承した、創価の地涌の信仰体験こそ、末法の民衆の大いなる希望となることは間違いありません。末法万年への「未来への物語」を作っている学会員一人一人の挑戦こそ、〝何ものにも替えがたき人々〟として世界から絶讃される時代が到来し始めています。

「一人一人の人間革命」が、「人類の運命を変える」壮大な試みとなっていくのです。

絢爛たる100周年へ、凱歌の時代を築くためにも、見事なる創価の同志の勝利劇を飾っていきたい。広宣流布という崇高な大目的に立ち、皆、仲良く信頼をもって、異体同心で勝ち進もう！。

団結また団結

これが創価の三世の家族なり

弟子の戦いが一切を決する。さあ、勝利の春へ、「未来への物語」を綴りゆこう（東京）

アジア広布新時代へ

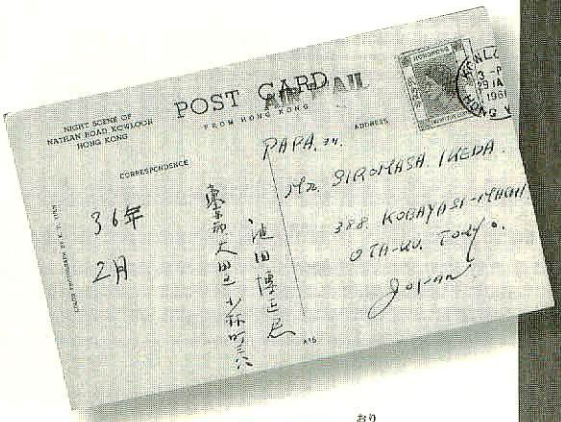
池田先生と香港・マカオ

創価学会インタナショナル副会長　池田博正

愛用のカメラを手に香港市内を散策（1995年）

私の手元に、1枚の絵はがきがある。消印は1961年1月29日。池田先生がアジア広布の第一歩を印した香港から送ってくれたもの。小学1年生だった私は、香港の繁華街・九龍の鮮やかな夜景が映った〝父からの絵はがき〟を見つめ、未知の世界へ心を躍らせた。

本年1月、私は久しぶりに香港・マカオを訪問。マカオ理工学院から先生に贈られた「名誉教



池田SGI会長が香港初訪問の折、池田博正SGI副会長に送った絵はがき

アジア広布
新時代へ

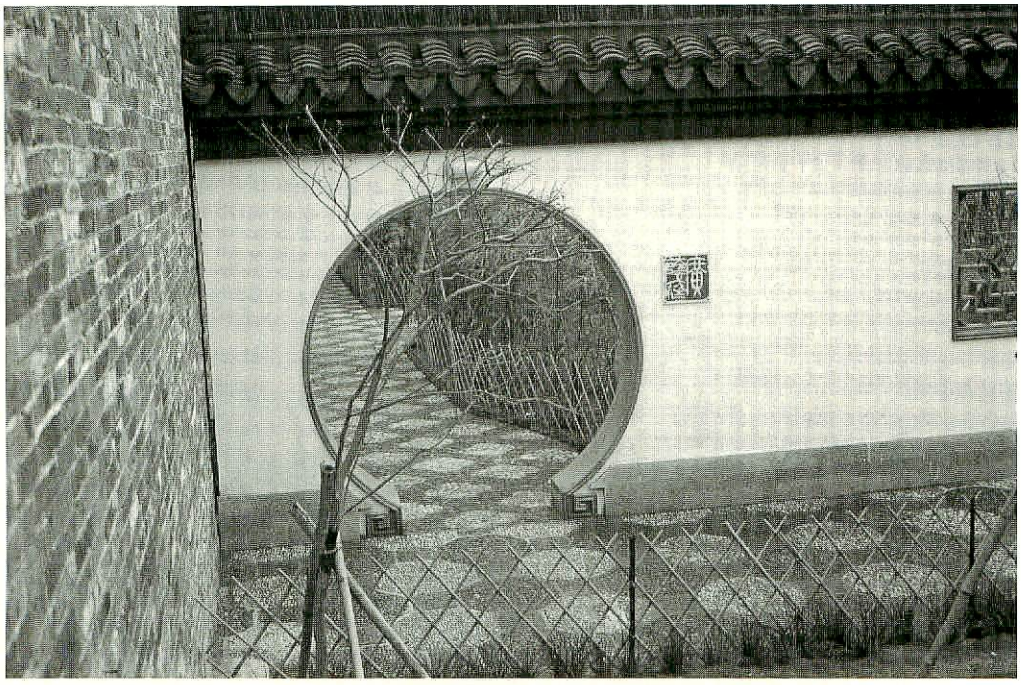
授」称号の授与式や、アジア広布50周年を祝賀する「2011香港SGI（創価学会インタナショナル）文化祭」、「香港・マカオSGI代表者会議」などの諸行事に出席した。

香港の街は、中国正月を前にしてイルミネーションが華やかで、50年前に届いた絵はがきを、ふと思い出した。

代表者会議に寄せられたメッセージに、「行く先々で、移動の車中で、どこにあっても大地に題目をしみ込ませる思いで唱題し、地涌の菩薩が躍り出ることを願いました」と。この言葉通り、現在、香港・マカオには、青年部を中心に、後継の陣列が見事に構築されている。

半世紀におよぶ激励の一手一手が、友の躍動の姿に結実していた。それは、〝百万ドル〟と言われる香港の夜景よりも美しく、歓喜の

九龍塞城公園の「月光の門」（SGI会長撮影）



輝きを放っていた。

◇

池田先生は、これまで20回、香港を訪問している。私も、1988年以降、10回にわたり、香港・マカオへの平和旅を共にしてきた。

「大地に題目をしみ込ませる思い」と聞いて、私は「大阪の戦い」を思い起こすが、香港も大阪と同じくパワフルな庶民の街である。

先生は、香港の気取らない雰囲気が好きだ。人々の逞しいバイタリティーを愛している。

香港では、行事や執務の合間に、よく、商店がひしめく街中を歩く。スタスタと一人で横道に入っていく。観光客が行かないような、少し汚れた道でもお構いなしだ。同行のメンバーが見失いかけて、急いで追いつくと、先生はすでに、店のおじさん、おばさんとコミュニケーションをとっている。

お菓子やお土産を売っている店、食料品店、雑貨店……。どんな店でも、スーッと入っていく。日本のメンバーへのお土産をたくさん購入し、現地人さながら、値引きの交渉もする。「これだけ買うから、少しまけてよ」――その〝勝負〟を楽しんでいるようだった。

あまりに買いすぎて、ポケットマネーを全部使い、母に大笑いされたことも、しばしばであった。

散策の途中で、同志に会うこともあった。地下鉄の工事現場を通る際、そこで働いている作業員が先生に声をかけた。香港の壮年部員だった。先生は、握手を交わし、その人の状況を聞き、励ましの言葉を送った。

ある雑貨店では、女子部員が働いていた。それを知ると、先生は、さらにたくさんの品を買い求め、店の主人に、彼女のことをよろしくと、頭を下げる。

庶民の足である二階建てバスに

香港総合文化センターの近隣の老婦人と(1997年)

池田SGI会長の香港・マカオ訪問

①	1961年	1月	香港地区結成
②	62年	2月	香港支部結成
③	63年	1月	香港支部大会
④	64年	5月	代表と懇談
⑤	64年	10月	代表と懇談
⑥	74年	1月	東南アジア仏教者文化会議　第1回代表者会議
⑦	74年	5・6月	香港代表者会議
⑧	79年	2月	香港文化節
⑨	83年	12月	SGI香港文化祭
⑩	88年	1・2月	第9回世界青年平和文化祭
⑪	91年	1・2月	マカオ初訪問。マカオ・東亜大学「名誉教授」授与式
⑫	92年	1・2月	香港中文大学「最高客員教授」授与式
⑬	93年	5月	香港創価幼稚園初訪問
⑭	94年	1・2月	日本美術名宝展
⑮	95年	10・11月	マカオ大学「名誉社会科学博士号」授与式
⑯	96年	3月	香港大学「名誉文学博士号」授与式
⑰	97年	2月	吉林大学「名誉教授」授与式
⑱	98年	2月	世界の少年少女絵画展
⑲	2000年	2月	広東外語外貿大学「名誉教授」授与式
⑳	00年	12月	香港中文大学「名誉社会科学博士号」授与式

乗り込んだこともあった。

1996年5月、香港総合文化センターがオープン。近隣に、いつもバケツを持って掃除をしている老婦人が住んでいた。孫だろうか、小さな少年もそばにくっついている。怪訝な顔でこちらを見ていたが、先生が気さくに声をかけた。

「すいませんね。お騒がせしています」

すると老婦人は、「いえいえ、賑やかな方がいいですよ」と笑顔になった。その後も、文化センターを訪問するたびに交流を重ね、少年も、先生を見ると笑顔で走り寄ってくるようになった。

先生は、庶民と語り、庶民の目線で香港の息吹を感じているようであった。いや、根っからの庶民なのだと、香港での姿を見ていて痛感する。

◇

マカオ理工学院での「名誉教

授」称号の授与式。この式典を見事に取り仕切っていた女性の学術事務部長が1枚の写真を見せてくださった。95年11月、マカオ大学で挙行された「名誉社会科学博士号」の授与式での一コマ。先生と共に、学生時代の彼女が写っている。いつも持ち歩いているのか、綺麗に装丁されていた。

聞けば、当時、学生会の会長として、式典で介添えをしていたそうだ。先生の振る舞いに感動し、その写真を大切にされているという。

マカオ理工学院の李向玉学長は、先生が74年に中国を初訪問した際、北京で学ぶ学生だった。当時は中国とソ連が対立しており、李学長は、志願して国境線に行くつもりだった。池田先生の訪中のニュースを伝え聞き、平和と友好への思いを深く感じたという。「池田先生の平和の闘争があったからこそ、私は今、ここにいるのです」と語っておられた。

◇

池田先生が、日中両国の人民のために築いてきた、友誼の「金の橋」。「香港返還」の際も、先生の思いは、香港市民に、メンバー一人一人に注がれていた。

82年、中英交渉が始まり、香港社会が揺れた。不信と不安から、海外への移民も相次いだ。その時も真っ先に香港を訪れ、安心と励ましの風を送ったのが、池田先生であった。

歴史的転換を平和裏に。大好きな香港の友を守りたい——池田先生が中国の首脳や香港の歴代総督と語り合う胸中には、常にそうした熱い心があったと、私には思えてならない。

その一つの象徴が、返還の5年前に、英若誠氏を香港でSGIの会合に招いたことである。氏は、

写真㊦=マカオ大学からの名誉社会科学博士号の授与式で、決議書にサイン（1995年）／写真㊥=作家の金庸氏と対談（97年、香港）。氏は、「香港の返還についても、だれもが経済的な観点から見ています。文化的、平和的な観点から見てくださっている方は、池田会長です」と ／写真㊤=マカオ理工学院からの名誉教授称号の授与式。池田SGI副会長に代理授与（本年1月、マカオ）

中国の文化部副部長（副大臣）などを歴任。一方、映画「ラスト・エンペラー」などに出演した名優で、先生と友誼を重ねてきた。

香港の人々にとっても、〝馴染み〟ある氏の存在。中国の〝代表〟でありながら、親しみやすい〝人気者〟。皆、大歓声で氏を迎えていた。

友情と文化の力は、中国と香港の心の距離を縮めたのではないだろうか。氏ご自身も、先生との会見で、「まさか香港でお会いできるとは思いませんでした」と、喜びを語っておられた。

かつて先生は、〝日中両国が交流する上で大切なことは〟と質問された際、「民衆です。政治や経済の交流を船にたとえれば、民衆が大海原になります。民衆と民衆の交流があれば、政治と経済の船は前進します」と答えた。

この信念があったからこそ、先生は香港の街を歩き、庶民と語り、人々の状況や思いを聞いていたのではないか。そして、中国と香港を行き来し、新体制への安心感を、その後の飛躍をさまざまな人に伝えようとしたのではないか。そう思えてならない。

池田先生は、香港・マカオについて「平和の港」「希望の港」と呼んでいる。平和への素朴にして切なる願い、何ごとにもへこたれぬ明るさ、明日を信じる強さ。先生は初訪問以来、この庶民の魂を感じ取り、最大のエールを送り続けてきたのではないだろうか。

久しぶりに絵はがきを取り出して、半世紀にわたる庶民の勝利劇に、思いを馳せた。

リポート

躍動する香港・マカオ青年部

アジア広布 新時代へ

「こんなにも多くの青年を糾合しているとは、想像もつきませんでした。仏教団体ということで、古くさい教団ではないかと思っていたのですが、完全に見方を改めました」――1月に開催された「2011香港SGI文化祭」に出席した香港の著名なマスコミ関係者は、感動を語っている。

青年が躍動する姿は、社会の活力のバロメーターといえよう。喜々として活動し、信頼と実証を広げている香港の青年部員は、香港社会にとって、未来の希望の存在と輝いている。

中国本土の企業に勤務するメンバーも多い。また、一般的に、香港人は暮らしの忙しさに追われていると言われている。そんな中、メンバーは、創意工夫して時間をつくり、会合参加や仏法対話に挑戦している。

「2011香港SGI文化祭」での歓喜の舞

さまざまな行事では、龍昇会（日本の創価班に相当）、牙城会、鳳華会（日本の白蓮グループに相当）が颯爽と着任。また、男子部の香港池田雄師会、女子部の香港池田華陽会などの人材グループを中心に、仏法の法理や師弟の精神を学び、実生活で勝利を誓う。また、「青年仏法講座」を隔月で開催。友人を誘い、人生の諸問題を解決していく方途を示している。

近年の知識型社会への変化に伴い、メンバーの教学に対する熱意が増した。教学を徹底して学び合う「青年部教学学院」も活発に行われている。

学生部では、3大学で「暴力文化から平和文化へ――人間の精神変革展」と題した展示を行い、理解を拡大。創価教育学に基づいた論文を執筆し、高評価を受け、国際シンポジウムで発表したメンバーもいる。

社会への貢献運動も活発に。音楽隊・鼓笛隊は、地域のさまざまなイベントに出演。未来部も、老人ホームや児童施設を訪れ、笑顔を届けている。

香港青年部は、勝利の実証と振る舞いを通し、共感の輪を大きく広げている。

◇

あの「ギア灯台」の一条の光が
海の男たちに
航路を教えたように

君が　あなたが
「励ましの灯台」となって
あの友に　この友に
希望の光を届けよ

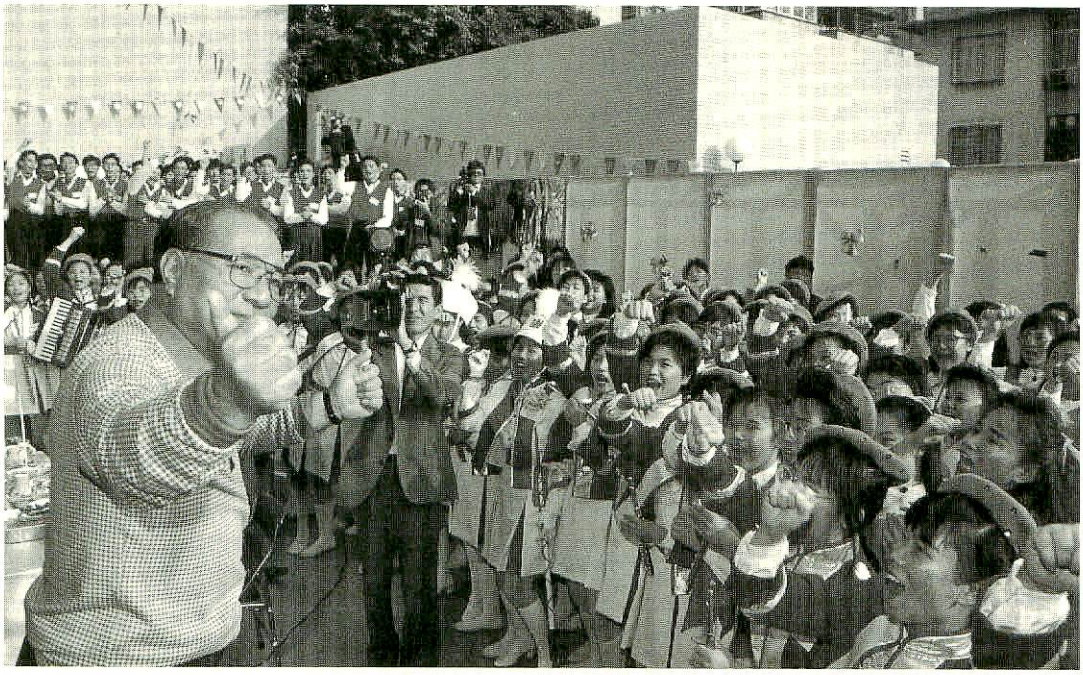
出発だ！　出発だ！　出発だ！
舵を握るのは青年の君たちだ！
（輝け！「人間共和」の永遠の都）

1999年に池田SGI会長がマカオの友に贈った長編詩が、青年部の原点となっている。

観光都市・マカオ。GDP（地域総生産）の約5割を、観光・カジノ産業が占める。観光業に従事する青年部員も多く、週末になれば多忙さを増す。

そんな中、メンバーは、機関紙やSGI会長の著作、教学関連の書籍を持ち歩き、自己研鑽や対話に挑んでいる。

「如蓮華在水」――マカオの青年部が胸に刻む法理だ。陽気な街ゆえ、世間の風潮に流されやすい環境でもある。経済も順調に伸びている。ゆえに青年層は、現状に甘んじ、目先の利益に左右される傾向にある。しかし、メンバーは、正しい哲学をもち、まっすぐに人生を歩んでいけるよう、日々、鍛錬しているのだ。



香港鼓笛隊のメンバーを激励する池田SGI会長（1988年）

マカオ青年部の姿に、識者は、『異体同心』という言葉を伺ったが、まさに、いろいろな職業、立場の方が、一つに向かって進んでいる。大いにこの価値観に学び、調和のとれたマカオ社会建設へ進んでいきたい」と述べている。

日々の活動では、人材グループを中心に、教学や広布史を研鑽している。

2月27日には、「青年学会　第1回マカオSGI男女青年部総会」を晴れやかに開催。師弟共戦に立ち上がったマカオ青年部が、新時代の新たな〝励ましの灯台〟と成長し、友の心に希望の光を送っていく。

ランドセル

福岡・北九州市／白ゆり長
伊高美香

双子の息子・大空と大地が、4月から小学生になります。ランドセルを背負う姿を目に浮かべると、思いがあふれて目頭が熱くなります。

私たち夫婦は、平成15年1月に結婚。妊娠が難しいと言われ、不妊治療を始めました。身体的にとてもつらく、精神的にも、経済的にも苦しくなり、やめました。でも、子どもを授かりたいとの思いは高まるばかり。自然妊娠が分かったのは、平成16年10月のことでした。うれしくて涙が止まりませんでした。

予定日は、17年の6月20日。双子だと知った喜びも束の間、2月26日の検査で、双子が共に命を失う恐れのある「双胎間輸血症候群」と告げられたのです。

数日後、突然の出血。祈って授かった大切な命です。わが子を助けるため、山口県の病院に転院し、手術を受けることに。ところが、直前で状態が悪化し、手術が不可能になってしまったのです。多くの人が力を尽くしてくれ、ドクターヘリで再び元の病院に搬送されました。

状態は、いったん落ち着きました。おなかの子どもたちに、名前を付けることにしました。ヘリコプターから見えた青空を思い浮かべ、大空、大地と名付けました。

「一日でも長く、おなかの中にいてね」と、祈るような気持ちで語りかけました。夫がベッドの傍らで『香峯子抄』（主婦の友社刊）を読んでくれ、母親として生きる強さがわいてきました。

ところが3日後、状況が急転。おなかの子どもたちの胎動が弱まり、急遽、出産することになったのです。その時、池田先生から、「お題目を送っています」との伝言が届きました。私たち夫婦は、

「子どもは、かけがえのない宝です」と美香さん（中央）。右が大空くん、左が大地くん。
その後ろに、夫の基文さんと颯香ちゃん

双子と共に家族4人で絶対に生きて病院から帰ると誓いました。

そして、予定日より3カ月早い3月16日という記念日に、大空は840㌘、大地は610㌘の超未熟児で生まれたのです。

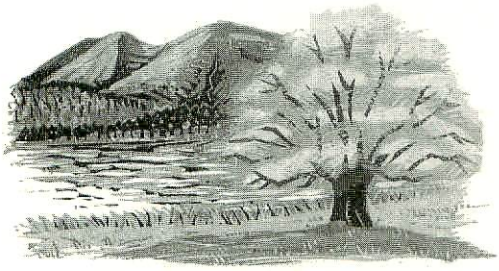
翌日、NICU（新生児集中治療室）の保育器の中にいる2人の小さな手を握り、〝生まれてきてくれてありがとう〟と何度も語りかけました。わが子は7月3日、元気に退院。願った通り、4人で家に帰ることができたのです。

その後も、身ごもった子どもを失ったり、生まれてきた長女・颯香が、原因不明の低体温で生死をさまよったりするなど、試練が押し寄せましたが、同志の温かい励ましに包まれて、一切を勝ち越えることができました。

子どもたちは、身をもって仏法の偉大さを教えてくれたのです。「何があっても負けない！」と、使命の子らと共に前進します。

変わりたい

北海道・札幌市／女子部区主任部長
得能昌子



もう、お客さまが来ることのないデパートのフロア。カチャカチャと、在庫の食器を片付ける音が妙に響いていました。

創価女子短期大学を卒業後、札幌の大手百貨店に就職し、和食器売り場を担当。ところが1年半後、突然、デパートの閉鎖が決定。備品を片付け終え、がらんとしたフロア――。空虚感が、私の心を覆いました。

再就職先は調剤薬局。処方せんの受付事務などが私の役目でした。明るい接客で喜ばれたデパートとは違い、慢性疾患や心の病など、さまざまな方がいて、元気な姿が逆効果になることもあります。医療知識もない私は、何をどうしたらいいのか、戸惑いました。

上司は厳しく、仕事も〝見て覚えなさい〟という雰囲気で、私は委縮してしまいました。空き時間の外出が、唯一、解放される時間になってしまいました。

女子部のリーダーとしての立場を気にして、家族や同志に悩みをさらけ出すことができず、〝強い自分〟を取り繕う日々。やがて心身のバランスが崩れ、学会活動から離れました。〝ここから逃げたい。すべて投げ出したい〟と、悶々と過ごしました。

そんな時、前の職場の同僚と再会。彼女は学会に入会していました。私が活動から離れていることを打ち明けると、彼女は強い口調になりました。

「昌子が池田先生のことを、みんなに語らないでどうするの！」

グサリと心にささりました。「社会で実証を」と誓った先生への思いが、体中から音を立てるようにあふれ出てきました。

「先生！」――師弟の原点が、私を素直にしてくれました。「信心したい！　活動したい！　変わり

「自分が笑顔だと、相手も明るい表情になるんです」と得能さん

たい！」――一念が定まりました。

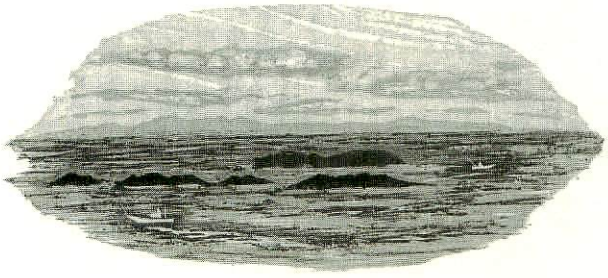
まず、職場の人たち全員の幸福と、会社の発展を祈りました。学会活動を再開すると、今まで〝文句の対象〟だった周囲に対して、〝私は、皆のおかげで成長させてもらっている〟と感じるように。職場に貢献できるのであれば何でもやろうと、主任試験にも挑戦。すると、厳しかった上司が、私の変わる姿を見て、新役職に推薦してくれたのです。

現在は、主に道央・道南の15店舗を担当し、業務の指導や人材育成を行っています。社長からは、〝得能さんは私の右腕だ〟と、ありがたい評価を頂きました。

師匠への素直な思いが、私を変えてくれました。弱さも悩みも全部抱きかかえて素直に信心すれば、自分が変わる。そして、周りをすべて諸天善神の働きに変えることができる。そう実感する毎日です。

瀬戸の潮風

山口・防府市／地区部長
横山 隆



冬の寒さが厳しければ厳しいほど、春を迎える喜びはひとしおです。一足早く花開く桜を見に、多くの方が可動橋を渡り、わが島・向島を訪れます。山口県防府市南端に浮かぶ向島は、人口1500人を抱え、美しい瀬戸内の自然を望むことができます。

そんな向島に、わが家が転居したのは、20年前のことでした。

当時、3歳の長男は言葉がしゃべれず、突然、走り出したりする症状がありました。やがて長男は、多動症をともなった重度の知的障がいと診断されました。

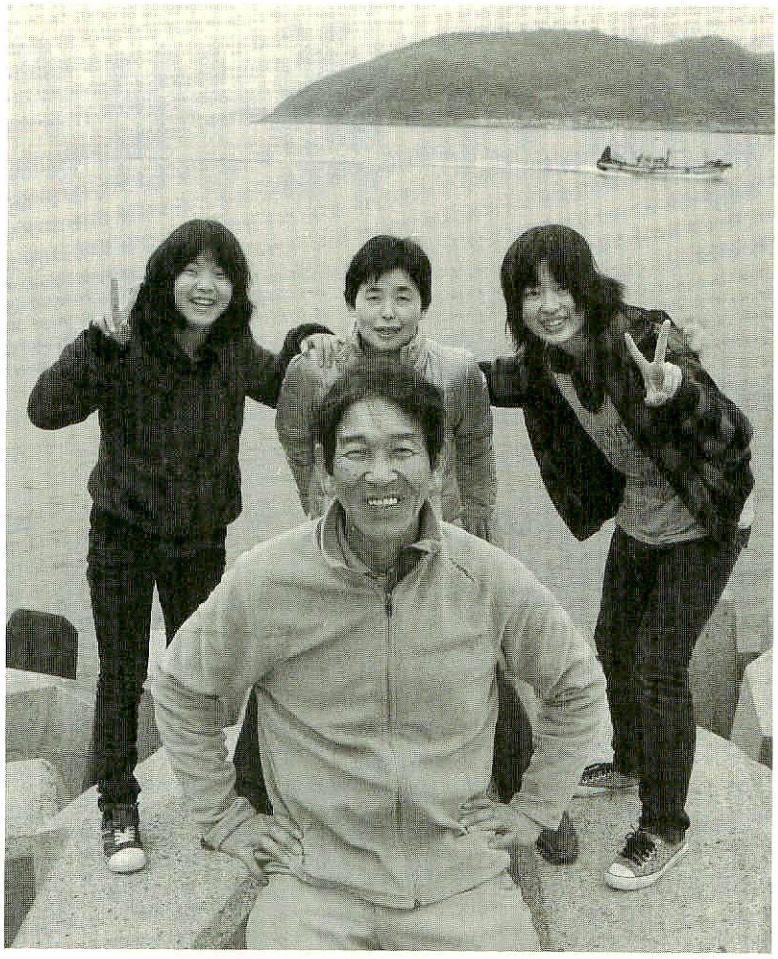
結婚後、学会活動に消極的だった私は、先輩の激励を受け、再び信心に立ち上がりました。「この子にも必ず使命がある。『冬は必ず春となる』と信じ、地域広布に勇んで生き抜こう」と。

向島は、旧習深く、学会への偏見がありました。私のようなよそ者が話す仏法の話など、なかなか聞き入れてもらえませんでした。

平成9年、そんな私が、離島広布の重責を担う島長の大任を受けることになったのです。〝こんな私に、何ができるだろうか〟。唱題しながら自問自答しました。そこで出た結論が、〝俺自身が、島の人たちから信頼される人間になるしかない〟でした。

妻は子供会などの役員を務め、私も地域のお手伝いは何でも引き受けました。地域の方が少しずつ心を開いてくれました。仲良くなった人に、聖教新聞の購読推進ができ、座談会にも新来者として出席してもらえるようになりました。今では、瀬戸内の離島の中でも、〝聖教啓蒙、座談会の島〟として有名です。

地域の学会理解の広がりに手応えを感じ始めた時でした。今度は、中学2年の長女が不登校になりま



嵐光明媚な瀬戸内を背景に。隆さんを囲んで、右から、長女のひかりさん、妻の鈴子さん、次女のみどりさん

した。心が挫けそうになりました。でも、ここで私が負けてしまっては、一家の宿命転換は果たせない、と思い、奮起しました。それまで以上に、学会活動に励み、妻とともに唱題を重ねました。

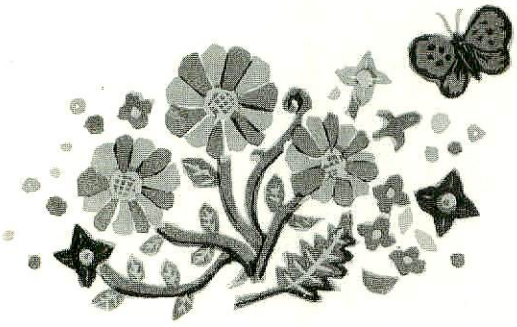
1年後、長女は、以前のように元気に学校に通えるようになりました。さらに高校へは、授業料免除の特待生で合格することもできました。今は高校生活を満喫しています。まるで夢のようです。

長男は、多動症の症状が以前に比べて、かなり治まりました。私も、空前の不況にもかかわらず、左官業の仕事が順調です。今、振り返ると、しみじみと思います。〝長男の多動症も、長女の不登校も、すべて、私に信心を教えてくれるためだったのだ〟と。

厳冬を乗り越え、暖かな瀬戸内の潮風を受ける喜びを胸に、さらに地域広布に先駆する決意です。

弘くんに感謝！

東京・葛飾区／地区副婦人部長
藤川尊子



私には3歳年下の弟（弘）がいます。幼いころから、あまり声を出しません。病院で診察を受けると、自閉症とのことでした。言語障害もあり、物心がついてもしゃべれません。

でも、かわいい弟です。何とか言葉を教えようとしましたが、だめでした。

しかし、入会（昭和38年）以来、苦難を克服してきた母（幸子・支部副婦人部長）には、確信がありました。「しゃべれなくても、勤行ができればいいのよ！」。そう言って、弟をそばに座らせ、勤行をやり抜きました。私は弟に子供用の経本を見せ「にーじーせーそん……」と、来る日も来る日も、文字をたどらせました。

そんなある日。「弘くんが、勤行してる！」。みんなは、びっくりしました。いつの間にか、ひらがなを全部、覚えてしまったのです。

それ以来、弟は、自ら進んで、勤行をし、漢字まで読み、話せるようにもなりました。

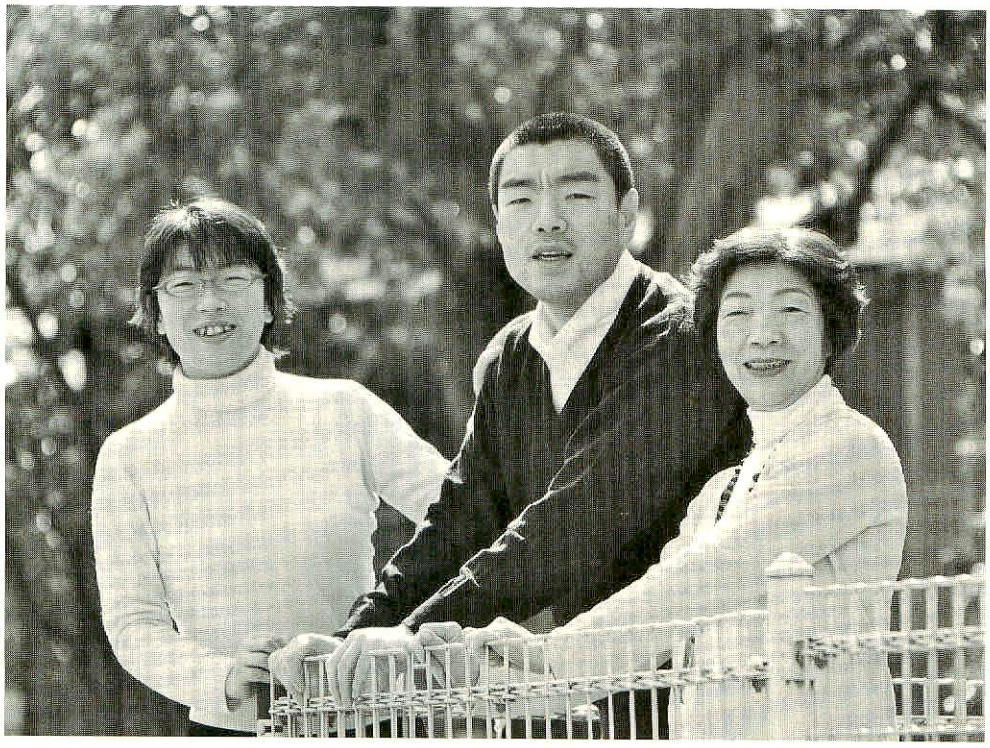
養護学校に通えるようになり、卒業後は、クリーニング工場で16年間、働くこともできました。

その間、大変なことも多々ありました。弟は、他人とのコミュニケーションは不得手です。そのため、職場ではずいぶん、つらい思いをしたようです。

帰宅すると、お風呂で、声を上げて泣くこともありました。「苦しかったら、辞めてもいいんだよ」と、声を掛けると、涙ながらに言いました。「お姉ちゃん、やめない。僕は、負けない！」

母は、弟を本部幹部会の衛星中継に欠かさず連れて参加しました。弟はいつの間にか、池田先生から、学会精神を学び、自分の生き方の根本にしていたのです。

私自身、高等部の人材グループ



この春、新たな挑戦を開始した藤川さん一家（左から尊子さん、弘さん、幸子さん）

として、何度か先生にお会いしたことがあります。それでも、家庭のつらさに家出をしたこともありました。仕事や活動に行き詰まり、「お姉ちゃんは、もうだめだ……」と、弟にグチをこぼすこともありました。すると、「元気を出して、また題目をあげようね！」と、励ましてくれたのです。

今でも、ちょっと気を緩めると、思いがけない問題が起こります。それだけに毎日が戦いです。母は「題目に勝る力なし」をモットーとし、毎日、思う存分、唱題に挑戦。私は、御書全編の音読に挑戦。3回目になります。

そうした中で、私自身、難関の秘書検定1級に合格するなど、実証も勝ち取りました。

この春、弟は新たな仕事に挑戦中です。そんな弟に、私は心から声援を送ります。「弘くん、信心を、負けじ魂を教えてくれて、ありがとう！」

※原稿募集　編集部では、「あしおと」の原稿をお待ちしています。自薦・他薦は問いません。

4月度

拝読御書の解説

座談会、研修教材

聖人御難事

師子王の心こそ
勝利の決定打！

拝読御書の背景と大意

本抄は「熱原の法難」の渦中である弘安2年（1279年）10月1日、身延で認められ、門下一同に与えられたお手紙です。また、四条金吾のもとに留めるように指示されています。

日蓮大聖人が身延に入山されたあと、若き日興上人は富士方面の弘教を一段と果敢に展開されました。

なかでも熱原郷では、次々に大聖人門下が誕生し、多くの農民たちも妙法に帰依しました。

こうした勢いに危機感を抱いた滝泉寺の院主代・行智らは、大聖人門下の迫害を企てます。

弘安2年9月21日、彼らは、〝大聖人門下の日秀が、農民信徒を集めて稲を刈り取り、盗んだ〟との虚偽の訴状を作り、讒訴しました。このため、農民信徒20人が捕らえられ、鎌倉へ連行されます。

本抄では門下一同に、各人が「師子王の心」を奮い起こし、いかなる迫害にも屈することなく信心を貫くよう励まされています。

それとともに大聖人は、日興上人らと連携して、門下の無実を訴える弁明書を準備され、不当な弾圧を糾弾されています。

農民信徒たちは、幕府の権力者である平左衛門尉の私邸で尋問され、「法華経を捨てて念仏を称えよ」等と恫喝・脅迫されました。やがて中心者の神四郎・弥五郎・弥六郎の3人は斬首されますが、一人も退転することなく、妙法の信心を貫き通したのです。

民衆が、不惜身命の信心の団結で法難に立ち向かう姿に、時の到来を感じられた大聖人は、本抄で立宗以来の経過を述べられ、御自身の出世の本懐を遂げられることを宣言されています。

また、大聖人が大難を受けることによって、法華経の言葉が真実であることを証明されてきた事実を通し、法華経の行者を迫害する者には必ず罰の現証が現れ、大難を乗り越えゆく大聖人一門には、成仏という偉大な境涯が開かれること、そのためにも月々日々に、たゆまず信心を強めていくことの重要性を強調されています。

聖人御難事

御書全集……1190ページ7行目～9行目
編年体御書…1209ページ7行目～9行目

各各 師子王の心を取り出して・いかに人をどすともをづる事なかれ、師子王は百獣にをぢず・師子の子・又かくのごとし、彼等は野干のほうるなり 吼 日蓮が一門は師子の吼るなり

一人一人が師子王の心を取り出して、どのように人が脅そうとも、決して恐れてはならない。

師子王は百獣を恐れない。師子の子もまた同じである。

彼ら（正法を誹謗する人々）は野干が吼えているのである。日蓮の一門は師子が吼えているのである。

何があろうと揺るがない自分。その根本となる信心の要諦は「勇気」、そして「師弟」であることを教えられた御文です。

勇気は「自分の中」にある

「師子王の心」とは何か――池田名誉会長は語っています。

「それは、一言で言えば、『勇気』である。この勇気は、自分の外にあるのではない。自分の胸中にある。勇気は、特別な人だけがもっているのではない。だれでも平等にもっている。しかし、どれほど多くの人々が、この無尽蔵の宝を封印して、臆病、弱気、迷いの波間に漂流していることか。これほど、もったいない人生はない。勇気を『取り出して』、胸中の臆病を打ち破ることだ」

勇気こそ、一切勝利の決定打です。「師子王は百獣を恐れない。師子の子もまた同じである」と仰せのように、大聖人と同じく、何ものにも負けない「師子王の心」が、私たちの中に厳然とあるのです。

では、いかにして「師子王の心」を取り出すか。それは「日蓮が一門は師子の吼るなり」と仰せのように、師弟不二の心で「師子吼」することです。

御義口伝には「吼とは師弟共に唱うる所の音声なり」（748ページ）とも述べられています。弟子が立ち上がり、師とともに妙法を唱え抜く。師の心を胸に、妙法の正義を語り抜く。この不二の戦いに挑み続けるなかでこそ、野干の如き一切の障魔を打ち破ることができるのです。

心に師をもつ人は強い

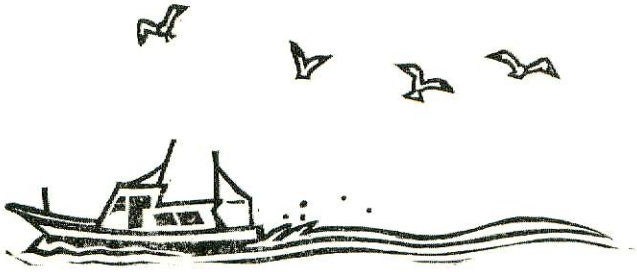
名誉会長は次のように綴っています。

「心に師をもって戦う人は強い。広宣流布に敢然と突き進む師の心をわが心とする時、弟子もまた師の大境涯に連なり、無限の力がわくのだ。師弟の魂の結合に勝る団結はない。そして、団結の力が、新しき歴史を開くのである」

師子吼といっても、特別なことではありません。自分が縁する一人の友と心を開いて「対話」することです。

そうして結び合った友情と信頼のスクラムで、広宣流布の新しい歴史を築き開いていきましょう！

野干　小型の獣で、群れをなして吠える。



まことの時こそ師の言葉を胸に

研修教材

聖人御難事

御書全集……1190ページ9行目～17行目
編年体御書……1209ページ9行目～17行目

どんなに立派な鎧を身につけ、あらゆる兵法を学んでいても、いざという時に、即座に身も心も戦う構えができていなければ、戦に負けてしまいます。

幸福を勝ち取るべき人生という戦いの舞台においても同じです。いざ苦難に直面した時、大きな障魔が競い起こった時に、どういう一念で臨むかで人生の勝負は決まってしまいます。

臆病であれば、負けてしまうし、勇気の信心をもって立ち向かえば、乗り越えていくことができます。

どんな苦難や障害に遭っても、勇気をもって立ち向かうためには何が大切なのか、今回の御文から学んでいきましょう。

正義の人は必ず守られる

本抄は、「熱原の法難」の渦中である弘安2年（1279年）10月1日に執筆されました。熱原の農民信徒20人が罪を捏造され、不当に逮捕されたことで、日蓮大聖人の門下の心に暗雲が立ち込めていたことでしょう。そのような門下に、大聖人は、いかなる脅しや迫害にも恐れることなく、勇気をもって信心をいや増して高めていくように励まされています。

ここで大聖人は、北条時頼や時宗が、大聖人の伊豆流罪や佐渡流罪を赦免したのは、事実無根の中傷によって罰してしまったことに気づいたからだと仰せです。

封建社会における権力者の決定は絶対的なものです。たとえ冤罪であっても、それを覆すことは至難です。にもかかわらず、大聖人は、謀略をすべて打ち破られ、晴れて赦免を勝ち取られました。

強盛な信心に立つ人には、必ず諸天善神の強い守護があります。たとえ「大鬼神がついた」ように絶大な権勢をふるう者であっても、危害を加えることはできないことを、大聖人は身をもって証明されたのです。

大切なのは諸天をも動かす強き心です。仏界の生命を呼び現す真っ直ぐな信心です。嘘は、

故最明寺殿　鎌倉幕府第5代執権・北条時頼のこと。執権を譲り、最明寺で出家したことから、こう呼ばれた。出家後も、幕府の最高権力者であり続けた。文応元年（1260年）、大聖人は国主諫暁のため、時頼あてに「立正安国論」を提出された。その翌弘長元年、伊豆に配流されたが、同3年に赦免された。

此の殿　第8代執権・北条時宗のこと。北条時頼の子で、文永8年（1271年）、大聖人を佐渡流罪に処したが、同11年に赦免した。

梵釈・日月・四天等　法華経や法華経を弘める行者を守護する諸天善神。梵釈とは、大梵天王と帝釈天王のこと。日月は、日天子、月天子のこと。四天は、持国天、増長天、広目天、毘沙門天のこと。

故最明寺殿の日蓮をゆるしと此の殿の許しは禍なかりけるを人のざんげんと知りて許しなり、今はいかに人申すとも聞きほどかずしては人のざんげんは用い給うべからず、設い大鬼神のつける人なりとも日蓮をば梵釈・日月・四天等・天照太神・八幡の守護し給うゆへにばつしがたかるべしと存じ給うべし、月月・日日につより給へ・すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし

故・最明寺殿（北条時頼）が日蓮を（伊豆流罪から）許したのも、今の殿（北条時宗）が（佐渡流罪を）許したのも、罪がない者を人の讒言を用いて処罰してしまった、と気づき許したのである。今後はどのように人が言おうが、事情をよく聞いて了解することなしには、人の讒言を用いられることはないに違いない。

たとえ大鬼神がついた人であっても、日蓮を梵天・帝釈・日天・月天・四天王等、また天照太神・八幡大菩薩が守護されているゆえに、罰することはできないと確信していきなさい。月々日々にいっそう強盛な信心を奮い起こしていきなさい。少しでも油断する心があれば、魔が便乗する機会を得てしまうであろう。どこまでいっても嘘です。真っ直ぐで強盛な信心に勝るものはありません。ゆえに、〝真実は必ず明らかになる〟〝正義の人は必ず勝つ〟との確信で、勇気ある挑戦を続けることが大切です。

「月月・日日につより給へ」

信心は「仏と魔との戦い」です。初めは確信をもって一生成仏への道を歩んでいても、仏道修行の途上で慢心になったり、挑戦の心を失ったりすれば、その隙から魔につけ入れられ、信心が食い破られてしまいます。

油断を排するために、大聖人は、「月月・日日につより給へ・すこしもたゆむ心あらば魔たよりをうべし」と仰せです。

〝先月よりは今月〟〝昨日より今日〟と、日々、よりいっそう強盛な信心を奮い立たせて成長

平等　（平左衛門尉のこと。侍所所司（次官）の職にあり、幕府内で実力を握り、竜の口の法難や佐渡流罪を画した張本人。熱原の法難においても、日蓮門下の弾圧に暗躍した。

城等　秋田城介のこと。秋田城介は役職名で、安達泰盛のことをいう。平左衛門尉と並んで、鎌倉幕府の中で大きな権力を握っていた。

つくし　九州の北部、現在の福岡県を中心とする一帯をいう。蒙古が襲来した時は、この地が防衛線となり、全国から武士や、防塁建設のための人足が派遣された。

灸治　漢方医療の一つであるお灸のこと。もぐさを皮膚の特定の位置に置き、火をつけて燃やし、その熱の刺激で病気を治療する療法。

我等凡夫のつたなさは経論に有る事と遠き事はおそるる心なし、一定として平等も城等もいかりて此の一門をさんざんとなす事も出来せば眼をひさいで観念せよ、当時の人人のつくしへか・さされんずらむ、又ゆく人・又かしこに向える人人を我が身にひきあてよ、当時までは此の一門に此のなげきなし、彼等はげんはかくのごとし殺されば又地獄へゆくべし、我等現には此の大難に値うとも後生は

我々、凡夫の拙さとして、経論に説かれていることと、遠くのことは、恐れる心がない。きっと、平左衛門尉や秋田城介（安達泰盛）などが怒って、わが一門をさんざんに迫害するようなことが起こるだろうから、そのときには眼を塞いで心を定めるがよい。

今の世の人々の（蒙古軍に対する防衛のために）筑紫などへ派遣されようとしている人、またそこに行く者、またそこに向かっている人々のことを、わが身に引きあてて考えてみるがよい。今までは、わが一門には、このような嘆きはなかった。（戦場に向かう）彼らは、現在は、死地に赴く苦しみにあい、また、殺されれば、地獄に堕ちるであろう。我らは、現在は、仏法しようという姿勢や一念が、障魔に打ち勝つうえで大切になってくるのです。

目先にとらわれるな

いざ苦難に直面した時に、臆病になるのか、それを分かつのは、人生の根本目的が分かっているかどうかです。何が最も大切かを知っているかどうかです。

大聖人は「我等凡夫のつたなさは経論に有る事と遠き事はおそるる心なし」と仰せになっています。「経論に有る事」や「遠き事」とは、〝成仏〟や〝後生〟のことであると拝することができます。

人間は目の前に大変なことが起こると、慌ててしまい、その対応にばかりとらわれてしまいます。その中で、より本質的な問題を見過ごしてしまって、小

仏になりなん、設えば灸治のごとし当時はいたけれども後の薬なればいたくていたからず

のためにこのような大難にあったとしても、後生は仏になるのである。譬えれば、お灸のようなものである。その時は痛いけれども、後には薬となるのであるから、痛くても本当は痛くはないのである。

手先の対応をしたことによって、より大きな失敗をしてしまうことが少なくありません。

〝いざ〟という時に、問題の本質を冷静に見極め、根本的な対策を講じていくことが大切です。

そのために大切なことは、一つは先人の知恵に学ぶこと、一つはものの道理をわきまえて普段から用心することです。このことは理屈では分かっていても、なかなか実感できず、疎かにしてしまいがちです。

だからこそ、仏の言葉や師匠の教えに、自分自身の信心や生活を照らし合わせ、本当に大切なことを第一に実践しようと心がけることです。経典に説かれている一生成仏という人生の根本目的をしっかりと見据え、直面する難を乗り越えれば、必ず成仏の境涯を開くことができると確信することです。

大聖人は、当時の権力者である平左衛門尉頼綱や安達泰盛が、大聖人門下を迫害してくることは確実であると予測されています。そして、蒙古襲来を迎え撃つために戦地に向かう人々の心情を、わが身に引き当てて、難に臨む姿勢を教えられています。

戦場に向かう人々は、今世では死の恐怖に苦しめられ、死後も地獄の苦しみを受けることになります。それに対して、大聖人の門下は、今は迫害に遭っているけれども、来世では必ず成仏することは間違いないと仰せです。

必ず成仏できると確信できれば、難による悩みや苦しみは、耐えることができます。それは、お灸の痛みも、体のためになると分かっていれば、耐えられるようなものです。

池田名誉会長は、こうスピーチしています。

「人生、耐え抜いた人に『栄冠』がある。最後は、その人が勝つ。その崩れざる信念を貫き通していくなかに、真実の『信用』も自然に残る」

「あせることはない。人をうらやむ必要もない。自分は自分らしく、仏道修行を貫き通していけばよい」

「まことの時」「いざという時」こそ、御書や師匠の言葉を胸中に抱き、苦難を辛抱強く乗り越え、わが道を真っすぐに進もうではありませんか。

婦人部グループ学習の参考に

御義口伝

御書全集　790ページ7行目
編年体御書　1636ページ7行目

一念に億劫の辛労を尽せば本来無作の三身念念に起るなり所謂南無妙法蓮華経は精進行なり

一念に億劫の辛労を尽くして、自行化他にわたる実践に励んでいくなら、本来わが身に具わっている仏の生命が瞬間瞬間に現れてくる。いわゆる南無妙法蓮華経は精進行である。

「御義口伝」は日蓮大聖人が建治年間（1275～1278年）に、身延で法華経の要文を講義されたものを日興上人が筆録。大聖人の御許可を得て、弘安元年（1278年）に完成したと伝えられる奥義の書です。

今回学ぶ一節は、池田先生が戸田先生の弟子として、不借身命で広宣流布を切り開かれた時に、闘争の「根本の魂」として教えてくださった御文です。

一念を定めた祈りが境涯を開く

今、この瞬間に、「億劫」という長遠な期間に匹敵する無量の辛労を尽くしていく。広宣流布のための深き祈り、全生命をかけた障魔との戦い、悪を打ち破り、善を広げる正義の行動――一念を定めて辛労を尽くした絶え間ない祈りと実践こそ、自身の生命に具わっている尊い仏の境涯を開きゆく直道です。

人生において、絶望の淵にたたき落とされるような悩みに直面したり、耐えがたい厳しい試練の嵐に遭遇したりすることもあるでしょう。その時に、〝今こそ宿命転換のチャンス！〟と捉え、喜び勇んで挑む一念が肝要なのです。

池田先生は、「師弟の大願を掲げて行動する、その一瞬一瞬の生命に、仏と等しい生命が『念念に』溢れてくるのです。『月月・

師弟の大願に立ち
苦難に打ち勝て

日日』に強く励みゆく学会活動こそ、現代の精進行にほかなりません。わが同志の皆様こそ、『本来無作の三身』の大生命を『念念に』躍動させて戦う尊貴な地涌の菩薩です」と指導してくださっています。

岐阜県大垣市の澤井里子さん（圏副婦人部長）のご主人（副圏長）は、平成19年9月、仕事中に倒れ、救急車ですぐに病院へ。くも膜下出血でした。手術をして一命は取り留めたものの、頭に水がたまり、のどには痰が詰まりがちになり、再手術。術後は高熱が続き、厳しい状況が続きました。

澤井さんは、〝これは私の宿命だ。今こそ宿命転換の時だ。宿命を使命に変えてみせる！〟と決意。時間のある限り祈り抜き、学会活動にも全力投球していきました。個人指導を重ね、相手の悩みを聞き、「広宣流布に生きることが、どれほど素晴らしい人生か」と語り、激励に歩きました。

10月31日、思いがけず池田先生から「お題目を送ります」と、心強い伝言が澤井さんのもとに届きました。〝師匠が祈ってくださっている！〟――感謝の心で胸がいっぱいになり、先生の慈愛に身が震えました。

さらに、先生が関西指導から帰られる新幹線の中から、大垣市の上空にかかった虹を撮影されたのです。その写真に、ご主人が入院している病院が写っていると、嬉しい知らせがありました。先生が、「頑張れ！　頑張れ！」と励ましを送ってくださっていると思え、嬉しくて嬉しくて、涙が止まらなかったそうです。

〝先生！　必ず勝ちます〟と誓い、さらに唱題に力が入りました。

その後、ご主人は徐々に回復しましたが、平成21年2月11日、容体が急変。主治医から、「お気の毒ですが、よくもって2月いっぱいです。あとは神仏に祈るのみです」と告げられたのです。こうした状況に、周りの人々もあきらめかけていました。

澤井さんは〝もう一度、命懸けで祈ろう。私には御本尊があるじゃないか！〟と、唱題し抜きました。そんな中、女子部時代に学んだ池田先生の「御義口伝講義」を思い出しました。

「われらの一念は信心の一念であり、この一念があれば、いかなる事をも成就していけるのである。しかも、もったいなくも『無作の三身念念に起る』と説かれているではないか」

〝そうだ、仏の偉大な生命があふれ出るのだ。必ず勝つ！〟と一念を定め、ご主人の手を握ると、強く握り返してきたのです。その時、〝絶対に治る。治してみせる〟と強く確信できました。

それから6カ月、ご主人は、ついに病魔に打ち勝ち、「体は不自由だが、心は健康」と言われるまでに回復。2年ぶりに、わが家に帰ることができました。「よくて植物状態」と言われたご主人が、今、一緒に勤行ができ、「行ってらっしゃい、気をつけて」と声をかけるほど元気になられています。

澤井さんはこれまで、乳がん、ぜんそく、経済苦などを克服。不登校で悩んでいた息子さんは、男子地区リーダー、牙城会メンバーとして活躍。娘さんは、女子部本部長、白蓮グループ班長として頑張っています。娘さんが友好対話した友人は200人を超えました。

澤井さんは、あらゆる苦難を祈りと実践で勝ち越えてきました。「これからも、師弟の大願に立ち、『人材・躍進の年』を戦い抜きます」と、元気いっぱいです。

創立100周年へ、「一念に億劫の辛労を尽くす祈り」で、どんな困難にも喜び勇んで立ち向かい、勝利の人生を切り開いてまいりましょう。

横山和子
岐阜総県総合婦人部長

グループ座談会等の拝読御書として活用してください

〈幸せだから感謝する〉以上に〈感謝するから幸せになる〉

「外には・をそるる様なれども・内には不便げにありし事・何の世にかわすれん、我を生みておはせし父母よりも当時は大事とこそ思いしか、何なる恩をも・はげむべし（一谷入道御書、1329ページ）」

世間的には恐れている様子であられたが、心では（日蓮を）不憫に思う気持ちをもたれていたことは、いつの世にか忘れることがありましょう。私を生んでくださった父母よりも、（佐渡流罪）当時は、大切な人と思ったものです。どのようにしても、この恩には報いていかねばなりません。

忙しく動いているのに、前に進んでいる気がしない。

一生懸命に働いているのに、何だか充実しない――。

月末、年度末、締め切り間際や期日前の最終盤など、職場でこんな経験があるのでは。

では、どうすれば、充実感や達成感をもてるようになるか。そのために心掛けたいことがあります。そのヒントが今回、学ぶ一節にあります。

地域の有力者に

この一節は、流罪された佐渡の地で、お世話になった地域の有力者（一谷入道）の夫人に、日蓮大聖人が送られたお手紙です。

実は、その有力者は熱心な念仏の信者で、大聖人の人柄に打たれて、大聖人を支えていたのですが、念仏の信仰は捨て去ることはできなかったようです。

大聖人は、立場のある相手に配慮されて、地域で問題が起きないよう、夫人宛てで、お手紙を出されたと思われます。

大聖人は、鎌倉に帰るまでの約2年間、その有力者の住む地域で暮らしました。

その間、有力者は、食べ物が不足がちだった大聖人とその門

下のために食料を手配したり、大聖人を訪ねて来て、鎌倉に帰る旅費がなくなってしまった女性信徒に旅費を貸したりと、さまざまな便宜をはかってくれました。しかも、大聖人が命を狙われた時に、救ってくれたのです。

世間の目が気になるような状況のなかであっても、手を差しのべてくれた陰の支援者に対し、大聖人は、「私を生んでくださった父母よりも、当時は、大切な人と思ったものです。どのようにしても、この恩には報いていかねばなりません」と綴られたのです。

有力者も、そして夫人も、大聖人のこまやかな心や敬意を感じたに違いありません。

思い出して話す

かつてお世話になったこと、陰で応援してくれたこと。そのことを忘れない。さらには、今の相手の立場がどうであれ、きちんと、言葉や行動で、かつての支援に対しての感謝を伝える。

それが大事なのです。充実感や達成感をわかせていくのです。

なぜなら——。他人のよさやありがたさをしみじみ感じる時を思い出してみてください。何かを達成した時や、充実した時間を送っている時ではないでしょうか。

だからこそ、かつて相手にしてもらったことや、陰の支援を思い出してみませんか。思い出したら、立場がどうであれ、ちょっと頑張って、言葉にしてみる。感謝を伝えてみる。そうすれば、どんなに忙しくとも、どんどん充実していくはずです。

池田名誉会長は語っています。

「〈幸せだから感謝する〉以上に〈感謝するから幸せになる〉のである」

 ©MITSUSHI OKADA/orion/amanaimages

模範の地域を追って

師弟の勝利城

山形・蔵王支部

誰かではない、自分がやる！
――師匠との誓いを果たすため、地道に、そして粘り強く、
地域広布に立ち上がった同志がいる。青年がいる。
創立100周年へ、新たな共戦譜が、今、ここから始まる！

蔵王の〝山頂駅〟に降り立った。標高1661㍍。氷点下3度。真っ白な濃霧が辺りを包み、巨大な塊の輪郭だけが、うっすらと影を見せた。烈風の中を進んでいくと、高さ数メートルの樹氷が姿を現した。スノーモンスターとも呼ばれる。表面はガチガチで、まさに氷の塊だった。

この極寒の地に、池田名誉会長（当時、会長）は、あえて一歩をしるしたのだった――。

昭和39年2月18日。県下初の宝城・山形会館のオープンを寿ぐかのように、春の陽気となった。

開館式を終えた名誉会長一行は、雪の蔵王へ。蔵王山麓駅から樹氷高原駅、そして山頂駅へと、ロープウエーを乗り継ぎ、降り立った。

山頂は麓の天気とは打って変わって猛吹雪。同行のメンバーは、誰も駅舎から外に出ようとしなかった。その時だった。名誉会長が真っ先に樹氷原へ向かって歩き出したのである。

朝日連峰や月山を越えて吹き付けてくるシベリアの寒波にも動じ

太陽の光を浴びる蔵王の樹氷

ず、じっと堪えて成長していく樹氷。その姿に、旧習深い地域で歯を食いしばって広布に励む、健気な庶民の姿を重ねていたのかもしれない。

名誉会長は、同行の友に語った。

「学会の指導者は、いかなる嵐の中でも、広布の先陣を進まなければいけない」

いかなる障魔の烈風が吹き荒れようとも、一人、矢面に立って戦う名誉会長。

王者のような風格の樹氷を仰いだ。

「人もまた、厳しき環境にも断じて負けない強さを持つことだ。そのための信心なのだ」

風雪が激しければ、激しいほど成長する樹氷。人もまた、厳しい逆風、宿命の嵐と戦うことによって人間革命ができる。

寒さがもっとも厳しい時に山形市を訪れた名誉会長の心を、地元・蔵王支部の友は知り、どこよ

県下初の宝城・山形会館の開館式に出席（昭和39年2月、山形市内）

りも報恩の心を燃やしていった。

開拓者の心でね

当時を知る何人かに、話を伺った。

蔵王の活動者は、数えるほどだった。

「先生がいらっしゃると聞いて、皆で折伏に歩いたんだぁ」

地区担当員（現・地区婦人部長）だった佐藤艶子さん＝山形栄光圏、圏婦人部主事＝は、名誉会長を迎えた時の思い出を語り始めた。

脳性まひの長男をつれて、蔵王の山道を、一軒、また一軒と弘教に歩いた。時にはバカにされ、笑われたこともあった。

「でもあの時は、皆で8世帯の弘教をしたんだぁ」

師匠に勝利の報告をする！――伝統はこの時から始まった。

山口とも江さん＝蔵王支部、支部副婦人部長、大沼キヨエさん＝東山形本部、婦人部副本部長＝姉妹は、温泉郷で唯一の美容院を営んでいた。

「妹は先生が来られると知ってから、必死に祈っていたなぁ」（大沼さん）

名誉会長が蔵王山頂に登った翌朝だった。姉妹は名誉会長が宿泊するホテルの近くに立っていた。

名誉会長が、雪道をゆっくりと歩いて下りてきた。

「車に乗られる時、先生に手招きされて駆け寄ったんだね。先生は『名前をメモしておきなさい』と言われて、窓越しに握手してくださった」（大沼さん）

「その時、『本を贈るからね。蔵王を頼むよ！　開拓者の心でね』と言われたんだぁ」（山口さん）

名誉会長の激励は、麓まで断続的に続いた。バス停のそばにいた池野長兵衛さん一家＝当時、夫妻は班長・班担当員＝を見つけると車を止め、「よろしく頼むよ！」と、励ましの言葉をかけた。

佐藤艶子さん。名誉会長との出会いを刻んだ交差点で

半郷地区の友

南松原地区の友

蔵王地区の友

佐藤艶子さんはその日、麓で友と訪問激励に歩いていた。交差点の信号は赤だった。

「横に車が止まって窓が開いたんです。それに先生が乗っていらっしゃって、『今度ゆっくり来るからね。みんなによろしくね』と、信号が青に変わる瞬間まで激励してくださったんです。まさかお会いできるなんて……」

後日、山口さん、大沼さん姉妹に、それぞれ戸田城聖第2代会長の『巻頭言集』が贈られた。扉には姉妹の名前が認められていた。

「学会の本なんて珍しかったから。宝のように大切にし、皆で回し読みして、先生に託された蔵王の開拓に走ったんだぁ」（山口さん）

この時、出会いを刻んだ同志が、蔵王開拓の先頭を走り、それまでにも増して、弘教が加速したのは言うまでもない。

この不滅の原点を刻んだ2月19日は、後に「蔵王支部の日」となった。

新たな共戦譜が始まる！

「年末になっと、2月19日『支部の日』へ、『なにすんだ。どうやってお応えするんだ』と聞かれるんだ。本当に皆さん、先生が来てくださった厳冬の2月を大事にしてんだねぇー」と佐藤栄三さん＝支部長。

一番、雪の多い1月、2月に、聖教新聞の購読推進に挑戦するのが、伝統になった。

周囲が驚くほどの聖教拡大

金曜日に勤行会。土、日で購読推進に歩き、月曜日の協議会で報告する。これが支部の「常勝のリズム」になっている。

蔵王支部は、蔵王・半郷・南松原の3地区からなる。毎年、周囲が驚くほどの模範の購読推進を成し遂げている。

常に拡大の突破口を開くのは、蔵王の中腹から温泉郷までが活動の舞台の蔵王地区（三瓶公明地区部長、山口きよ子地区婦人部長）。

本年も60人を超える友に購読を広げた山口さん。

「温泉郷のほとんどの旅館には、一度は必ず聖教新聞が入ってんだ。えり好みなんてしてらんね。全部に話をするんだ。昨年、30年近く聖教新聞を読んでもらってきた人に弘教できたんだねぇ」

青葉愛子さん＝婦人部副本部長＝も、いつも拡大の先陣を切っている。長男の槙一郎さんは、半郷地区の男子地区リーダーとして活躍している。

4年前から、稲刈りが終わった11月に行われる蔵王地域の音楽祭には、学会員が司会を務めるなど、支部を挙げて協力してきた。

「今では住民の大きな楽しみの一つとなっています。もう、蔵王には学会と地域との垣根は無くなっているんです」と、押野正子さん＝支部婦人部長。

仲良く楽しみきって

2月27日。この日は地域に友好を広げる日（「蔵王デー」）。各地区で朝の勤行会が行われていた。

午前10時。青木正幸さん宅＝地区幹事＝には、半郷地区の同志が、喜々として集まってきた。息子の浩一さんは、蔵王地区の男子地区リーダーである。

佐藤支部長が、参加者に一言発言を促すと、鈴木かをるさん＝副白ゆり長＝が「今、病と闘っています。皆さんが題目を送ってくれているので、絶対に負けません」と。温かい拍手が鈴木さんを包む。

青木久美子さん＝地区婦人部長＝は「友好拡大の目標を達成する

ことができました」と元気に。

井苅国子さん＝白ゆり長＝が「まだ、対話の目標に届かず、7人の方としか対話できなかった」と語ると、すかさず佐藤支部長が「7人と対話できたなんて、すごいでねえか」と。

共に活躍をたたえ励ます。ここには、麗しい信心の団結がある。

学会の素晴らしさ、信心の偉大さを語っても耳を傾けない人もいる。しかし、どんなことがあっても、その挑戦を認め、勇気を送ってくれる同志がいる。これこそが地域開拓の力になっていた。

仲良きこと――。これは名誉会長が、山形に示し続けてきた勝利の方程式でもあった。

昭和35年11月22日、山形支部結成大会で、「一生涯、仲良く楽しみきっていける山形支部であられんことを心から祈る」と語った。

当時、タテ線組織の寄り合い所帯の支部だった。いまひとつ心が一つになれない。その急所を突いたのだった。

昭和49年9月にも、〝いずこの地よりも仲の良い第2期山形広布の理想郷を〟と語り、「和」の揮毫を認めた。

聖教の山形

〝聖教に強い山形〟。いつから、そう言われるようになったのか。それを探ってみた。

それは、平成16年の暮れのことだった。当時、総県婦人部長だった門脇けい子さん＝総県総合婦人部長＝は、聖教の拡大で師匠にお応えしたいと自らの思いを訴えた。

山形にとって「勝利の報告」は蔵王訪問の時からの伝統である。

各地の友は、「仏法は勝負」と、共に励まし、勇気を奮い起こして、一軒、また一軒と拡大に走った。

「報恩の心で一つになった時、壁が破れ、驚くほどの力が出てきたのです。先生が一貫して山形に

激闘の合間を縫って同志のために揮毫する名誉会長
（昭和49年9月、現・山形中央文化会館）

名誉会長の揮毫「和」
（昭和49年9月）

教えてくださった師を中心とした『和』の大切さを知りました」

全国トップクラスの購読推進を勝ち取った。今では聖教に強い山形になっている。

9年ぶりに山形を訪問。会場を後にするまで握手を交わし、励ましを送り続けた
（昭和58年4月、現・山形平和会館）

親から子 子から孫へ

押野健一さん＝半郷地区、地区部長＝は今、長男の晋一さんとともに、同じ会社で地上デジタル放送の電波の調査を行っている。

妻の正子さん（前出）は支部婦人部長、そして長女の妙子さんが女子部の本部長、次女の成子さんは今春、創価大学を卒業。健一さんの父の時代から、3世代にわたって信心が継承されている模範の創価一家だ。

南松原地区の半田幸子さん＝支部副婦人部長＝は、母子で理容店を営んでいる。

山形で入会し、昭和35年11月の支部結成大会にも参加している。結婚を機に東京・北区へ移ると、いつしか信心からも遠ざかってしまった。

夫が借金を作り蒸発。信心に目覚め、2人の子どもを抱えながらも同志に守られ、借金を完済。実家の山形へ戻った。

「長男は市内で工務店を経営、娘は隣の支部の婦人部長に。何不自由ない境涯になれました。すべて信心のおかげです」

堀川善雄さん＝蔵王地区、地区幹事＝は、当時、違う路線だが、蔵王のロープウエー会社に勤めていた。

「マイナス15、6度になることもあるんです。先生がこんな所にまで来てくださったなんて」と、当時のことを今も鮮明に覚えている。

拡大に先駆する山形栄光圏の友。名誉会長が蔵王山頂に登った2月18日が「圏の日」

わが郷土に「人間の理想郷」を

カギは自信と確信

名誉会長の山形訪問は、通算9回。

昭和53年8月6日、第1次宗門事件のさなか、山形の同志が雄々しく立ち上がった「置賜ふるさと祭典」。名誉会長は狡猾な悪侶に最も苦しめられてきた同志に、自ら作詞・作曲した東北の歌「青葉の誓い」を贈った。

昭和58年4月の第1回県総会では、「桜梅桃李」の原理を通し、民衆一人一人が輝いていくことを教えた。

そして昭和62年7月。名誉会長は山形に指針を贈った。〝美しき自然と人情に恵まれた山形は、「アルカディア（理想郷）」ともいうべき国土である〟と――。

鶴巻茂総県長、菅藤広美総県婦人部長は、名誉会長の山形への思いをこう語る。

「『山形ここにあり』の自信と確信をみなぎらせていきなさいと先生は教えてくださいました。それは山形の同志、一人一人が自信をもったとき、力が発揮できるからです。権力でも財力でもない。必死に生き抜く庶民がもっとも偉大であるという時代をつくることが『人間の理想郷』の実現なのです！」

温かい人

帰り際になって、昭和39年当時、名誉会長が宿泊したホテルの、開業当時からの従業員・志鎌貞夫さんと会った。

「当時、ここまで車で通れるような道が無くってね。5、6人しかいない従業員が総出で、雪を踏み固めて、やっと一人通れるような道を作っていたんだ。あの日は、

玄関脇のボイラー室にいて、すこし扉を開けたら、箱ゾリに乗って来られた先生のお姿を目にしたんだ。顔は優しくて、穏やかで、温かい人だと思った。だからよく覚えてるんだ」

ソリは箱ゾリというもので、2枚の板の上に箱を乗せたような形のものだった。地元の同志が、苦心して作ったものだった。

名誉会長は、友の真心に応えるために乗った。

志鎌さんに、名誉会長が蔵王を訪れた思い出を大切にしていると伝えると、笑顔皺を深くして語った。

「3階に泊まられたんだ。そこからは、朝日連峰が一望できる。泊まられた翌日はよく晴れた。

桜の木もあったんでなえが。池田先生が今も覚えてくれているなんて、ありがたくて、ありがたくて。申し訳ないなぁー」

山口とも江さん㊨と大沼キヨエさん。名誉会長が宿泊したホテルの前で姉妹仲良く

真白き心

2002年2月17日。東京・信濃町の学会本部に、蔵王支部の代表が訪れていた。

それを聞いた名誉会長は、和歌を贈った。

若き日に
雪の蔵王を
皆様と
登りし 思い出
何とさわやか

農村青年のサクランボ農園を訪問。サクランボを一緒に摘み、「山形でも、世界でも、最高に輝く農家に!」と激励（昭和62年7月、山形市内）

雪の国
真白き心で
広宣に
進み 築かむ
蔵王に栄光あれ

草創の同志である、佐藤艶子さんと、山口とも江さんが顔を合わせると、いつも話が弾む。

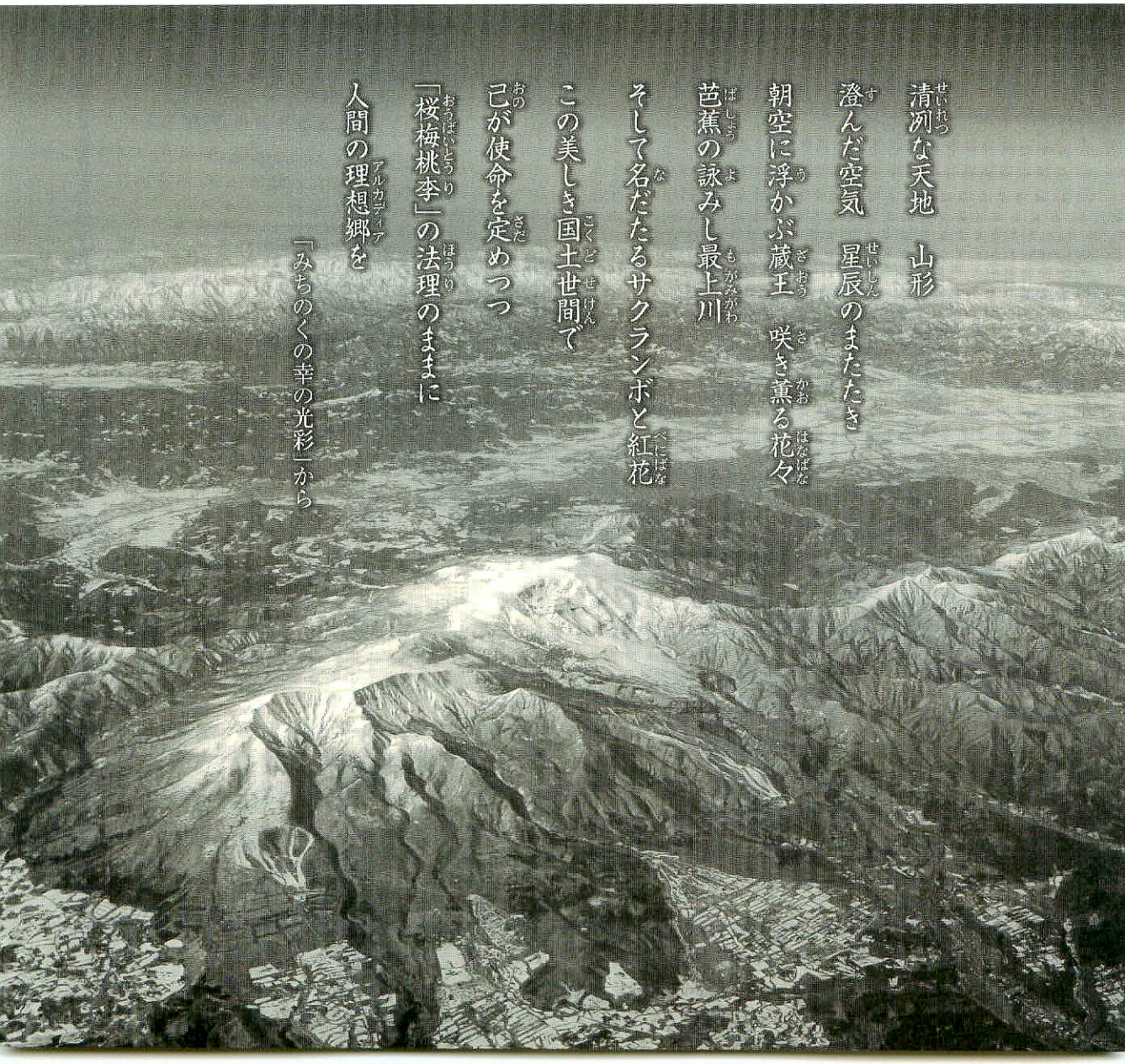
「何があっても、負けないからね」

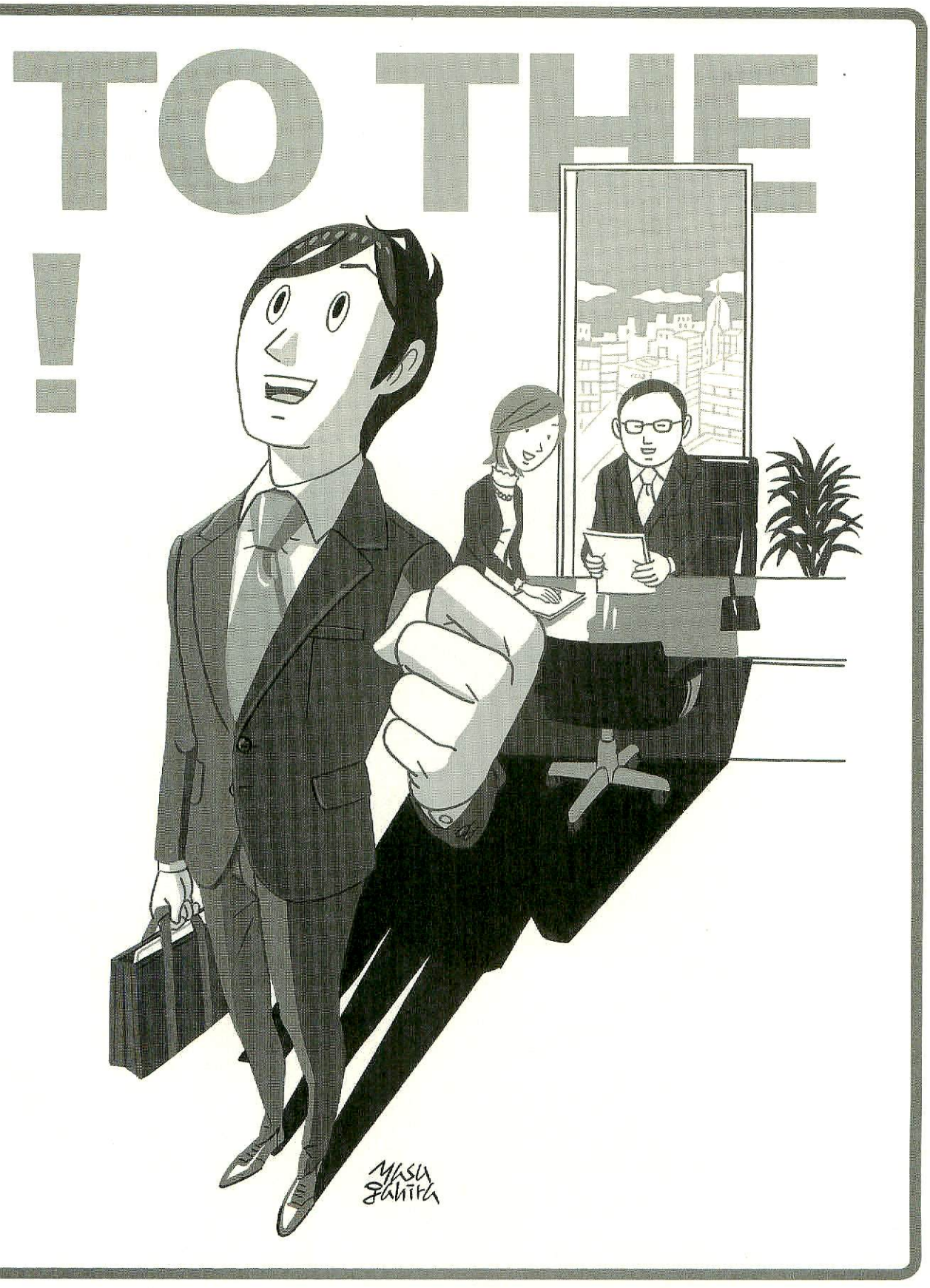
「それが福運なのかねぇ。心こそ財だね。先生が贈ってくれたお歌にある『真白き心』が大事なんだよ。純粋に広布に励むしかねぇなぁ」

「ここまでこれたのも、全て池田先生のおかげだね。感謝せねば。恩返しだよ」

いよいよ山形は、百花繚乱の春を迎える。

新たな常勝の共戦譜が始まっている。




TO THE
!
MASU SAHIRA

シリーズ

POWER PEOPLE

青年は変革力

本当の生きがいを見つける

「本当の生きがい」ってなんだろう。
見せかけの華(はな)やかさや楽しさでは感じられない。
人と比較して、実感できるものでもないだろう。
自分らしく輝(かがや)いている時、周囲から必要とされている時、
何ものにも替(か)え難(がた)い充実感に満たされるはずだ。
自分が信じる道を進もう。目の前の課題に挑(いど)もう。
その中で本当の生きがい、やりがい、働きがいが
見つかるはずだ。

語る――野田正彰(のだまさあき) 関西学院大学教授
挑む――私のチャレンジ・ノート
学ぶ――池田名誉会長の言葉から

語る

野田正彰さん
関西学院大学教授
精神科医

生きがいを創造するために

厳しい雇用情勢の中、就職しても、仕事に生きがいを見いだせず仕事を辞める若者が少なくない。真の生きがいとは何か。若者の精神風土を見つめてきた野田正彰教授にそのヒントを伺った。

――野田さんは精神科医として、さまざまな時代の若者の心を鋭い視点から分析してこられました。今の時代、若者は、生きがいについて、どう感じているように思われますか。

野田　昔は、生きがいというものを深く考えずに済んだ時代といえます。戦前は、国家に尽くすことが生きがいでした。戦後の高度経済成長時代は、自分が勤める会社が発展することが生きがいだったのです。

それが、時代を経るにしたがって、生きがいは、集団から個人に力点が置かれるものへと変化していきました。生きているという実感や充実感というものです。

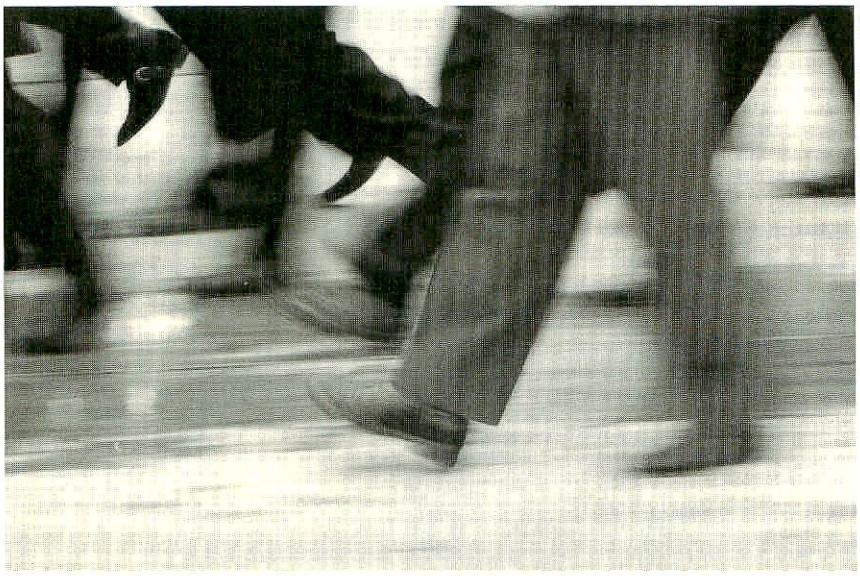
終身雇用制度が崩れつつある現代は、黙っていても企業社会から生きがいを受け取れる時代ではなくなりました。人々は生きている実感や充実感を自ら求める時代になったのです。

――大きな時代の変化にあって、今の若者は、どのように生きがいを求めていると思われますか。

野田　他の世代と比べて、生き方が上手で、無理をしない、という印象を受けます。上滑りした野心もなく、人間関係の摩擦を少なくして、そつなく付き合っています。自分が置かれた環境や能力に見合った生き方を探るという姿勢を感じます。

――仕事に生きがいを求めるものの、途中で辞めてしまう若者も多い、と言われていますが。

野田　若者を使い捨てるような労働環境にしている使用者側の問題が大きいと思います。疎外労働を強いられて、精神がクタ



一息つく暇もなく、仕事に駆り立てられ、精神を消耗する孤独な若者は少なくない

クタになり、働きがいを感じなくなる若者は少なくありません。

特に、多くの若者の雇用先となっている流通・サービス業で深刻な問題です。四六時中、意味のないマニュアル通りの作業をさせられたりしています。8時間労働中、1分1秒でも休ませたら損、というような管理です。ホッと一息を入れる間もありません。これでは精神が消耗してしまいます。過剰覚醒の状況に陥り、睡眠をとれなくなってしまうこともあるのです。

精神を消耗しないために

――精神を消耗させてしまう現代の過酷な労働環境にあって、若者はどのように生きがいを見いだしていけるのでしょうか。

野田　それには二つのポイントが挙げられます。まず一つは、良い友人を持つことです。自分の生き様や、関心があることについて、共に語り、喜び合い、批判してくれる友人です。そうした友人は、クタクタになった心を元気づけ、生きるうえで大きな支えになります。

若者で、人間関係の摩擦を避けようとするあまり、こうした生き生きとした人付き合いまでも軽視する人がいますが、それは大きな間違いなのです。

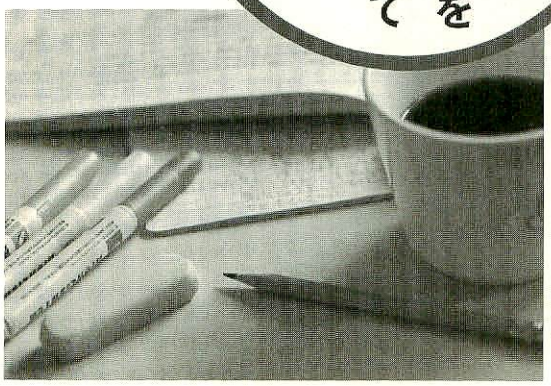
――もう一つは何ですか。

野田　自分の関心領域に着目し、その関心領域を追求していくことです。

私は、卒業する学生によくこう言っています。「社会に出て5年から10年は、仕事や社会の仕組みを知るうえで大切なステップだ。ある程度は我慢して仕事をしなければいけない。でも、いつも自分の関心領域というものを温め、自分を磨いておきなさい。そうしないと、仕事の多忙さに流されて、自分を見失い、

Q 自分は何をやりたいか分からない

A これまでの人生で関心を持ったことをすべて書き出してみる



情報に踊らされないように、自己理解を深める機会も大切

身も心もスカスカになってしまうよ」と。

――「自分にはやりたいことがない」「特に興味があることはない」と言う人も少なくありません。そういう人は、どうすれば、自分の関心領域を知ることができるでしょうか。

野田　日本では、良い学校、良い会社に入ることそれ自体が自己目的化しています。そのため、自分が何に関心があるのかを、あまり深く問わずにいる人も多いのでしょう。

自分が何に関心があるのか分からないという若者に、私は次のような作業を勧めています。

物心ついた時から、これまで生きてきた間に、成りたいと思ったことや、やりたかったことを、洗いざらい、すべて書き出すのです。人に見せる必要はありません。カーレーサーのように、突飛なものでも構いません。その20、30と書き出したものをじっと眺め、自分の関心とは何だろうか、と考えてみるのです。

例えば、自分は物が動くメカニズムに関心があるとか、人から注目されるのが好きだとか、そういう自分の関心領域が見えてきたら、自分が今、置かれた学校や職場という環境と、その関心領域とを、どう折り合いをつけていくのかを考えるのです。

本当に関心があるものは何か

――この作業には、どういう狙いがあるのでしょうか。

野田　私たちは、マスコミなどから、さまざまな情報を植えつけられ、本来の自分は関心がないにもかかわらず、情報に踊らされてしまうことが少なくありません。多くの関心事を列挙することで、そうした思いつきや受け売りの部分を除外し、本来の自分が持っている関心領域に

人々が関心を寄せてくれるからこそ、人は「生きがい」を感じ、人生の道を疾走することができる

生きがい ＝ **他人から寄せられる関心** × **それに応えているという自負**

生きがいは、自分と他人との双方向のコミュニケーションから生まれる

着目することができるのです。きちんとした自己理解が深まれば、どうすれば自分を社会で生かすことができるのかを考える助けとなるはずです。

私は、定年退職を迎え、第二の人生を歩もうとされる方にも、この作業を勧めています。退職後、受け売りの情報から、思いつきで海外に移住し、失敗する人もけっこういるのです。

――自分が関心を持ったことから生きがいを見いだすうえで、大切なことは何でしょうか。

野田　現代は生きがいを自ら創り出さなければいけませんが、生きがいとは、ひとりでに湧き上がってくるものではありません。

人は時には、愛する人の靴の音に対してですら、生きがいを感じることがあります。こういった場合、相手が自分に寄せる深い関心の中から生きがいをくみ上げているのです。そういう意味からいえば、生きがいとは、あえて定式化すれば、次のようにとらえることができます。

「生きがい」＝「他人から寄せられる関心」×「それに応えているという自負」

まず、他人から寄せられる関心があります。次に、その関心に応えている自負が生じるのです。そして、この二つが掛け合わされて、生きがいが生まれてくるのです。

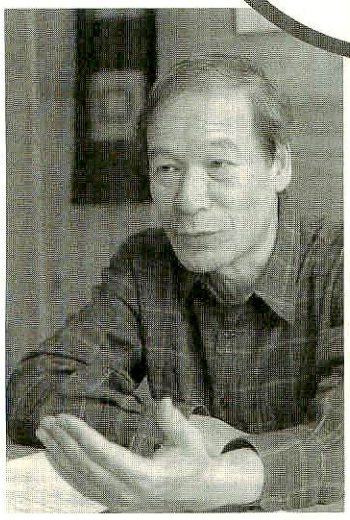
ゼロにいくら多くの数を掛けようが、ゼロになってしまいます。同じように、他人からの関心がなければ、生きがいを保つことは難しいのです。

――なるほど。他人からの関心があって、初めて真の生きがいは成り立つものなのですね。

野田　視点を逆にすれば、自分から人に生きがいを与えていくことも可能だといえます。

Q やりたいことができず、生きがいが見えてこない

A 生きがいは、人々から寄せられる関心から生まれてくる。まず、自らが人々に関心を持つことです



多数の著書で、若者の精神について深い洞察を示し、『生きがいシェアリング』（中公新書）では新しい生きがい論を展開する野田教授

私が身近な人の生き方や、興味、得意とするものに関心を示せば、相手もそれに励まされて、生きがいを感じます。多くの人々の生き方や存在に関心を持てば、多くの生きがいが創られます。私からある人に向けられた関心が、その人の生きがいにつながるのを見れば、私は深い喜びを覚えます。それと同時に、周囲の人々は、私の中にさまざまな関心を見いだし、私の自負心をかきたててくれるでしょう。

「生きがいシェアリング」

――自分が生きがいを創りだすためには、人々から自分はどういう関心をもたれているのかを知るとともに、自らが周りの多くの人々に対して、関心を示すことが大切になってくるということなのですね。

野田　「ミュージシャンになりたかったけど、仕方なく嫌々ながら別な道に進んだ」といったように、自分が好きなことや興味があること以外には、なかなか関心が向かず、自分の世界に閉じこもってしまう人もいるかもしれません。でも、それでは、生きがいの可能性は広がってはいかないのです。

自分と同じものに関心をもつ人たちや、身近な知り合いなどを通して、さまざまな人々に関心を寄せることで、自らの新たな生きがいを見いだすきっかけとすることができるはずです。

――野田さんは、生きがいは、富や地位とは異なり、無限に創りだすことができると主張されていますね。

野田　ええ。多くの人々に関心を持てば、多くの生きがいが創られます。生きがいとは、お互いが互いに関心を寄せる限り、絶え間なく分配することが可能

他人に関心を寄せることは、相手の生きがいだけでなく、自分の生きがいをも生み出していく

なわけです。

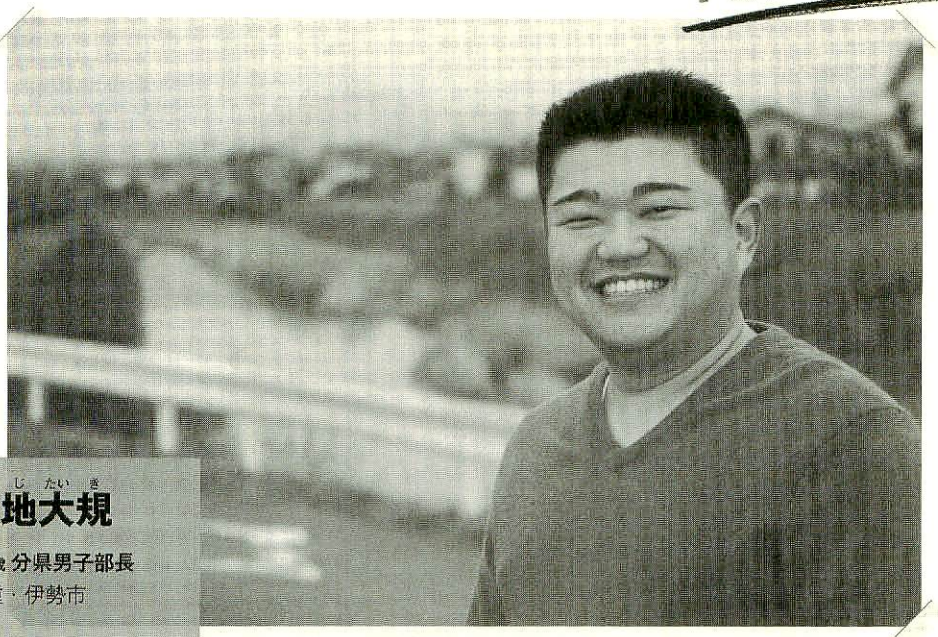
かつて、まじめに働けば、その分だけ必ず報われるという、「勤勉」が生きがいになった時代がありました。しかしながら、勤勉によって物が豊かになり、充実した生活を送るという構図では、少数者が、財産だけでなく、生きがいまでも独占してしまう傾向があります。

その点、私たちは、周囲の人々の生き方に関心をもつことで、無限の生きがいを人々に分配することができます。しかも、関心という関わりから分配された生きがいは、モノや財産のように、一度満ち足りてしまって価値が落ちるようなものではありません。常に新鮮に受け取られるものなのです。

――人々からの関心といっても、マス（大衆）から寄せられる関心もあれば、人間関係のある人からの関心もありますが。

野田　無名の多数から寄せられる関心は、受け手にとって真の関心にはならないと思います。そこから創られる生きがいは、華やかにみえて空虚です。本当の関心とは、少しでも知り合っている人間関係から向けられる関心なのです。よく知っている人や身近な人から、「あなたは、こんな生き方をしていたのか。こんな才能があったのか」と関心を寄せられた時、真実の生きがいを感じ取るのです。

私たちは、勤勉によって生きがいを所有し、「独占」しようとした時代から、多くの人々への関心を広げることで、「生きがいシェアリング」の時代に向かっていかなければならないと思います。



浜地大規
31歳 分県男子部長
三重・伊勢市
食品店店員

挑む——私のチャレンジ・ノート1

大好きだった父と、優しかった母を、交通事故でいっぺんに失ったのは、自分が5歳の時だ。すぐ、岡山から、ばあちゃんが駆けつけてくれ、途方に暮れる俺を抱きしめてくれた。

三重県の旧習深い漁師町のことである。周りから、「学会なんか、やってるから、あんな目に遭うんや」と、心ない言葉を投げつけられた。悔しかった。

「一緒に遊んだらあかん」

1年が過ぎ、年の離れた姉が就職したことをきっかけに、姉と兄は町に残り、末っ子だった自分は、ばあちゃんとともに、叔母のいる大阪で、アパート暮らしをすることになった。

小学校では、父も母もいないつらさを身にしみて感じた。

一番、悲しかったのは、友達に、「うちの母ちゃんが、〝浜地君には親もいてへんし、一緒に遊んだらあかん！〟って、言うてた」と言われたことだ。

やり場のない憤りに、体が震えた。中学生になると、ケンカに明け暮れた。バイクで、爆音を鳴らしながら、夜の街を暴走した。どんどん非行がエスカレートする俺に、何も言わず、じっと見守り続けてくれている人がいた。ばあちゃんだ。

夜になると、アパートを出て、バイクにまたがった。ふと部屋を見ると、真っ暗だった部屋に仏壇の明かりが、ともった。

明け方、帰ってきて、家の鍵をあけようとすると、仏壇の明かりが消えた。寝たふりをしているんだろう。ばあちゃんは、夜通し、祈ってくれていた。ば

あちゃんのことを思うと、心の中は涙でいっぱいになった。

中学3年生になってすぐ、教員に言われた。「卒業証書なら、あげるから、もう学校にこないでくれ」。そのまま学校を飛び出し、明け方まで、暴れた。

アパートに帰ると、いつものように、仏壇の明かりが、消えた。熱いものが込み上げた。〝もうこんなことはやめよう。ばあちゃんを楽にさせるために、働こう〟。そう決意した。

「君の力が、ほしいんだ」

カツオの一本釣りの漁師になるため、15歳の時、一人で故郷に帰った。「ずっと、祈ってるからね……」。ばあちゃんは、そう言いながら、御本尊を持たせ、送り出してくれた。

働き始めて、3度目の航海の時、太平洋沖で大しけに遭った。数〝〟もある高波が船を直撃し、

一生かけて恩返しをする それが自分の進むべき道

浜地さんの「ばあちゃん」、西岡サヨ子さん。錦宝会として、元気に学会活動に励む

俺の体は海に放り出された。

「死」を直感した。だが、再び波で甲板に戻され、九死に一生を得た。瞬間、ばあちゃんが祈ってくれていたおかげだと、確信した。しかし腰を強打し、漁師の仕事ができなくなり、〝陸〟にあがった。

失意に沈んでいた時、男子部の先輩が訪ねてきた。投げやりな態度で接していたのに、先輩は、話を真剣に聞いてくれた。

「浜地君はいいもの、もってるなぁ。どうや、男子部として、一緒に頑張らないか。君の力がほしいんだ」。年齢が20歳も上の先輩が、自分のことを、一人の大人として、接してくれた。そのことが、無性にうれしかった。〝この人と頑張ってみよう〟。そう直感的に感じた。

以後、男子部の活動に、新しい仕事にと、全力投球の日々を送った。先輩に誘われ、創価班大学校にも入り、唱題に、折伏に挑戦していった。

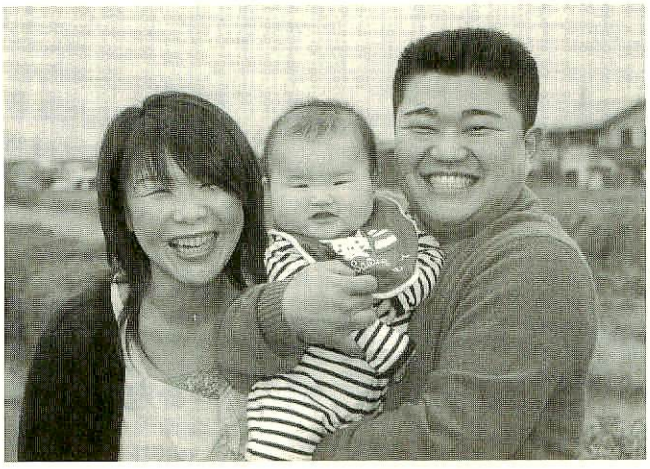
「今まで、ありがとう」

最初の折伏の時だった。人生、どう生きるかに、深く悩んでいた友達がいた。思い切って、学会の話をすると、「僕もやる」と言ってくれた。

しかし、難題が一つ。彼の両親は、学会嫌いだったのだ。両親に入会を認めてもらえるよう、2人で、来る日も、来る日も真剣に題目を唱えた。

そして、2人して彼の自宅へ。両親を前にすると、最初は「帰れ」の一点張りだった。しかし、一生懸命、粘り強く、思いを語ると、「よし、そこまで言うなら、息子のことは君に任せる」と、入会を認めてくれた。

思わぬ展開に、帰り際、彼は、「今まで……ありがとう」と、手を握って、感謝の言葉を伝えてくれた。目に涙を浮かべた彼の顔は、喜びに輝いていた。



笑顔輝く浜地さん一家（左から妻・潤子さん＝副白ゆり長、長男・勝利くん）

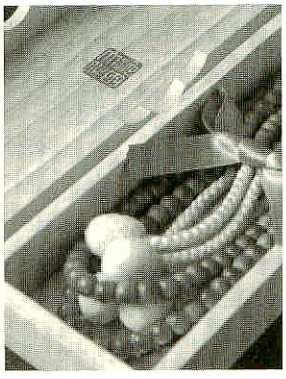
〝人を恨み、世間を恨み、さんざん人を傷つけてばかりいたこの俺が、こんなにも人に喜んでもらっている〟。今まで感じたことのない喜びが、心の中に広がっていくのを実感した。

ばあちゃんに、創価班大学校に入ったこと、折伏できたことを伝えると、受話器の向こうで、「そうかぁ…」といったきり、声を詰まらせていた。

お金を稼いで仕送りすることが、一番の恩返しと思っていたけど、そんなことは、ちっぽけなことだと、この時、知った。

俺も男だ。こうと決めたら、一直線。以来、学会一筋に生きてきた。これまで18世帯の折伏を実らせ、全力で戦ってきた。

どんな所にも、自分と同じように、悩みを抱え、苦しんでいる若者は、たくさんいた。しかし、どんな深刻な苦悩に直面していても、皆で祈り、支えていけば、最後は皆、〝最高の笑顔〟を見せてくれた。



1997年、三重研修道場を訪れていた池田名誉会長から贈られた「念珠」。浜地さんの宝物だ

〝彼らのためなら、自分はどんな苦労も厭わない。彼らが笑顔を取り戻すまで、共に祈り、共に戦うだけだ！〟。それが、自らが決めた道だ。ばあちゃんが、あの先輩が、身をもって教えてくれた、最高に誇り高き、恩返しの道だ。

〝人〟なんて、信用できない〟。そんなふうに思うようになったのは、高校時代のことだ。

友達と遊ぶ約束をしていたのに、どんなに待っても待ち合わせ場所に来なかったり、その後も謝りもしないといった、軽い裏切りが何度もあったからだ。

どうして平然と、そんなことができるんだろう、と不思議でならなかった。人間なんて、心の奥で何を考えているか、分かったものじゃないと思うようになった。

不安と焦りに苛まれる

はっきりとした将来の目標も見いだせないまま、大学を受験した。受かったのは、滑り止めの大学だった。

大学には半年ほどで行かなくなり、1年で中退。好きな音楽でもやろうと、音楽の専門学校に行ったけれど、うまくなじめず、半年でやめてしまった。

そのころから、何もかもがつまらなくなり、家にこもるようになった。テレビを見て、ゲームをやって、あり余る時間をつぶした。

生活のリズムは昼夜、逆転してしまった。ほとんど人と接しなくなったからか、それとも人を信用できないと思っていたからか、時たま、外出すると、人の視線を〝怖い〟と感じるようになった。

親の勧めで心療内科を受診した。カウンセリングを受け、抗うつ剤も処方してもらったけれど、効果はなかった。

家にいても、言い知れぬ不安

青柳英俊

29歳 男子地区副リーダー
埼玉・越谷市

挑む ――私のチャレンジ・ノート 2

POWER TO THE PEOPLE! 青年は変革力

と焦りに苛まれた。〝僕は何をすればいいんだろう？〟〝この先、どうなってしまうんだろう？〟と。

そんな時は、寝るようにした。眠っている間は何も考えなくてすむからだ。でも目を覚ますと、重苦しい現実に、舞い戻った。

引きこもるようになって3年——。〝誰か、殺してくれないだろうか〟と、考えるようになった。

どうして、そこまでして？

男子部の人たちが、家に訪ねてきたのは、そんな時だった。母が取り次いでくれたが、返事すらしなかった。友達と会うことすら怖いのに、どうして知らない人と……。それでも2回、3回と、彼らは訪ねてきた。いずれも、無視した。

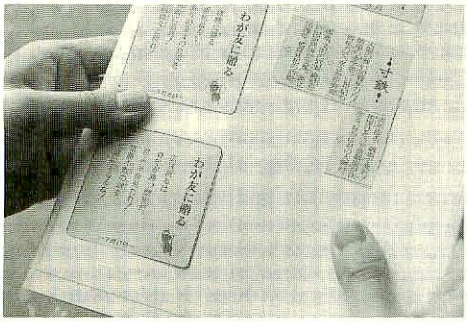
4回目。もういい加減にしてほしいと思い、しぶしぶ、顔を出した。ふと見ると、その中の一人が松葉杖をついていた。

「アキレス腱、切っちゃったんだよね」と、彼は笑っていた。どうしてそこまでして来るんだろうと、驚きだった。

数日後。また、訪ねてきた。あまりのしつこさに、〝一回、会合に出れば、もう来なくなるだろう〟と思い、彼らと一緒に、小さな会合に参加した。

学会員が教えてくれた、人生で最も大切なもの

「わが友に贈る」や「寸鉄」は切り抜いて、自身の成長の糧に



会合の内容は覚えてないけれど、そこにいた一人の先輩の笑顔が印象に残った。命から溢れるような笑顔を、僕は今まで見たことがなかった。〝どうしたら、この人のように、僕も笑えるようになるんだろう？〟

先輩が題目をあげるように勧めてくれた。少年部の時以来、久しぶりに御本尊の前に座った。清々しい、前向きな力が湧きあがってくるのがわかった。題目の味をしめた僕は、自分の意志で祈るようになった。

次第に、先輩と一緒なら外に出るのが平気になった。

先輩は、僕を車に乗せ、あちこちの会合に連れていってくれ、その帰りに、よくファミレスで食事をした。なんとかして僕を元気づけようとしている先輩の気持ちが、痛いほど、感じられた。

閉ざしていた心の扉が開く

座談会に行った時だった。「最近、大活躍の青柳君です」。先輩はそんなふうに僕を紹介した。すると、たくさんの婦人部が、「そうなんだってねー」と、

手を叩いて喜んでくれた。あふれる笑顔、笑顔……。涙がこぼれそうになった。

うれしかった。学会には、こんなにも人のことを思ってくれる人がいるんだと、胸が熱くなった。人や社会に対し、ずっと閉ざしていた心の扉が、すーっと開いた。

〝この信心によって、この人たちと活動することによって、僕は変われる〟

「素晴らしい仲間がいたからこそ、今の僕があります」と青柳さん（右端）。男子部メンバーと笑顔の語らい

そう思った僕は、先輩の勧めで牙城会大学校に入ることにした。

先輩の話を聞くなか、〝男として、生活費を払えるようになりたい〟との思いが湧き起こった。

思い切って、本屋のアルバイトの面接を受けてみた。採用となった。最初は仕事が覚えられず、怒られてばかり。

しかし、〝もう、あのころの自分に戻りたくない〟と、従業員全員の名前をご祈念帳に書き、祈っていった。すると、気持ちが落ち着き、仕事も人間関係もスムーズになっていった。

その後、眼鏡店の正社員となった。あんなに人の目が怖かったのに、たくさんのお客さまと接することができるようになった。アルバイトの時も正社員の時も、無欠勤を貫いた。今は、もっと、いい条件の会社に就職しようと、頑張っている。

〝この先、僕はどこまで変われるんだろう〟。そう思うだけで、僕の心は、青空のように、澄みわたる。僕が変われば、きっと、みんな、喜んでくれると思うからだ。

みんなの笑顔のために、頑張る！　努力する！　それが生きがいとなった。人生にとって、大切なことを、僕は学会の人たちから学んだ。

修了証書

青柳英俊殿

貴会ある牙城会新世紀大学校
第6期生の課程を修了した
ことを証します

2007年11月3日

創価学会青年部

牙城会大学校の修了証書。男子部人材グループの一員として、“人のために”との学会精神を心に刻んだ

学ぶ——池田名誉会長の言葉から

14
PROVERB

使命をつかんだ人は勝利者

どんなに苦労しても、どんなに遠回りしても、自分の使命をつかんだ人は幸福です。勝利者です。最後の最後に、自分は勝ったと言える人生を、飾ればよいのです。そのための信仰です。

「生命は使ひ方を知れば、永い」（樋口勝彦訳）——古代ローマの哲人セネカの慧眼です。

一度きりの人生。歳月は、あっという間に過ぎ去ります。その中で、使命の道、すなわち、命を使って成し遂げる道を決めることが重要です。そうすれば、同じ人生でも、何倍も生きたような輝きに満ちあふれることでしょう。

仕事や課題に追われて大変！そう悩んでいる人が多いのではないでしょうか。

では、ちょっと視点を変えてみましょう。仕事は、会社から与えられた「義務」ではなく、自分を鍛え、成長させてくれる「権利」なのだと。

少しずつ、やりがいや充実を感じることができれば、そのうち、「大変」が、「大きく変われる」に変換されるはず。

ミラノの街でハーモニーを奏でる“大芸術家”たちを讃えて（1992年、イタリア）

15 PROVERB

幸福の第一条件は「充実」

幸福の第一条件は「充実」であろう。
「本当に張りがある」「やりがいがある」「充実がある」
――毎日が、そう感じられる人は、幸福である。
多忙であっても「充実」がある人のほうが、
暇でむなしさを感じている人より、幸福である。

「兆し」というのは不思議です。心次第で、逃げる言い訳にもなれば、挑むきっかけにもなるのですから。どちらにするかは、周りの人や環境ではなく、結局、自分自身です。

自らの限界に挑戦する人に、愚痴や不平、不満はありません。そこには、人格の錬磨があり、成長の実感があり、達成の喜びがあるのです。

16 PROVERB

自分に挑戦し 心を耕せ

本来、人間は自分に挑戦しているときは、伸び続ける。
他人と比較し始めると、成長は止まる場合がある。
何か一つでも、自分が打ちこめることをもっていくならば、
たとえば、それが仕事であれ、ボランティア活動であれ、
何らかの習い事であれ、それはおのずから自分の
心の大地を耕し、育てることになる。

17
PROVERB

なすべき仕事に全力を

チャンスは、寝て待っていれば向こうからくるのでは絶対にない。
自分のなすべき仕事を、それがどんなに
つまらないことのようであっても、
真剣に誠意を尽くして、やりきっていくときに、
最高のチャンスをつかむことが
できるのではないだろうか。

やりたい仕事をやることができれば、毎日は楽しいでしょう。しかし、現実は、なかなかそうはいきません。「何で私がこんな仕事を……」と、ふて腐れ、投げやりになってしまうこともあるのでは？

飛躍のチャンスは、どこか遠くにあるものではありません。目の前の課題に全力を尽くしていくことが、新たな可能性の扉を開く鍵となるのです。

共に来賓を歓迎した
青年部の代表を激励
（2000年、東京）

海外メンバーと列車で和歌山へ。
車中でも対話の花が（1984年）

18
PROVERB

「人のため」こそ価値の人生

人のため、社会のため、自分のために、何かを為す。
何かを創る。何か貢献する。そのために、生ある限り、
一生涯、挑戦しぬいていく。
それでこそ「充実の人生」である。「価値の人生」である。
人間らしい「高次元の生き方」である。

ブラジルの蝶の羽ばたきが、テキサスに竜巻を起こす――小さな出来事が、巡り巡って、他に大きな影響を与える現象を例えた「バタフライ効果」です。

社会は、人と人とのつながりで成り立っています。あなたの目の前の〝小さな〟仕事は、必ず誰かの役に立っているはず。

「何かに貢献している」という自覚は喜びとなり、心を大きくするのです。

征け！フレッシュマン

―新社会人へのアドバイス―

羽賀文湖
創価大学
キャリアセンター
キャリアアドバイザー

プロの条件とは

人生の新たなステージに立つフレッシュマンの皆さん、晴れの出発、おめでとうございます。

これから皆さんは、その道の「プロ」として働くことになります。プロとは、自らの仕事で企業や社会に利益をもたらし、その貢献に対して報酬をもらう人のことです。簡単にいえば、「お金をもらって仕事をする人」のことです。すなわち、社会人とは、即、プロと言えるでしょう。

真新しいスーツに身を包み、社会の荒海へ船出するフレッシュマン。期待や不安が交錯する新生活では、理想と現実のギャップに、戸惑うこともあるでしょう。そこで、今月号では、創価大学キャリアセンターでキャリアアドバイザーを務める羽賀文湖さんから、新社会人へのアドバイスをいただきました。

こういうと、いきなりプレッシャーを感じる人もいるかと思います。しかし、プロであることの条件は、別段、難しいものではありません。

あえて三つ、その条件を挙げてみましょう。

まずは「約束を守る」こと。これは、創価大学創立者の池田先生も強調されている要素です。納期や締め切りを守る。お客さまや上司、同僚との約束を守ることが重要です。

次に「報告・連絡・相談を励行する」ことです。大半の業務は、チームで進めていきます。自分が任された仕事の進捗状況を上司や同僚に伝えておけば、新たな発想が生まれたり、事故を未然に防いだりできます。特に、不安な事案は、なるべく早く相談するといいでしょう。

そして「自分で考える」ことが重要です。指示を待ち、命令をこなすだけの受け身な態度では不十分です。どうしたら効率よく業務に取り組めるのか。何をすれば商品の質が上がるのか。自らの頭で考え、周りと相談しながら、良いものを提供できるよう、尽力していくことが重要なのです。

以上のように、プロの条件といっても、誰にでもできる当たり前のことです。この「当たり前」が、なかなかできない。周りの上司や先輩で、仕事ができる人をじっくり観察すれば、この三つを当然のように履行していることが分かるはずです。

有意義な新生活のために

社会人生活を有意義にすごすため、具体的にどのような実践を心掛ければいいか、アドバイスしたいと思います。

❶メモの習慣をつける

仕事には、正確さが求められ

戸田第2代会長が経営する出版社で、少年雑誌の編集長を務めていたころの池田名誉会長

池田名誉会長の指導

戸田先生の経営する出版社に入社して五カ月後の、一九四九年（昭和二十四年）六月三日の日記に、私はこう記した。当時、二十一歳である。

「毎日、忙しい。だが自分に、与えられた課題に、真正面から取り組むことだ。なれば、意義ある仕事になる。苦しくとも、実に楽しい。先生の会社を、日本一の会社にしたい。日本一の雑誌を作り上げねばならぬ」

いかなる立場であれ、ひとたび入社したからには、その会社を自分が担いゆこうとの気概をもつことから、仕事の第一歩は始まると私は思う。

何事も、受け身では喜びはない。「能動」の心で、主体者の自覚をもつところに、労働の喜びも意欲も生まれる。

©AID/amanaimages

実践してみよう

❶メモの習慣をつける
❷ミスの要因を探る
❸社会人タイムに慣れる
❹先輩の「いいとこ取り」をする
❺強引にでも朝型にする
❻主体者意識をもつ
❼具体的目標を立てる
❽自己投資を惜しまない
❾身だしなみに気を使う
❿リフレッシュを予定に入れる

ます。自分の耳に入ってくるさまざまな情報を整理し、迅速に手を打てるよう、メモ帳や大きめの付せんを常に携帯しましょう。

❷ミスの要因を探る

失敗した時、すぐに切り替えることは大事です。しかし、社会で大切なのは、「同じミスを2度しない」こと。ミスの要因まで掘り下げて考え、次の成功に生かしましょう。

❸社会人タイムに慣れる

1年目は、生活スタイルの変化もあり、思い通りに時間運びができないと思います。上手にタイム・マネジメントをして、社会人の時間の感覚を体に入れていきましょう。

会話中に、サッとメモをとる。〝できる〟社会人の第一歩

「皆さんの勝利を信じています」――創価大学、創価女子短期大学の卒業生にエールを（東京）

❹先輩の「いいとこ取り」をする

皆さんのイメージ通りの「理想の先輩」に出会う可能性は高くありません（笑い）。しかし、すべての先輩に、必ず一つは「強み」があります。その「いいとこ取り」をして、自らに取り入れましょう。

❺強引にでも朝型にする

挑む姿勢の時は、難題でも解決できるもの。ですから、1日のスタートが何より大切です。「朝が苦手」という人もいますが、強引にでも朝型にすることをお勧めします。

❻主体者意識をもつ

部署や会社を発展させようとの主体者意識をもてば、仕事への姿勢が変わります。また、〝私が責任者なら〟と全体観に立てば、自身の仕事を客観的に見つめることもできます。

❼具体的目標を立てる

学習目標や業務目標を立てれば、情熱が持続し、確かな実力もつきます。どんな小さなことでも構いません。具体的な目標を持ちましょう。

❽自己投資を惜しまない

資格の勉強や習い事、読書など、自己成長のための時間を惜しまず使い、自らの仕事力をあげていきましょう。

❾身だしなみに気を使う

第一印象の悪さゆえに、自分の誠意が伝わらないこともあります。職場のルールを守りながら、服装や髪型を清潔にしましょう。何より、さわやかであることが大切です。

❿リフレッシュを予定に入れる

ストレスがたまると、睡眠障害が生じます。心身が休まらず、仕事に支障をきたし、さらに心身を圧迫します。リフレッシュの時間を自分の予定に入れ、良質な睡眠をとれるようにしましょう。長めの入浴は、心身とも

池田名誉会長の指導

職場の先輩には、さまざまな人がいた。懸命に働く人もいれば、与えられた仕事だけを適当にこなす人や、手抜きをして、要領よく振る舞う人もいた。

いいかげんな先輩に歩調を合わせ、浅きに流れ、自分をだめにしていく青年もいる。志なく、哲学なきゆえである。

環境に支配されるのか、自分が環境を支配していくのか――そこに人間の戦いがある。

に回復するので、お勧めです。

以上の項目は、〝すべて行え〟というものではありません。自分が取り入れられそうなものだけでも挑戦してみてください。

新人に求められるのは意欲

現在の不況社会は、どういう人材を求めているのでしょうか。もちろん即戦力となる人は大事です。私は、それ以上に、「意欲」のある人間が必要とされていると思います。

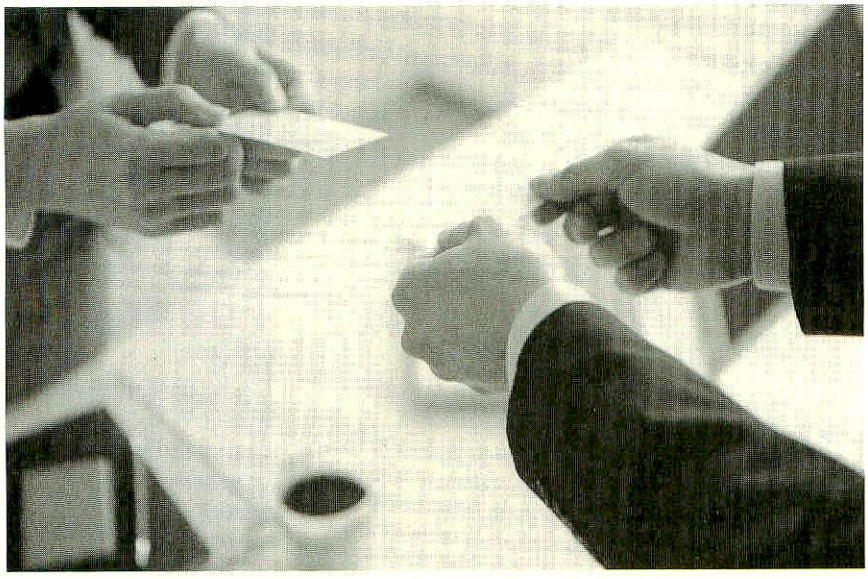
社会人になることは、〝1年生〟になるということです。先輩は自分より仕事ができて当たり前。どんなに優秀な新人でも、〝自分は1年生なんだ〟と自覚し、謙虚に、素直に教わる気持ちが大切です。

逆に、「私は何でもできます」では、上司が不安になります。まずは、自分ができることは何か、まだ分からないことは何かを理解してもらうことが必要でしょう。

上司が、〝1年生〟であるフレッシュマンに、いきなり成果を求めたり、ハイレベルな実務能力を要求したりすることは、あまりありません。だって、皆さんはまだ〝新人選手〟なのですから（笑い）。

皆さんを鍛え、育てていくことが、上司の任務でもあります。ですので、新人に求められるのは、実力面よりも、意欲なのです。

また、「同僚」「上司」という関係も、おそらく初めてでしょう。その人間関係で悩まない人はいません。むしろ、苦手な人がいるのが社会です。その人たちと、どううまく付き合っていくかを価値創造していくことで



誠実に勝る外交なし。初対面での緊張の瞬間

す。

よく、現状だけを見て、〝私は上司や先輩に期待されていない〟と思い込む人がいます。でも、よく考えてみてください。あなたに期待をしていなければ、この不況下にわざわざ採用するはずがありません。

人にも仕事にも誠実に

「やりたかった仕事と違う」という悩みは、フレッシュマンにとって避けて通ることのできない道なのかもしれません。一般企業に勤めていたころの私もそうでした。

人と会うのが好きで、営業職を希望していた私の1年目の配属先は、人事。同期のほとんどが営業で会社を飛び出していく中、私はひたすら、数字とパソコンとにらめっこ状態。〝何でこんなに自分に合っていないところに配属されたんだろう〟と沈んでいました。

ある日、人事の仕事が好きで働く先輩の姿を見て、〝この仕事で得られる喜びって何だろう〟と考えるようになりました。私の場合、その喜びは「ほかの社員が働きやすい環境を整えている」ことだと気付きました。以来、仕事に対する姿勢を変え、業務効率を上げることなどの目標を立てました。苦手な仕事でも、一生懸命やったことが、今の土台になっています。

新人は、仕事を選べない場合がほとんどです。それでも、目の前の人や仕事に誠実に当たっていくことで、自身を磨くことができるのです。

すべてが挑戦であり、成長の源です。フレッシュマンらしく、新鮮な心で体当たりし、いろいろなことを吸収してください。皆さんの社会での大活躍を、心よりお祈りいたします。

池田名誉会長の指導

現実の社会は、矛盾と葛藤の混沌でありながら、しかも秩序と倫理を保っている。この社会を成り立たせている根幹は、「信用」「信頼」といってよい。

それは、交わした「約束」を守る、「約束」を一つ一つ誠実に遂行する、その行動でしか築き得ない。

顧客と約束した期日を守る。上長と約束した業務を適切に処理する。

自分自身と約束した目標を完遂する――仕事には、すべて「約束」という行為が含まれる。

たかが五分、たかが紙一枚、たかが数字一つであっても、そこに約束があれば、決しておろそかにできない。これが仕事である。

連載「私が信心を継承した時」

この信心には現実を変える力がある

伊藤貴之
新潟市　男子部部長

幼いころから、〝この信心は、正しいんだろうな〟とは思っていました。だからといって、好きにはなれませんでした。勤行の時、少しでも読み間違えると、母からすぐ注意されたりしたからです。

一番、強く反発したのは、高校2年生の時でした。サッカーが得意で、高校もサッカーの名門校に入ったのに、レギュラーから外れたのです。サッカーを続けるかどうか、真剣に悩んでいた時、母が言うのです。「題目あげれば、いい方向にいくよ」と。

カチンときました。〝なんでもかんでも、信心で片付けるな〟との怒りが込み上げ、「一生、信心はやらない」と告げたのです。

転機が訪れたのは、結婚し、生後まもない長女が、アトピーになったことでした。体中にかき傷をつくりながらも、かゆくて、眠れず、泣きじゃくる娘。親として、見ていられないぐらい、苦しみました。

相談したのは、母でした。母は、私の娘を心から心配してくれました。そして、言うのです。「もう、信心しかないんじゃない。この信心で、乗り越えられない宿命なんて、ないのよ」と。

母の言葉が胸に響きました。いつも題目をあげていた母でした。ずっと信心に無理解だった父を、入会へと導きました。もう二度と手は動かせないだろうと言われた大ケガも、母は信心で乗り越えてきました。そうした母の姿が、次々と思い出されました。

藁をもつかむ思いで、御本尊に祈り始めました。自分でも驚きました。長女のアトピーは、みるみる回復し、半年ほどで治ったのです。

〝この信心は正しいだけじゃない。現実を変える力がある〟。母のおかげで信心の確信をつかむことができました。

信心の体験で確信をつかむしかない

伊藤啓子
新潟市　支部副婦人部長

〝必ず信心に目覚めさせてみせる〟。そう強く決意したのは、昭和59年、新潟県の文化祭で初めて池田先生とお会いした時でした。〝親として、わが子に残せる財産は、信心しかない〟と、強く確信したのです。

私の言葉が強すぎたのか、息子は成長するにつれ、信心に反発していきました。

高校2年生の時、サッカーを続けるかどうかで、息子と言い争いになったのが、そのピークでした。

この時、私は思いました。〝もう、この子には信心の体験をつかませるしかない〟と。以来、信心のことで、あれこれ言うのをやめ、〝どうか、この子に、信心の体験をつかませてください〟と祈りに祈ってきました。

ずっと信心から遠ざかっていた息子に転機が訪れたのは、孫娘がアトピーになった時のことでした。見ていて、かわいそうでしたが、むしろ、信心の確信をつかむチャンスがきた、と嬉しくなりました。

息子が相談に来た時、私は自分の思いを、体験を、語りました。息子なりに感じるものがあったのでしょう。この時は、素直に私の言葉を受け入れてくれました。

嬉しいことに、半年もしないうちに、孫娘のアトピーはすっかりよくなりました。しかし、それ以上に、〝息子夫婦が2人して御本尊に向かっている。こんなに幸せなことはない〟と、涙がこぼれる、感謝の日々です。

広布のロマンを語り合う貴之さん㊨と、母・啓子さん

読者の広場
We've Got Mail

私の入会記念日

「大白蓮華」2月号の「鳳雛よ未来に羽ばたけ」を読み、感動の事実を知りました。

「1月8日は、会長にとって、忘れられない日である。この日ほど、『一人立つ正義の師子』にふさわしい日はない」

私の入会記念日も1月8日。人生を変える幕が上がった日です。私が信心しようと決意できたのは、同志との温かい出会いがうれしかったからです。

常に学び、常に前進し、常に成長する。自分が変わっていく不思議な感覚がありました。学会活動を通して、人に勝つのではなく、自分に勝っていく楽しさを知りました。

昨年の創立80周年の佳節には、創価大学の通信教育部に入学。うれしいことに入学式で初めて池田先生にお会いしました。

今の目標は、〝宇宙一〟の励ましの教師になることです。これからも、人間革命の道を走り抜いていきます。

（愛知県・羽田吉裕）

幸福への道しるべ

「信心の教科書」と呼んでいる「大白蓮華」。体験を読んでは涙し、学会指導や御書を読んでは信仰の基本、信心の姿勢を学んできました。

毎月、全ページを読了すると決意して数十年。ハイレベルな月刊誌で、〝幸福への道しるべ〟と実感しています。

先日、ある婦人部員から話を聞きました。「大白蓮華」を美容室に持ち込んで読んでいると、店長がのぞき見していたらしく、「いいこと、書いてありますね。従業員にも読ませたいわ」と言われたそうです。

私自身、今後も、「大白蓮華」を、信行学の鍛錬に、しっかり活用していきます。

（兵庫県・吉本律子）

主人公に会ってみたい！

毎月、「大白蓮華」が届くのを楽しみにしています。希望、励まし、師の心など、感動がギッシリ詰まっているからです。

「ざくろの詩」も大好きでした。かわいくて、思いやりあふれる、優しい心の主人公に、ぜひ、会ってみたいと思うほどでした。今は、3歳になる孫と、愛しさが重なります。〝後継の大人材に！〟と、願わずにはいられません。

私も、生涯、広布の道を歩んでまいります。

（群馬県・井野英子）

A Postscript 編集後記

■「師弟の勝利城」連載開始。師との原点に栄光燦たり。（伸）

■「語る」の取材で、他人への関心の大切さを再認識。（啓）

■企画。一つの会合に込める意義の深さ。師の思いに驚嘆。（真）

■少女との約束を何よりも大切にされた師の誠実さに涙。（聖）

■山形の広布の母に学ぶ。純粋な師弟の人生に勝るものなし。（隆）

■雪残る北海道で友の奮闘を取材。原点をもつ人は強し。（公）

アートディレクション／㈱トランプス
制作協力／㈱クリエイティブメッセンジャー

原稿募集

字数は500字前後。趣旨を変えずに直させていただく場合もあります。郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記。
送り先は「読者の広場」係（〒160-8070 新宿区信濃町18 聖教新聞社 大白蓮華編集部）。採用の方には図書カードをお送りします。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

The World Poet Laureate Sings

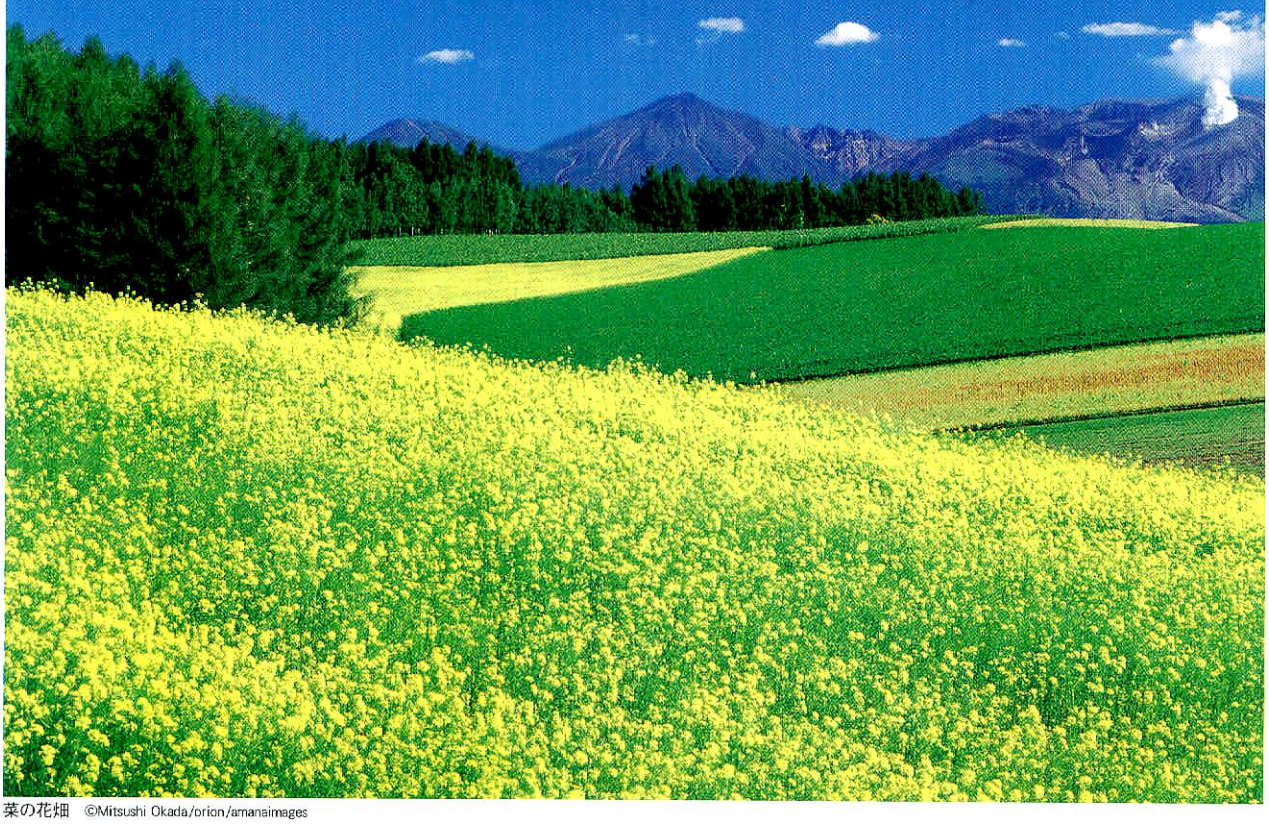
世界桂冠詩人は謳う

春だ
若人の　躍動
若人の　闘魂の舞う　春だ

春だ
若人の　苦悩の寒雪に
暖かな　金風の吹く　春だ

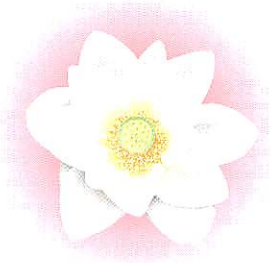
春だ
自由な春
生命の歓び
若人の胸は躍る
春は　間近だ
地球の春も
人類の春も

「春」（1951年、23歳）



菜の花畑　©Mitsushi Okada/orion/amanaimages

大白蓮華
昭和20年1月18日 第9種郵便物認可 平成23年4月1日発行(毎月1回1日発行) 発行人／松岡 修 発行所 聖教新聞社 〒160-0020 東京都新宿区信濃町18 http://www.seikyonline.jp
平成22年[illegible]



The Daibyakurenge

表紙写真／東京　2002年　池田名誉会長撮影

聖教新聞社
聖教新聞本社は環境ISOを取得！ 地球の環境にやさしい新聞社です

雑誌 15981-04　ISSN 0418-2650
印刷所 凸版印刷株式会社
©Seikyo Shimbun 2011 Printed in Japan

4910159810411
00190

信心の体験で確信をつかむしかない

伊藤啓子
新潟市　支部副婦人部長

〝必ず信心に目覚めさせてみせる〟。そう強く決意したのは、昭和59年、新潟県の文化祭で初めて池田先生とお会いした時でした。〝親として、わが子に残せる財産は、信心しかない〟と、強く確信したのです。

私の言葉が強すぎたのか、息子は成長するにつれ、信心に反発していきました。

高校2年生の時、サッカーを続けるかどうかで、息子と言い争いになったのが、そのピークでした。

この時、私は思いました。〝もう、この子には信心の体験をつかませるしかない〟と。以来、信心のことで、あれこれ言うのをやめ、〝どうか、この子に、信心の体験をつかませてください〟と祈りに祈ってきました。

ずっと信心から遠ざかっていた息子に転機が訪れたのは、孫娘がアトピーになった時のことでした。見ていて、かわいそうでしたが、むしろ、信心の確信をつかむチャンスがきた、と嬉しくなりました。

息子が相談に来た時、私は自分の思いを、体験を、語りました。息子なりに感じるものがあったのでしょう。この時は、素直に私の言葉を受け入れてくれました。

嬉しいことに、半年もしないうちに、孫娘のアトピーはすっかりよくなりました。しかし、それ以上に、〝息子夫婦が2人して御本尊に向かっている。こんなに幸せなことはない〟と、涙がこぼれる、感謝の日々です。

広布のロマンを語り合う貴之さん㊨と、母・啓子さん

読者の広場
We've Got Mail

私の入会記念日

「大白蓮華」2月号の「鳳雛よ未来に羽ばたけ」を読み、感動の事実を知りました。

「1月8日は、会長にとって、忘れられない日である。この日ほど、『一人立つ正義の師子』にふさわしい日はない」

私の入会記念日も1月8日。人生を変える幕が上がった日です。私が信心しようと決意できたのは、同志との温かい出会いがうれしかったからです。

常に学び、常に前進し、常に成長する。自分が変わっていく不思議な感覚がありました。学会活動を通して、人に勝つのではなく、自分に勝っていく楽しさを知りました。

昨年の創立80周年の佳節には、創価大学の通信教育部に入学。うれしいことに入学式で初めて池田先生にお会いしました。

今の目標は、〝宇宙一〟の励ましの教師になることです。これからも、人間革命の道を走り抜いていきます。

（愛知県・羽田吉裕）

幸福への道しるべ

「信心の教科書」と呼んでいる「大白蓮華」。体験を読んでは涙し、学会指導や御書を読んでは信仰の基本、信心の姿勢を学んできました。

毎月、全ページを読了すると決意して数十年。ハイレベルな月刊誌で、〝幸福への道しるべ〟と実感しています。

先日、ある婦人部員から話を聞きました。「大白蓮華」を美容室に持ち込んで読んでいると、店長がのぞき見していたらしく、「いいこと、書いてありますね。従業員にも読ませたいわ」と言われたそうです。

私自身、今後も、「大白蓮華」を、信行学の鍛錬に、しっかり活用していきます。

（兵庫県・吉本律子）

主人公に会ってみたい！

毎月、「大白蓮華」が届くのを楽しみにしています。希望、励まし、師の心など、感動がギッシリ詰まっているからです。

「ざくろの詩」も大好きでした。かわいくて、思いやりあふれる、優しい心の主人公に、ぜひ、会ってみたいと思うほどでした。今は、3歳になる孫と、愛しさが重なります。〝後継の大人材に！〟と、願わずにはいられません。

私も、生涯、広布の道を歩んでまいります。

（群馬県・井野英子）

A Postscript 編集後記

■「師弟の勝利城」連載開始。師との原点に栄光燦たり。（伸）

■「語る」の取材で、他人への関心の大切さを再認識。（啓）

■企画。一つの会合に込める意義の深さ。師の思いに驚嘆。（真）

■少女との約束を何よりも大切にされた師の誠実さに涙。（聖）

■山形の広布の母に学ぶ。純粋な師弟の人生に勝るものなし。（隆）

■雪残る北海道で友の奮闘を取材。原点をもつ人は強し。（公）

アートディレクション／㈱トランプス
制作協力／㈱クリエイティブメッセンジャー

原稿募集
字数は500字前後。趣旨を変えずに直させていただく場合もあります。郵便番号、住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記。
送り先は「読者の広場」係（〒160-8070 新宿区信濃町18 聖教新聞社 大白蓮華編集部）。採用の方には図書カードをお送りします。

本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。